

だらうと跳ね起きて來意を問ふと、高杉晋作が品川の女郎屋で桶伏の處分を受けてゐる、吾等友人相談して救ひ出さうとしたけれども、皆んな懐ろの空けつばかり、僕と大和長嶺の三人は英學修業の資金として百兩の支給を受けたるも、學事上種々の必要あつて既に其大半を消費したので、若し其残りを出すときは明日から忽ち差支へを生じて、奈何ともすべからざる窮地に陥る、聞けば晋作の父は、晋作が前非改悛の上坂國せんとする時には、金子の必要あるべしとて貴君に若干の金子を預けたといふ、晋作も既に前非を悔いて僕等と共に英學修業に従事せんとするの折柄ですから、預り金のうちから必要の額だけ貸していただきたいのです、と言つた山縣は、困つた事をしたものだ、しかし救ふ道があれば救はねばならない、して金子は幾ら種々の事だ、聞くと、五十兩いりますと答へると、山縣は、小忠太から金を預つたのは事實だ、晋作にして眞に前非を悔悟し、足下等と共に將來英學修業に勉勵するの意あらば、足下の望みに應じて目下の急を救ひ遣はさう、足下は果して晋作の將來を保證し得るかと言ふので、井上は固く之を誓つて五十兩の金を受取り、合せて百兩を懐にして、喜び勇んで朝陽亭へと急いだ。

破天荒なる喧嘩仲裁策

ところが途中有吉熊次郎が呼吸をきつて急ぎ來るのに出合つた、有吉が曰ふには、高杉と久阪とが大激論をおツ始めて、如何に止めても聞き入れないから、早く君に歸つて貰はうと思つて、藩邸へ行く途中だと、井上は之を聞くと、宙を飛んで有吉と共に駆け出した、さうして高杉と久阪の主張するところを聞くと、久阪は、今回の企ての如き無謀の事をやるよりは、同志が一致して正々堂々の態度を執り、眞の攘夷を實行すべきであると論じ、高杉は、久阪の論を以て迂濶千萬となし、是非共此企てを執行せんと主張し、兩々相譲らずして、相互の激論既に極點に達してゐた、高杉は井上に向つて曰く、久阪は漢籍の學力あるも、時勢を達觀するの識力なく、頻りに迂愚なる意見を吐いて、僕等今回の舉を阻止せんとするから、僕は一刀の下に彼を打果たしてやると憤然柄を握つて久阪に迫る、久阪も亦屈せずして曰く、今回の舉を執行すれば不日幕府の罪人となつて斷頭場裏の露と消えるの覺悟がなくてはならぬ、僕は既に其覺悟があるから一命は惜むに足らない、斬るなら斬つて見ると、互に相迫つて容易に制止すること

の出来ない勢である、そこで井上は大盃でもつて鯨飲し、酩酊の勢ひで嗷嗷つて曰く、僕は非常に苦心して百兩調達して来た、君等は僕の心を察しもしないで酒を飲み、其揚句に争論を始めるとは何事だと言ひつゝ、席上に陳列した膳碗皿鉢の類を手當り次第に投げ飛ばすの大暴行高杉も久阪も此勢ひに吞まれてしまつて、却つて井上の暴行を止めるといふ有様、二人の激論は自ら消滅に歸した、是に於てか會合の人々は金澤の一舉に同意し、翌十二日の夜を以て、神奈川驛の旅店下田屋に會合することを約して散會した。

勅使の諭して暴舉中止

井上は其夜高杉大和長嶺と共に土藏相模で一泊し、六十兩の勘定を支拂うて、殘金は金澤行の旅費と用心金に充て、十二日の午後四人相伴うて下田屋へ行つた、同志の人々も皆約束通りに来たので、十三日の曉一同金澤へ行かうと、各々準備に取りかゝつてゐた折柄、勅使三條實美、副使姉小路公知の使者として、松延六郎といふ人が下田屋に來り、同志の士に面會を求めた、そこで高杉が出て迎接し使命の如何を問ふた、松延曰く、君等は攘夷の實を擧げんと欲

して密に計畫する所あり、既に此所まで進發したと聞いた、其志は誠に感すべきであるが、しかし今や兩勅使が江戸へ來て幕府の決心を促さんとせられ、入城の日も近きにあるの今日、君等の企てを斷行するときは、朝旨貫徹の妨害になるのみならず、幕吏に逮捕されて身を殺すは明かだ、今の時に當つて君等の如き有爲の志士を失ふのは、國家の爲に大なる損失である、どうか暫く義憤を忍んで、幕府が攘夷の勅を奉ずる時期を待つてくれ、是れ兩勅使が拙者を特派した所以であると、兩勅使署名の書面を示した。

高杉は使者の陳述を聴き、且つ書面を見てまだ何とも返答しなかつたところが、井上は傍らより大聲を發して、高杉聴くな聴くなと連呼し、他の人々も服従の色なく意氣頗る軒昂の有様に使者の松延も氣味悪く感じた如く見受けられた、然し勅使からの使者なれば、高杉は鄭重に應接して、委細承知の旨を答へて使者を歸らした。

その後で色々評定の結果、今回の企てを中止して、代々木の齋藤彌九郎の別荘に潛み、再學の相談をしようといふことになつて、一同が神奈川の驛端れに來た時、山縣半藏寺内外記の二人が、世子の命に依つて一同を招致すべく來るのに出會ひ、蒲田の梅屋敷へ行つて世子より懇

に諭された、同志一同世子の言葉を聞いて皆泣いた、獨り高杉は一滴の涙も流さず昂然として今回の舉に及びたる旨趣を明細に具申した、それから別席で酒を賜はり、櫻田邸へ歸ると、西北隅の物見所に收容されて謹慎を命ぜられた。

伊藤博文と一心同體

外人襲撃の一擧は世子の説諭に依つて之を中止するの已むなきに至つたが、井上等同志の人々は、百折不撓の精神を以て、必ず攘夷の實を擧げ、上は毅慮を安んじ奉り、下は君意を徹せんものとて、同志の團結を御楯組と名付け、盟約書を作つて互に花押血判し、其志の渝らざるを誓ひ、之を血盟書と名けた。

それから御殿山公使館の放火となるのであるが、此時以後の井上は伊藤博文と行動を共にし相携へて英國に留學中、長州藩の危機に瀕せるを知つて共に歸朝し、爾來井上と伊藤は兄弟も嘗ならざる間柄となつて幕末の政變に奔走した、即ち伊藤と井上は一身同體の形で、伊藤の行動はやがて井上の行動であるから、英國へ渡航時代から歸朝以後の井上に就いては、伊

藤博文の項に詳述したところを参照せられたく、重複を避けて茲に省略することとした。

最も誇りある歴史と遭難

元治元年、毛利家は京都九門の役と下關戦争との二問題を以て、幕府から強い談判を持ち込まれた、さうして藩論は二つに別れ、恭順を名として降伏を藩主に強ひる所謂俗論派と、何處までも幕府に對抗しようといふ主戦派とが、兩々相對して下らない、而も俗論派には重役や老臣の多くが這入つてゐて、井上等の反對派は勢力が弱かつた、九月二十五日愈々藩論を決定すべき御前會議が開かれて、井上は滔々懸河の辯を揮ひ、老臣共を相手に四時間に渡る討論を一人でやつてのけた、さうして遂に俗論派を屈服せしめて、御前會議は主戦論に決したのである、此會議の一節は井上の生涯を通じて最も誇りある歴史とされてあるから、重役や老臣を向ふに廻しての議論振は、全く當年の井上が、如何に元氣旺盛であつたかといふ事の想像が出来るくらゐだ、他にも説を立てた人があつたらうが、兎に角井上の説に依つて重役や老臣が閉息してしまつたのであるから、此時の藩論を、主戦論に傾けるまでの井上の骨折は、實に並大低

ものぢやなかつた。

井上は御前會議が済んだ後、一番遅く下城して、廣澤兵介の屋敷へ立寄り、明日からの打合せに時を過し、酒宴に移つて夜の八時頃、待受けて居た下僕の淺吉に提灯を點けさせ、廣澤の屋敷を出て一杯機嫌でブラリ／＼とやつて行く、恰度通りかゝつた一本松、不意に闇の中から躍り出た一人の武士が「待てツ」といふ聲に、井上は一步退いて身構へると、同時に「井上かツ」と尋ねるから「ウム、聞多ぢや」と答へるか答へぬうち、ヤツと掛けた氣合と共に、抜討眞向から斬りかけて来る、儲はと思つた井上は、身體を交はしたが交はしきれずに、右の頬から顎へかけて、ザクリ割込まれて、ワーツと思はず聲を立て、顔を押しながら後へ引かうとする、後から飛出した一人が、今度は足を掬つたから井上は前へバツタリ倒れた、途端に拂はれた横一文字、胴斬りにされたかと思ひの外、幸運な井上は倒れる時に、帯が緩くなつてゐた爲に、大刀の柄頭が大地に當つた機に脊中へ廻り、其上を斬られたので、ガツキリ音がして傷は重かつたが、自分の大刀のお陰で胴斬りになることは免れたのだが、刀を抜合す間もなく斬り倒されたのだから、井上は其儘四ん這ひで七八間バタ／＼バタと逃げ出した。

「それツ、早く殺つてしまへツ」と、後から押重なつて追駈ける、現はれた者は俗論派の壯士四人、突いてしまへば何でもないのだが、斬らうとばかり初めから決めて來たので、味方がある丈に却つて邪魔になつて、思ふやうには斬れなかつた、井上は十三箇所の重傷を負うたさうして僅の際を見て立上つた井上は、腰に手をやると大刀は脊中に廻つて、小刀だけは前にあつたから、それを引抜いてチャリン／＼と渡り合ひながら、横飛びに飛んだ途端に、小溝に足を落して仰向けに倒れた。

「それツ、止めを刺せ」

といふので、乘し掛つて止めの一刀、胸下目掛けてブツリと刺すと、カチンと音がして刀は外れて、大地へ二三寸突刺した、其折柄淺吉が「人殺し、人殺し」と騒ぎ立て、屋敷へ知らせる、彼處に一軒、此處に二軒と、點々にあつた屋敷から追々人が駈出して来る、井上の兄幾太郎も手槍を携へて飛付けて來るといふやうな譯で、折角是れまでに追詰めた井上に、再度の止めを刺す暇もなく、押へられては事面倒と、四人は闇に紛れて何處ともなく逃げ去つてしまつた。

疵を縫ふこと五十幾針

幾太郎が駈附けて見ると驚いた、弟は諭の如く斬りさいなまれて、早や蟲の息になつて居る、他の人に手傳つてもらつて漸と屋敷へ擔ぎ入れたが、井上は唯苦しうな息を吐くばかりで、全く人事不省、今にも息が断えなんとする有様であつた、城下へ使を走らせて醫者を迎へたが、そのまた醫者なるものが存外の篤醫者、とても是れだけの重傷に手當をする手腕は無い幸ひ其處へ見舞に来てくれたのが所部太郎といふ人だつた。

此人は美濃國の郷士で、夙に勤王の大義を唱へ、諸國を遍歴した末、大阪へ来て緒方洪庵の塾に入り、蘭書を學ぶ傍外科手術の助手をさせられて、相當に療治は出来るやうになつてゐたのだ、井上とは主義の上の友として極めて親密な間柄であり、此頃は城下に足を留めて、近いうちに醫者を開業するといつて、其準備をしてゐたところであつたが、早くも一本松の騒ぎを聞きつけて、見舞に来て見ると此有様、彼は堪りかねて「よしッ、拙者が療治をしよう」と直ぐ刀の下緒を取つて禪にかけ、燒酎を薄く溶いて疵口を洗ひながら、端の方から縫ひ出した

二人の篤醫は恰も助手と言つた形で、所先生の手傳ひをして居た、ところが是れだけの大疵を縫ふのに器械が揃つてゐない、第一に針が駄目だ、ところが早速の智慧で、恰度井上の屋敷へ二三日前から疊屋が入つてゐた、其置いて行つた針を以て縫ふたといふのだから、たとへ手術が巧いにしたところが堪つたものぢやない、殊に緒方の塾で少しぐらゐる稽古したからといつて決して外科の名手といふのではなく、おまけに使ふ針が疊針ときてゐるから、井上の身體には滅茶々に創痕が残つて、裸體になると、見るも無慙な當時のことを思はせる程、實にひどかつたのも無理はない、それでも、都太郎が居たから井上の命は助かつたのだ、五十幾針縫ひ終つたら夜が明けた、つまり一晩中縫つて居たやうなもので、手腕のある仕立屋なら單衣の三枚や四枚は縫つてしまふだらう、醫者の氣も長いが、見て居る井上も随分氣が氣で無かつた。療治は終つたが井上は全く人事不省、追々に遣つて来る見舞の客も、此有様を見ては、誰も彼も井上の命はモウ無いものと諦めて、同志の連中は涙を流して歸つて行く、蔭で喜んだのは俗論黨の連中で、これから高杉晋作や廣崎兵介を始め、其他の奴等を追々に片つけて行くのだといふやうな事を口走り、山口から萩へかけての城下は、再び俗論黨の勢力になつてしまつた。

寝食を忘れて母の看護

何しろ十三箇所も斬られて、出血は甚だしく療治は思ふやうでない、後の手當も十分とはいへない、殊に本人は人事不省で湯水も咽喉へは通らない、如何に最負な目で見ても、これでは到底助かるとは思へまい、時々苦しうな呻き聲を出してゐる井上の容子を見て、兄の幾太郎は井上の枕許にジツと坐り、暫くは弟の苦しうな顔を見てゐるが、逆も我慢が出来なくなつて、口の中で何か頻に獨言のやうなことを言つて、やがて刀の柄に手を掛け片膝立て直した、途端に襖を開けて母のお勝が入つて来て、幾太郎の常ならぬ顔色を見ると何をしてゐただと問ひ詰めた。

幾太郎は、如何にも弟の苦しむ此態を見ては、兄の情として堪え難く、寧ろ一思ひに刺殺さうかと思ひましてと答へた、母親は、

「エツ、何といふお前は恐ろしいことをする、まだ息のある弟を刺殺さうなぞといふのは容易ならぬことぢや、殊に妾の眼の黒いうちは、假令如何なる事があつても、さういふ事は

させませぬ聞多は妾の悴ぢや、他の者には手を付けさせぬ、天命が来て死ぬのならば據な
いが現在の兄が手にかけるとは何事か」
幾太郎は恐れ入つた、母親は妾の一心で屹度助けて見せると、それから必死になつて看護を始めたが、其甲斐あつて三日目には「水を呉れる」と言へるやうになり、水を吞ませて見ると咽喉へ通つた様子、それからは一層苦しさを増したやうであるが、時々刻々に氣がついて来て所醫師の見込では、此具合なら、命を取りとめるだらうと言ふまでになつて来て、一家の者は愁眉を開き、一層其看護に努めるやうになつた。

藝妓の記念で一命を拾ふ

井上が仰向けに倒れた所を、止めの一刀を刺さうとした時に、ガチンと音がして刀が外れた其暇に四方から人が集つて来たので、二度目の止めを刺すことが出来ずに、曲者は逃げて、井上は命を拾つたのだが、此刀の外れたのは何であるかと云へば、之に就いて一場の艶話がある。其頃京都の祇園に舞妓君尾といふ藝妓があつて、評判の名妓で、井上と深く契つて居た、と

ところが井上が愈々英吉利へ洋行することになつた時、君尾に別れを告げるつもりで窺に會ひに來た、勿論眞實のことは言へないから、嘘八百の出任せで、或る事情の爲に遠い國へ行く再び生きて會へないかも知れない、といったやうなことを聞かせたものだ、すると君尾は頻に別れを惜んで「さういふ譯なら何うか記念の品を置いて行つて下さい」と言はれて、井上は持つてゐた紙人を與へ、其代りに君尾からも記念を貰ふことになつて、君尾が渡したのは一面の鏡であつた、其頃の婦人は、鏡を女の魂としてあつたので、大概の女は常に懐にしまつてゐた、其鏡といふのは硝子ではなくて、金屬の鑄物を磨き上げたものである、それを井上が懐にして洋行し、歸つて來てからも、其鏡だけは何時も懐へ入れてゐた、恰度閑討に遭つた時、此鏡は大切に持つて居たので、仰むけに倒れた時、止めの刀を刺されたが、幸ひに其鏡が滑れて胸の所へ來て居た所を突かれたので、ガチンと音がして刀が外れたのである、つまり鏡の爲に助かつた命だから、藝妓買ひも斯ういふ點から考へると、まんざら無駄なものではない、藝妓買ひの効能は井上に於て吾れ其著るしきを見るか。

兎も角井上は命運の強い人で、大刀の柄頭が脊中に廻つて居た爲に、横一文字の致命傷を免かれ、鏡の爲に止めを刺せず、素人に等しき所都太郎に療治されたなど、全く運の好い人で三十歳にして斯んな重傷を負ひ、出血も甚だしかつたので、大概の者なら弱つてしまふのだが、彼は八十歳まで生き延びたなど、實に珍らしい命運の強い人であつた。

入牢申附られ切腹の覺悟

高杉晋作が萩の城下から駈附けて來て、井上を見舞つた時は、まだ本當に正氣にはならなかつた時であつた、高杉は御前會議が濟んで一旦萩の城下へ引取り、これから先の働きをする準備に取掛つてゐると、井上遭難の事を耳にし、偕は俗論黨に先んぜられたか、此上は前途の事も分らぬと思つて、井上の所へ來たのだが、死生を約した友の井上が此有様に、流石の高杉も落膽して、枕頭に坐つた儘、腕を組んで其様子を見てゐるばかりであつた、兄の幾太郎が井上を揺り起して、高杉の來た事を告げると、漸く頭へ通じたものか、僅に目を開いて高杉の方を見る、けれども十分に高杉の顔は見えなかつたらしい、高杉は此有様を見てモウ胸が一杯になるばかり、フト見れば井上の右の手が動いて居る、疊の上へ何か字を書いてゐるやうであるか

ら、能く能く見ると「通」といふ字を書いて、頻に手を振つてゐるから、皆は此九死一生の重傷を負うてゐて、自分の一身が斯うなる以上は、お前の身も危いから、早く遁けて一時身を隠せといふ意味かと思へば、益々其氣象の確かなのに感心すると共に、井上の情愛の厚いのに感じて、彼は男泣きに泣いてゐる。

其日は高杉も一度萩へ引返して、これから頻に俗論黨の跋扈するのを抑へて、正義黨の勢力の恢復を圖つたけれども、遂に力及ばずして、高杉の一身は時々刻々に危くなつて来た、最早此上は萩に止まつて俗論黨の爲に犬死をしても詰らないから、一時は身を遁れて再び時機の来るを待たうといふ決心になつて、直に山口へ来て井上を見舞つた、此時は井上も餘程快くなつて、人の見別けも付くやうになつて居たから、高杉は自分の決心を告げて、下關の方へ行くことにすると話した、井上は、下關も俗論黨が跋扈してゐるから、十分注意したまへと言ひ、高杉の示せる七言絶句の紙を履んで、一首を作つて、曰く、

元治甲子冬、高杉西行將避難於九州、

臨去訪予病床、言其志、即賦此叙別

身被數創志未灰 何時驟起拂氛埃

喜君雄略存方寸 病苦忘來且侑杯

斯ういふ事情で、高杉は一度下關へ立去つて、それから筑前の博多へ逃げ延びたが、井上は次第に創も癒えて、もう庭前の散歩ぐらゐ出来るやうになると、俗論黨は、井上を放任して置くのは危険で叶はないから、藩命を笠に到頭入牢を申附けてしまつた、井上は一度野山の獄に繋がれて、更に親類の座敷牢へ移されることになつた、どうせ全然創の癒るのを待つて、切腹でも申附けるのじあらうが、井上も斯うなつては仕方がないから、唯藩命の下るのを待つて、自刃するの覺悟をきめてゐた。

座敷牢から救出された

元治も押詰つた年の暮、俗論黨は遂に幕府の命に従うて、毛利侯父子を寺院に押籠め、三家老には切腹せしめ、其他の重臣も京都の政變と下關開戦の責任を負うて、それ／＼に切腹したといふ事を聞いた高杉は、一身を抛つて君公の危きを救はねばならぬと決心し、博多を遁れて

再び下關へ引返し、當時奇兵隊の監督をしてゐた山縣狂介と相談して、高杉は海路から、山縣は陸路を取つて萩の城下へ攻寄せた、同勢千人近くあり、俗論黨は三千人以上の兵が居たので人数の上から言へば無論問題にはならないが、高杉は戦術の名人で、山縣は一廉の武夫であつたから、幾度か勝敗はあつたが、遂に最後の戦で指揮官を討取り、それから萩城を乗取つて毛利侯父子を寺院から救ひ出し、茲に藩論を一變させて、幕府に向つて公然戦ひを挑んだのが原因で、二度目の長州征伐が始まつたのである。

井上は卒に入つて居て此騒動を知らなかつた、既に創も全然癒つたけれども、座敷牢へ入られて居て身動きも出来ない、唯空しく藩命の下つて切腹の日の来るを待つばかりであつた、ところへ藩の役人が遣つて来て、何か知らぬが萩の城下へ連れられて来た時は、流石の井上も夢かとばかりで、切腹を申附けられる場合は、其取扱ひが全く違ふのみならず、城内各所に集つてゐる者は、井上の姿を見ると関の聲をあけて、其無事を祝するといふやうな譯で、何が何やら薩張り解らず、夢路を辿るやうな心地して連れられて来た、ところへ高杉や伊藤が出て来て、

「マア宜かつた、貴様も命運の強い奴、吾等も亦命運が強く壽命があつたればこそ、君公の危急も救ひ、藩の不名譽も雪ぐことが出来たのである、サアこれから一緒に力を合せて幕府と雌雄を争ひ、都合に依れば大阪までも押出して、天下を争つて見たいと思ふ」
これを聞いた井上の喜びは一通りでない。

「ウム、さうなりや益々面白い、併し俗論黨の奴原は全體どういふ事になつたのか」と問はれて、高杉は是れまでの成行を悉く打ち明け

「俗論黨は皆屏息してしまつて、君公は總て吾等の意見を御用ひになるから安心しろ」と、聞いて井上は益々喜び、是れから高杉に案内されて毛利侯父子に面謁し、それら、藩廳役目も定まつて、全く正義黨の勢力を以て藩論を定めることになつた、此時分から井上の藩に對する勢力が段々加はつて来て、流石に聞多は偉いといふ賞讃の辭は、到る處に起きて来た、井上は此機會を捉へて、高杉や山縣と共に、何處までも強硬な態度で進んで行つたのが、井上の晩年の位地を成す原因となつたのである。

博奕に負けて一文無し

井上が高杉や伊藤等と共に馬關開港説を唱へた爲に、長府の報告隊の者等に暗殺されやうとする危険が迫つて、彼は斯る頑陋輩に遠ざかつて暫く他國に潜伏し、傍ら天下の形勢を探り、時機を待つて居る方がよいといふので、腹掛半纏の人足姿に身をやつし、五十兩の旅費を懐にして馬關を脱し九州に渡つた、彼は先づ九州の形勢を視察して、それから四國へ渡り、漸次京阪地方に赴いて幕府の事情を探らうと考へたのである、そこで豊後の別府へ着いて一旅店に泊つた、ところが旅店の主人は、井上が五六日間何にもせずゴロ／＼寝轉んでゐるのを見て、不思議に思つて生國や職業を尋ねた、井上は馬關の住人で土方人足であると答へると、主人の言ふには、當州長州人に對しては探偵の眼が大に光つてゐる、お前さんのやうな人體では別に嫌疑の及ぶこともありませまいが、それでも何時如何なる事件が生ずるかも知れない、且つ何の職業なく、宿屋に居食してゐるは、今に生活にも困るやうになりませう、早く一身の落着を定めた方がようございますよ、此土地には博徒の親分某なる者があつて頗る義侠心に富んでゐる

し、自分も大勢居るから、一ツ行つて身の振方を頼んで御覽なさい、屹度面倒を見てくれるし、又何かの職に就く便宜を得られると思ひますしと井上は深く其厚意を謝し、どうか其親分に紹介してくれと頼んだ、すると主人は早速井上を伴れて親分の宅へ行き、自分にしてやつてくれと談じ込むと、親分は、快く承諾して、即日親分子分の契を結ぶべく盟約の盃を取交して、井上は其家に寄食することゝなつたところで、子分等は、博徒の常として暇さへあれば直ぐ丁半争ひ、井上も勢ひ其列に加はらなければならぬ、されど博奕など少しも知らぬ彼は、二三日の間に五十兩の金をスツカリすつてしまひ、全く一文無しになつたので、親分はそりやア可哀相だと、毎日天保錢一枚を小遣に呉れた。

井上は斯る窮境に陥つて、暫く親分の家に厄介になつてゐるが、或日別府の温泉場へ入浴に行つた、すると杵築藩の士夫婦が娘を連れて入浴してゐて、井上の身體に數ヶ所の大きな刀疵があるのを見ると、その疵はどうしたのだと尋ねるので、井上は、實際をお話するのは耻かしい次第だが、若氣の無分別から姦通をやつて、本夫の爲に斯んな目に逢つたのですと胡麻化した、お國はどちらですと聞くから、下關の生れで土方をやつてゐると答へると、それちや

先年の攘夷戦を知つてゐますかと話しかける、無論知つてゐます、私は土方だから幕場を築いたり、大砲の運搬などもやりました、又戦争中は軍夫に使はれて、弾薬や糧食の輸送などもやりましたと、嘘八百を並べ立てた、それぢや一ツ戦争の有様を聞かせて下さいと言ふから、井上は嘘實相交せて面白く戦争談をしてやると、士は大喜びで私の旅宿へ遊びに来てくれと誘ふので、井上は士に伴はれて旅宿へ行き、戦争談の續きを喋舌つた、士は井上の快活な性質がお氣に入つたと見えて、私は明朝鐵輪の方へ轉浴しようと思ふ、お前さんも支障なければ一緒に行きませんかと勧めるから、井上も無事に苦しんでゐる際とて、喜んで承知した、さうして約束の通り翌朝其の旅宿へ行くと、士は十四五貫もあらうといふ兩掛を出して、之を擔いで行つてくれといふ、井上は驚いた、しかし土方業だと言つた以上、今更ことわる譯にも行かず、仕方がないから其兩掛を擔いで、三里ばかりの山路を跋涉し、鐵輪へ着いて荷物をおろすと、肩の肉は腫れ上つて痛くて堪らない、二三日は此處に滞留し、二分の謝禮を貰つて別府に歸り、相變らず親分の家に寄食してゐると、馬關から急使が来て、伊藤から直ぐ歸國するやうにとの手紙を持つて來たので、早速山口へ歸り、それから伊藤高杉井上の三人は、木戸孝允

と屢會談して、どうしても攘夷の陋見を打破して、開國進取の方針を取り、さうして幕府を倒し、大政を王室に還して、日本の統一を圖るより外には方法は無いといふ事は、みんなの議論の一致するところであつた。

伯爵板垣退助

伯は夙に自由の大義を唱へ、民権の擴張に努力せられ、遂に立憲制度の樹立に奏功し、功を以て伯爵を賜はり、自由黨を組織して其總理となり、明治二十五年には内務大臣の椅子を占め、三十一年憲政内閣の組織さるゝや、再び内務大臣に任ぜられた、其後は樞密顧問官となつて此世を終つた。

温厚な父と貞淑なる母

其祖先を尋ねれば、實に胤を武田信玄の驍將板垣駿河守信形に受けて居る、そして此信形は天文十三年八月、上田原の戦に武田の軍が利なく、遂に敵の爲に破られて、信形は一死其難に殉じて名譽の戦死を遂げた、信形の遺子正信は遠州掛川に難を避け、乾備後といふ人を介して

山内對馬守一豊に仕へることとなつた。
 處が主君山内一豊が封を土佐に移されるやうになつたので、正信も殿に従つて共に移り、采地千二百石を賜はつた、然るに此正信には子供がないので、主君一豊の從弟に當る刑部一照の次男正行といふ人を迎へて、家を繼がせる事とした、先づ斯うして家柄文は繼がれたが、如何せん血統が絶えた處より、采地を減せられて三百石に下られてしまつた、此時からして彼れの家系は主家と同じ胤流となり、そして正行より正祐、正方、正清、正健、正聰、正武となつた、此正武が退助の祖君で代々相承けて、馬廻役を勤め、此正武の嗣子正成といふ人も至つて濃厚で文武の兩道に秀でたが、餘り凝り過ぎた質の爲めに後には發狂されてしまつた、母は同藩の中老林勝重といふものの女で、頗る賢才貞淑の聞えが高く、晩年まで狂氣の夫を能く看護し、且子弟の薫育に力を盡されたのである。

妹の晴衣を乞食に與ふ

伯退助は天保八年四月十七日を以て、此父母の間に生れた、幼名は猪之助、諱は正形、退助

は通稱である、元來彼の家は代々驅幹偉大の人許り出来たが、中でも君が先考なんぞは、體量三十餘貫もある大男であつた、夫れに何故此退助はあの様に瘦せて居るかといふに、母堂の方の性を受けたからである。
 彼れ幼ない時より頗る人を憐む心が深く、常に弱きを助け強きを挫き、克く幼を導くといふ風であつた、恰度ある日のこと、一人の乞食の婦が乳兒を抱へて彼れの門邊に立ち、いとも憐れけに食を求めた、其時は恰も嚴冬で、ヒュー／＼と吹き荒ぶ山嵐は、路上の砂を卷いて、寒氣は彌が上にも尙一層烈しく、肌身を貫き、直ちに粟を生ぜしむとでも形容したい位に寒かつたのである、處がその乞食は薄い衣服のほろ／＼のやつを纏ふて居り、乳に泣く可憐の兒と寒に慄へて居る此婦乞食の有様は、資性慈仁の心に篤き彼れが涙を招いで、無限の憐情に堪へざらしめた。
 ア、可憐さうなものだ何なりと與へて遣りたいと思つたが、生憎何も持つて居らなかつたといつて此儘乞食に何も呉れずに去らすのは不愍の至りであるし、夫れに又復ヨ、と許り泣き出す乳呑兒の聲を聞くと、愈々以て斷腸の思ひに堪へかねて、借も不幸な親子のものであるわい

と、直ちに奥へ来て見ると、恰度此時彼の姉君が他へ出る時に着ける立派な晴着があつたので、目に入つた彼れは何の分別もなく、忽ち夫れを持つて来て乞食に與へやうとした、すると乞食も其衣服が餘り立派であつた上に、まだ年も行かない兒童が呉れやうといふのであるから躊躇して取らなかつたのを、彼れは「なあにそんなことは心配しなさんな、宜いからお持ち、そして其衣服を着て早く寒さを凌いだ方がよい」と辭退する乞食に持たしてやつてしまつた。話は變つて伯の姉さんが、他から歸つて来て、大切の晴着が無いので弟に尋ねて見ると、前のやうな事實、サア大變、姉さんは弟を怨み出した、弟の退助は姉さんに向つて「なんだ、アンナ衣服の一領や二領、ソナに惜がらなくても可いではありませんか、乞食が餘りに寒がつて居た故、不意で堪まらず呉れてやつたのだ、姉さんはあれが無くつても他に宜いのが澤山あるから、別に困りもしませんでせう、處であの乞食は姉さんの衣服のお蔭でどの位助かるか知れやしません」と答へた、夫れを聞いてゐる母堂は、悻の退助が此行爲を大ひに賞めて汝は屹度此板垣家の名を起す様な、豪い人物になるとて非常に喜ばれたとか。

實に梅檀は燦燦からして香しいといふが、後日明治の昭代に起つて、自由民権の爲に奔走盡

捧せられ、長へに朽ちない英名をば、我帝國の歴史の上に止るめやうになられたのも、又正に故なきにあらずだ、而して彼れが非凡な英資の、天を掀し、地を掲ぐる如き大精神は、既に業に此時代より徴されたのである。

敬服すべき母堂の教訓

前述べた如くに、母堂は天成の賢婦人で、慈仁博愛の徳に富まれ、よく子弟を導いて教訓怠りなく、且自ら家政の任に當られて萬事を仕切つて居つた、就中伯は一人息子の事ではあり、従つて母堂も子の將來にと種々の教訓を盡された、殊に伯の家は采地僅かに三百石しかなかつたが、何れも豊腴の土地許りであつた故、藩中でも可なり祐福の家柄、夫れが爲に常に幼兒を教訓の方針として、卑しい心をば起させないやうに力められた、ソナ風で伯も菓子でも欲しい氣風は出す、自身が何でも貰ふと必らず夫れを友達に頒けてやり、少しも意に介しない、兎角かういふ鹽梅式で、人を憐むといふ仁愛心が深くなられた。

其上母堂は伯の行爲に付ては、くだらぬ干渉はしない、何處迄も身を自由にさせ決して束縛しなかつた、彼れ夜分に遅くなつてもまだ歸つて来ない事があらうと、又少し位危険の遊戯をしやうと一々叱らなかつた、だが其代り若も他の兒童と争ひでもして、泣き乍ら家へ歸るやうなことがあらうものなら「家へ泣いて来るやうで、そうして豪い人になれるものか」と諭しては常に伯を勵ましてゐた、斯の如く母堂は巾幗の凡流とは、少しく異つて居たのである。

幼にして自尊心に富む

此くも進取の氣風を以て養育され居つた伯は、早くも自負の心が根強くなつた、恰度四五歳の時であつたが、或日家僕や保母に連れられて角力見物に行つた、處が其日は非常の大入で、場内立錐の餘地なしといふ有様、とても伯や家僕には見られない、尤も當時土佐の風習と致して少々資産の裕かなものは、何れも自分で棧敷を造つて見物するといふ風、伯も現場に行つて見ると、他の人々が銘々自家の棧敷で、面白くさも愉快さうに見て居るので、忽ち癪にさはり家僕に向つて、「人は皆んな棧敷で見居るのに、己の棧敷がないのはどういふ譯だ」とすね出

し、己は棧敷でなければ見ないといふて、どうしても黙き入れない、到頭其儘家へ歸つて了つた。

家僕や保母は大に持て餘し、仕方がないから伯の後へ付て歸宅し、其事を母堂に語つた、すると母堂は、「成程男兒の氣象は將にさうなくてはならぬ、幼ない兒童が此精神を挫いて了へばもう夫れつきりで到底出世は爲ないから、あれのいふ通り仕てやんなさい」と命ぜられた、そこで家僕も早速棧敷を建てることに手筈を致した、母堂も亦家人を指揮して忽ち何十人かの人足を集めさせ、ドシノと命令して一夜のうちに建てさせてしまつた、然かも此棧敷はなかなか堅固に出来たもので、通常なら一週間位かかる構造であつたといふ話。

之れを目撃した伯は、非常に満足して、明る日は此棧敷に上つて意氣揚々、恰で大人の如くに角力を見物した、此一事に徴しても、如何に彼れが自尊心に富んで居たかを知り得られる、いつしか此話が藩内の人々に聞き傳へられて、「板垣の倅は今に豪いものになるわい」と、噂し合ふたさうである。

大人を驚かした彼の機智

彼れ段々成長して寺小屋に入る事となつたが、平素我儘一遍に育つた伯の事故、夫れは／＼頗るつきの腕白もので、なか／＼従僕の話などを聞かばこそ、手習の稽古に行つても、同じ朋輩を壓倒し、上の級のものを凌いで、師匠の言ふことなどは守らなかつた、稽古の途中で表へ飛び出しては犬の噛み合ひをさせたり、又友達を集めては相撲を取つたり、爲ることが悉く勝負ごと許りであつた。

だが頗るの腕白小僧も、時には又機智を以て大人を驚かした事もあつた、或時親類に病氣のため言語が不通となつた者があつて、家人は何れも其看護に困つて居た、すると伯は其家へ病氣見舞に往かれたが、病人が口をきく事の出来ぬといふ話を聞いて、忽ち即答していふのに、
「何もそれ位なことに、手古すらないでもないか、予が宜い法を教へて遣らう」と、
畫工に命じて日常使用すべき種々の品物の繪を大きなものに畫かせ、之れを病人の枕元の壁に懸けて置き、若し病人が入用の品あらば、鞭で其思ふ繪を指させ、そして用を便せさせたといふことである。

腕白時代悪戯の教々

伯が腕白時代の悪戯は澤山あるが、先づその中でもコンナ可笑いことがあつた、或年の夏、隣家の林といふ人の倅と二人で、池の端へ出かけて蜻蛉を捕へながら遊び居つた、すると夏の日のこととて、忽ち一天墨を流したやうに變つてポツリ／＼と大きな雨が降り出したと思ふと、やがてゴロ／＼ピカリ／＼とやつて来て、雷雨盆を覆すとも言ふどしや降となつた、そこで二人は大急ぎに樹下の茂みに駆け込んで、夕立のやむのを待つて居たが、雷雨は益々激しくなるのみであつた。

すると此時伯は林の倅に向つて聞くのに、「汝の家では雷を怖れる者はないか」といふと、「ウム己の家は誰でも皆んな雷を恐がるよ」と答へたので、伯は忽ち一つの悪戯を考へ出し、林に耳語して何だか相談をしたが、話が終ると二人して小石を兩の袂に拾ひ入れ、雨の合を見てそつと林の家の傍へ行き、どんな様子かと家内を覗くと、家人は何れも額を鳩めて俯

伏して居り、頗る恐惶の體であつた、そこで伯は直きそばの堤へ上つて、雷の鳴るのを待つて居ると、さあピカ／＼ゴロ／＼ザ／＼と来たので、伯はそれと林に合圖し二人して、小石を杖から出しては林の家根に投げつけると、風の烈しい處へ持つて行つて、バラリ／＼と小石が降つて来るので、いやどうも家人の驚きといつたら一と通りでない、非常に狼狽して戸外に飛び出して見ると、二度屹驚、砂礫を飛ばしたは風神だと思つて居たのに、さうではなくつて童兒の惡戯。

此時伯は家人が出て来たのを見て、此奴見付かつては大變だと、逸早くも逃げ出して姿をかくしたが、林の方は一人後にうろ／＼して居つたので、忽ち家人に見付かつて大眼玉を頂戴し散々腹叱られた揚句、コンナ惡戯ッ兒は以後の懲戒にとて到頭大きな立樹へ縛りつけられた、一方伯は其場を遁けて我家の前迄来て見ると、伯の家でも矢張り雷を怖がり、蚊帳の中へ線香を立てて、一同寄り合ふて小さくなつて居る、其時又伯の伯母といふ人も来てゐたが、頗る雷が大嫌なので、非常に怖がつてゐた、之れを覗き知つた伯はヤア伯母さんが来て居るな、此奴は一番面白い、伯母の奴を驚かしてやらうと、ソ／＼と下僕の室へ忍び込み、大きな算盤

を見つけ出して、夫れをば持ち出し、そして廊下の下へ這入り込み、雷の鳴るのをば待つて居ると、又もゴロ／＼と鳴り出す、此時を合圖に伯は床下でもつて、算盤をガラ／＼ツと鳴らした、家人は何の音であらうかと思つて、不審に且驚いた、此様子を知つた伯は一人をかしく堪らなかつた、兎角するうちに、伯の惡戯だといふことが知れたから、伯母は眞赤になつて怒り出し、伯の後を追ふて駈け出して来た、すると伯はトツ／＼と遁け出し、隣家の塙を破つて飛び越え、其塙の間から顔を出して、伯母を嘲けるので、伯母は地團駄踏んで口惜しがつかもの、どうすることも出来なかつた。

伯は其晩は近所の穴戸直馬といふ人の家に泊めて貰ひ、夜が明けてから家に歸つて来たが、伯母は屹度未だ怒つて居るであらうと思ひ、ソツト姉を呼んで尋ねて見ると、母さんが機嫌がよい故、大丈夫だとのことで、漸く家へ這入れたといふ事である、皆も伯の腕白時代、此一事でも親知し得られる。

世に珍らしき賢い繼母

伯の幼時は此くも腕白で、他にも珍らしい悪戯もしたが、併し性來伶俐な質であつたのと、又一つには母親へはなか／＼の孝行であつた、夫れ故母親も伯が行末に就いては種々と心配されてゐたものの、人生は朝露の如しで、偶々病を得て起つ能はず、恰度伯が十三歳の時、空しく世を後にして無き人の數に入つた。

そこで其後へ繼母が參られたが、伯は恰かも生母に仕へるやうに克く親み、繼母も始めは伯が腕白に困られたが、後には段々と心も知れたので産みの兒と變らず可愛がられた、コンナ具合で家庭は極めて圓滿に、世間でも非常に感心して居つたさうである。

活躍の舞臺が開展された

伯が十五六歳の頃は、只讀書と武藝の修養に是れ勉めたが、其うちに十八歳の春を迎へた、世間では頻りに尊王攘夷の論が盛んになり、少しく志ある武夫は、何れも出でて四方の志士

と交を結び、國家の爲めに奔走せられた、恰度安政二年大地震のありし時、伯は勤番の命で江戸に來られた、之れが抑も東海道を下つた最初で、此時伯は十九歳の折と聞えて居る。

江戸に來ては吉田東洋や、藤田東湖と相識るやうになり、餘りに氣焔を吐き過ぎたので、一時幽閉の身となつて、二十三歳の時迄は之といふ活動の自由も得られなだ、赦されて後又復國事に奔走せられ、萬延元年免奉公に取り立てられて、板垣の名は少しく知らるるに至つた、元より凡物ならぬ板垣、藩主に認められて、文久元年十月には江戸藩邸の會計職を仰附かり藩中でも巾の利くやうになつた、處が政變世變は著るしく、茲に機は熟して明治維新の始めとなり、大政奉還が因となつて幕軍と官兵との戦争を惹き起し、官兵は幕軍を追撃して奥羽地方に轉戦した、此時伯は參謀の重職に擧げられ、大に其功績を現はした、其際によつて亂平定の後は參與に進み、明治二年には參議に歴任して賞典祿一千石を賜はつたのである。

伯爵 後藤象二郎

幼にして父を喪ひ、母に別れて祖母の手に養はれ、祖母又死して十三歳の孤兒は叔父の虐待を受けた

が、天の成せる奇才は土佐一流の人物たる義理の伯父に認められて、黨教化に力を盡されたる海南の英傑は、板垣退助と共に國事に奔走して、民選議院の指導者となり、大同團結を起し、不利なる條約改正を排する等、偉大なる政治的功績を擧げて、五十歳にして伯爵を授けられ、選信大臣となり、農商務大臣となつた人である。

蛇と糞との投付け合ひ

芝公園に二大銅像がある、一は後藤伯で他は板垣伯であるが、彼等は共に海南の一隅に生れ而も二人の生家は相距ること僅に二町に過ぎず、親しき竹馬の友であつて、後日功成り名遂げて俱に與に伯爵を授けられ、死して後、相接して英姿を萬古に留めるといふのは、實に奇しき因縁といふべきである、後藤は板垣より少きこと僅に一歳、板垣を「ののす」と呼べば、板垣は後藤を「やす」と呼んだ、これは板垣の幼名猪之助の略と、後藤の幼名保彌太の略である、世に恐ろしいものゝない腕白時代に、後藤は唯蛇が大嫌ひであつたから、腕白にかけては一步も譲らない板垣は、面白半分には蛇をつかんで後藤に投げつけると、後藤は忽ち路傍の糞をつかんで投げ返すのには、板垣も大に閉口したといふことだ、幕末から明治にかけて飛躍したとこ

ろの、天下第一流の風雲兒も、嘗ては蛇と糞とで相闘つた時代もあつたのだ。

不運の孤兒伯父の虐待

後藤は天保九年三月十九日を以て、土佐國高知の城下なる片町に生れた、幼名は保彌太、後に良輔と稱し、更に象二郎と改めた、陽谷と云ふのは其號で、雲濤、光海、鷗公などの別號もあつた、幼にして穎悟、膽氣は凡人に優れてゐた、七八歳の頃から太閤記が好きで、終日手から離さず讀み耽つてゐたもので、俺は木下藤吉郎になるんだと言つてゐた、稍長じては諸史を愛讀し、特に唐の藩鎮に關しては一種の趣味を感じ、深く之に通曉してゐたといふ、然るに彼が十一歳の時、思はぬ悪運が忽ち襲ひ來つて、江戸鍛冶橋の藩邸に居た父親が急病で死ぬと、母親は親族評議の上實家に歸つたので、後藤は祖母の手に育てられたが、彼が十三歳の時祖母も亦病死した、子供一人で何うすることも出来ないから、家は番人に頼んで置いて伯父の橋本小平方に寄寓することゝなつた、ところが伯父の橋本は頗る無情冷酷な男で、孤兒を憫むなどの心は少しもなく、言語に絶する虐待をやつた、彼の居間といへば疊一枚ぐらゐの

狭い部屋で、後藤は之を「窮窟」と稱してゐた、さうして折々友達に向つて、俺は悪源太とならうと思ふことが度々あるよと、戯れに辭憤を洩らしたさうである。

四斗儀相手に角力の稽古

伯父に虐待せられ、所謂「窮窟」に居りながらも、後藤は學問と修養を怠らず、初め劍術を寺田忠次に學び、その後柳川藩士大石進が高知へ來て道場を開き、大石神影流を教へるようになつてからは、その教を受けて大に上達した、其他の武藝も皆怠らず修業したが、就中角力が最も好きであつた、後藤は身體強健で力量も人に優れて居たから、角力では何時も一方の雄と云はれたが、どうしても後藤が勝てない前押の強い男があつて、残念で堪らないところから一計を案じて、倉の棟に四斗儀を吊るし、之を突放して其刎ね返るのを、胸や肩で受ける練習をやつた、ところが初めのうちは見事に刎ね飛ばされたが、慣れるに伴つて之に堪へ得るやうになつたので、これなら大丈夫と其男と立合ひ、立派に勝を占めて觀衆をヤンヤと言はせた、後藤の性格の一端は此一事でも窺ひ知れよう。

十六歳にして妻を娶る

後藤は武藝ばかりでなく文學に於ても餘程練達して居た、義理の叔父に吉田東洋といふ土佐第一流の學者兼政治家があつて、後藤の奇才を愛し、自ら讀書の師匠となつて教養に力を盡した、又書は梁川星巖の高弟森田梅間に學んだ、梅間は詩も上手で書も巧かつた、後藤の書が道勁にして簡古なるは實に茲に基づく、當時城下の少年には皆一般に保護者があつたが、彼の保護者は英邁機敏なる中山佐衛士といふ人で、後藤は爲に啓發せられるところが多かつたのである。

彼は更に中濱萬次郎に啓發された、萬次郎は醫學博士中濱東一郎の父親で、土佐國幡多郡の漁夫であつたが、漂流して亞米利加に至り、十二年を経て土佐に還つた、これが米國水師提督ペリ來航の前年で、即ち嘉永五年であつた、吉田東洋は萬次郎を招いて密に海外の事情を聞いた、後藤も其席にあつて一枚の世界地圖を貰ひ、大に喜んで家に歸ると、數日間塾居して少しも室を出ない、家人が怪んでソツと覗いて見ると、後藤は机上に地圖をひろけて、山川、國

士、港灣、都市等に悉く朱點をつけ、或は譯字を記入しつゝ、餘念なく研究に耽つてゐた、さうして家人に向つて、御覽なさい日本はこんな小ほけな島ですよ、男子生れて大陸の地を踏まねば、井戸中の蛙で終つてしまひますよと。

十六歳の時、後藤は所謂「窮窟」を出て我家へ歸つた、そして東洋の媒妁で寺田左右馬の次女を娶り、生母大塚氏を家に迎へた、生母は快活で聰慧、男勝りの女丈夫で、後藤も母の資性を多く享けてゐた、新夫人は貞順な美人で、能く子女を教育し、後藤をして内顧の憂なからしめたが、惜い哉、慶應三年早くも此世を去つた。

叔父と共に江戸に上る

嘉永六年、米國水師提督ペルリが米國大統領の國書を幕府に奉呈したとき、幕府では其漢譯謄本を各藩へ廻附した、それが土佐藩へ廻つて來たところが、執政以下一人も十分に之を讀み得るものがなかつた、これは土佐藩はかりでなく、各藩でも大概さうであつたらうが、當年二十六歳の土佐藩主山内容堂は大にこれを憤慨して、英斷を以て學問ある人材を登用した、後

藤の義理の叔父なる吉田東洋は、其第一人者として採用された、東洋は活儒と稱せられる立派な學者で、學力非凡なるのみならず材能も拔群の人、船奉行となり郡奉行となつて、學ぶところを實地に應用し、快刀亂麻を斷つのが概がある、然るに其言用ひられずして、終に官を辭したのであるが、今度拔擢されて大監察となり、間もなく參政に進んだが、翌年容堂に召されて江戸へ行くこととなり、甥の後藤は十七歳で東洋に隨行した。

當時土佐藩の少年子弟は、錢勘定を知つてゐるのは、耻だとされて居た、それで何か物を買ひに行つても、懷中から十匁緡を投げ出して、商人に代金を數へ取らせるといふ風であつたら、生長の後も大抵經濟の實務に暗く、何の役にも立たない有様であつた、東洋は後藤を伴れて行く時に、荷物の宰領を言ひつけたので、五十三驛の興や馬が雜沓して、朝は出立、暮には宿屋に就くたび毎の荷物の宰領、全く應接に遑あらずで、後藤も大に困つたけれども、それが爲に頗る俗事に通曉するやうになつた。

二里餘の山路を通學す

東洋は出府後益々容堂の信頼を得て、大に爲すところあらんと考へて居たが、安政元年六月十日の夜、容堂が幕吏を招いて酒宴をした席上で、幕吏の不遜を憤つた東洋は、いたく彼を殿打した爲に、忽ち職を免ぜられて國許追下の命を受け、八月になつて高知城下四箇村禁足申付けられ、食祿は四分の一を減ぜられ、東洋は朝倉村といふ處へ立退いた、後藤田に新築して引移つたが、東洋の免職歸國と共に歸郷した後藤は、毎日片町の自邸から宇津野峠を越えて、二里に餘る山路を往返し、東洋の謫居に通學した。

東洋は他日實際の用を爲すべき望ある人物でなければ、漫に入門を許さなかつたので、門生の數は十六七に過ぎなかつた、岩崎彌太郎は門弟の一人であつたから、後藤は此處で相識の間柄となつたのだ、東洋は安政元年八月から同五年正月まで謫居にあつたので、其間三年餘の長き月日を、後藤は一日も缺かさず出向いて、叔父の薰陶を受けたのであつた。

郡奉行は青二才の小忰

東洋は再び擧げられて參政となつた、彼は建言して人材登用の必要を力説し、吏務に長ずる

人々を拔擢して要路に當らしめ、門下の秀才編岡孝弟や板垣退助や後藤なども選抜した、後藤は安政五年二十一歳にして幡多郡の奉行に擧げられたが、郡内の父老は、その餘りに若年なるに驚いて、或日鎮守の森に集合して四方山の話の末、「今度の奉行は吉田殿の甥かは知らねどまだ青二才の小忰ぢやないか」と笑ひどよめく、けに噂をすれば影とやら、偶鳥打ちの途中此森蔭を通つて、之を聞いた後藤は不意に躍り出で、「我こそ其小忰だ」と大喝したので、父老ども膽を潰し、足も空に蜘蛛の子を散らした如くに逃げ失せたといふ、萬延元年、後藤は御近習目附に榮進した、これは藩主の左右に常侍するの要職であつて、東洋の爲には缺くべからざるの耳目である、此際東洋は後藤に書を與へて曰く、

寒冷の節、被成御揃、倍々御勝常可被成御入、奉賀候、隨而此方一同無事に候、扱過日者御轉役、愈目出度候、清八參候、故、此書託候也、又七謙吉の都合、歎息の次第、鶴田塾中の指大、足下而已所謂碩果不食、後來可頼可期也、頼近頃乾退助役相蒙、毎々参り、壯齡盛志、大に向來の望御座候、只今は未だ死生の間、心を用ゐる、若年の氣去り不申、足下など歸着後折々議論候はゞ、大益可有之、藤次太内、不相變精勤、世事倍磨練

頼母敷候、他可言なし、御用家者、成丈早く御明にて、御歸可然、跡役も参候事に付、御配意は當然と存候、是等瑣々の事、申迄も無之、足下を視る事猶在鶴田時、亦迂拙の婆心而已
實に温情掬すべき手紙ではないか、東洋は國家の爲に人才を愛するので一人の甥に私するやうな人物ではない、後藤の大を成せる所以のものは、東洋の薰陶が然らしめたと云つても過言でなからう。

侯爵 西郷 從道

明治十八年第一次内閣の海軍大臣となり、二十一年黒田内閣の時、二十二年の山縣内閣、二十五年伊藤並に黒田内閣の際にも、二十九年松方内閣、三十一年伊藤並に大隈内閣、續いて大隈内閣の時と、其海軍大臣としての長き歴史は、獨り西郷從道に於て之を見るといつた有様で、後には大勳位侯爵に列せられるの光榮を荷つた。

武道の稽古と腹釣の夜學

侯は幼名慎吾と呼び、兄に吉之助(隆盛)弟に小平を持つて居る、天保十三年恰度父が四十歳、母が三十九歳の時の子であつたとか、元來父母の體格は何れも立派なもので、侯の曾祖父に當る入に西郷吉兵衛といふ人があつたが、其人こそ大きな男で、身の丈は六尺七寸もあり力も亦非常に強かつたのである、ソナナ具合で勢ひ角力が大好き、自分は武藝の餘暇には召使ひの男を相手に、勝負を試みるなどして楽しんで居た、何しろ前にいふた通りの體格故、侯の父も從つて立派な體格を備へて居た、そこで此曾祖父といふ人は、若い時には常に武士は武を元にして居れば、宜いとばかり心得て居つたので、武術の方は其爲に餘ッ程達者であつた恰度二十六歳の歳に、武士といふ者は劍術ばかりでも濟まぬから、學問を修めねばならぬと心附いて、夫れより勉強したが其仕方が至つて面白い。

先づ勤番の外は書夜八疊敷の一間に入つて、机にのみ向つて居たが、夜になると天井から紐を釣つて、それで腹を縛つて勉強したといふ話だ、侯の父も矢張り西郷吉兵衛といつたが、母はまさ子と呼ばれた、同藩の権原三治なる人の娘で、なか／＼賢明の婦人であつた、子供が夜學などに出ても歸らぬうちは、夜明けまでも眼に就かなかつたさうで、子弟の教育は至つて

嚴格の方であつたと聞く。

若狭守夜討の仲間入り

慎吾は幼兒より極く應揚の質で、何方かといふと先づ盆鎗して居た方であつた、夫れに勉強するのを好まない、鹿兒島に居た頃は、伊藤茂右衛門といふ人に就いて學問したが其頃彼の教育に力を盡したのは却つて兄の吉之助である、吉之助はなか／＼の弟思ひで、慎吾や小平を非常に愛して、暇あれば文武兩道を指導した、其後京都へ出て春日讃岐守に就て漢籍を修めて居ると、其うちに有名な伏見寺田屋騒動が始まつた、此騒動とは京都の所司代酒井若狭守が勤王家を愚弄するといふ所からして、久留米の牧和泉守が巨魁で、薩摩人は擧つて此若狭守を夜討しやうと企てたのである、其時慎吾は十八歳の向ふ見す壯り忽ち此夜討の仲間に加つた、すると事が終つてから、夫れが知れて非常なお叱を受け、たう／＼國許へ還らせられた上に、三年間の禁足を申付けられた、かうなつては致方がない、其間謹慎しつゝ、只管文武兩道に精を出して居つたのである。

母の細心と堪忍の訓諭

彼が幼時の教訓に付ては、茲に特筆せねばならぬ事がある、外でもない前にいつた母のまさ子が子供等の育て方で、全體鹿兒島には妙な習慣があつて、朝の十時より夜の十時までは、同郷の寮といふものへ行つて、文武の修業をする事になつて居る、之れは藩の法律であつた、そこで西郷の兄弟などは皆んな其寮へ行つて勉強したのだが、偕彼れの母は己れは澤山に男の子を持つて居るが、どういふ風に教育したならよからうかと、常に自分より年輩の多い方々に尋ねてゐた、處が當時西郷家の親戚に鹿兒島屈指の漢學者で、品行方正人格高き評判を受けた四本善覺院とかいふ山法師があつた、母は先づ此人に就て、どんな心持で男の子を教育したらよいかと質問した、すると此人の答へるのに、毎朝子供の出る時には必ず、一人／＼に就て、お前は何處へ行く、さうして何時に歸るかと聞くのがよいといつた、母は之れを聽かれて其通りに行られたさうで、兄の吉之助なども母にお前は何處へ行く、何時に歸るかと毎日問はれては困つた事がある、それで年を取つてから國事や何かで話が長くなると、竟には夜の明けること

もあり、三日間も家へ歸らないこともあつたが、ソナナ時には一時家に歸つて、さうして母に安心させて再び出直して行かれたのである。
流石賢婦人と譚はれし彼の母は、常に子供等に向つて、お前達は堪忍といふことは決して忘れてはならぬ、學問するにも、氣張つてしななければならぬ、又劍術をするにも、痛いのを堪忍して學ばなければ上達するものでないと聞かした、慎吾は夫れを能く守られて、兄弟中でも一番の堪忍強い男だと評判を取つたのである。

侯の兄弟と其姉妹

彼れには四人の兄弟と三人の姉妹があつた、其うちで吉之助が長男、二番目が女で名を琴と申し、市來六左衛門といふ人の處に嫁した、三番目が吉次郎といつて、薩摩の監軍を務めて居たが、竟に越後の高田で戦死を遂げ、四番目は女で高と呼び、三原傳左衛門の處に嫁し、五番目は要子と申して故大山公の兄上に嫁し、六番目が即ち、慎吾後の侯爵從道であつた、七番目が十年の役に兄隆盛と共に、田原坂の露と消えた時の勇將、即ち西郷小兵衛である。

文武兩道の研究に熱中

武道の研究は彼れが中年から始まつたもので、薙刀は田代惣左衛門といふ人に就て、十六の年から二十歳の頃まで稽古した、又劍術は役丸半左衛門に就て、之れも三年許り習つたが何れも免許までは取らずに仕舞つた、そこで一方文の方はどうかといふに、他の人に教はるよりかは、兄の吉之助から教へられた方が却つて多いので、兄は朝の十時より出勤するそれ迄に、毎日十七人乃至二十人の子供に、讀書手習を教へて遣つた、そして藩へは朝の十時より午後の二時迄、僅かに四時間しか出勤しない、處が吉之助は朝の學問と晩の學問とを分ちて、近所の子供等に教へて居つた、後に元師、公爵、陸軍大臣と迄なつた大山巖なども、彼れと一緒に吉之助の教訓を受けた一人である。

鳥羽の戦て銃創危き一命

侯は維新の戦争に、斥候の役を受けて出陣した、處が圖らずも鳥羽の戦で銃創を負ふた、

創所は耳の附根から頸骨の傍を彈丸の貫通、折も折其頃には薩摩も醫術が開けて居なかつたので初めは漢法の醫者などと呼んで療治して居る内に、段々危くなつて來たから、長州の隊に居た醫者に頼み、手術を施すと大變に具合が宜い、そのうちに兄の吉之助と大久保市造(後に利道)との二人が相談して、英國の醫者を雇ふことにして、吉井友實(後の陸軍軍醫總監)が使に往つて、ウルイスとかいふ醫者を連れて來ると、此醫者が熟練な手術を加へたので、慎吾もやつとのことで一命を取り止める事が出來た、是れが彼れ正に二十五歳の時である。

侯爵 山田 顯 義

明治十八年初めて内閣が成立し、伊藤博文が初代の總理大臣となつた時、山田は司法大臣に任ぜられ、二十一年の第二次内閣、翌二十二年の山縣内閣の時にも、引續き司法大臣の椅子を占め、更に二十四年松方内閣の時も同様で、其後を襲うたのが田中不二磨であつた、此時代の大臣としては、彼は名司法大臣として謳はれた。

早くも王政復古の機運を看破す

山田は長州山口の出で、幼名を市之丞といつたが、持つて生れた穎才明智、夙くも大村や高杉等の先輩に知られ、文久三年三條以下七卿が長州に西下せられた頃より、既に一方の旗頭となつて、大に巾を利かしたものであつた、此頃は何れも武を以て天下に名を成さうとしたもので、維新前後の政情からしても、勢ひさうなければならなかつた、處が彼は早くも世を達観してゐたので、遠からずして王政復古の機運到來すべきを看破し、苟も暇さへあれば武を練り文を修め、殊に内外の法規などを取調べて、制度の改正の必要あることを認めて居た、後來内閣が組織さるゝに當つて、彼が司法大臣となつたのも、決して偶然でなかつた事が窺ひ知られる。

山田の快腕に感服した西郷

維新の際、榎本録次郎(後の子爵武揚)等が軍艦數隻を率ゐて函館に走り、五稜廓に據つて朝廷に反抗した、其時大村益次郎は自分の高弟山田市之丞を擢んで、征討參謀にしやうとしたすると此話を聞き込んだ西郷は、之れを拒んで且いふのに、幕府の遺臣は死物狂ひで戦ふから

なか／＼悔るわけには行かない、然るに山田のやうなアンナ青二才を大將とした日には、到底勝てる見込は無い、先づ大將の役は斯く申す乃公と君ばかり（大村を指して）だと頑張つたけれども、大村は一向に肯き入れない、西郷に向つて、君はさう思ふかも知らぬが、彼は兵を動かす事に至つては、乃公よりも餘程上手である、さう悔つたものでないといつて、到頭山田を推して参謀となし、そして幕兵を攻めに遣つた。

處が官軍が向つてから早一ヶ月餘りになるけれども、未だに賊は平定しない、之れを見た西郷は不平タラ／＼で、一日大村の陣を訪うて、まだ函館は陥らないではないか、乃公は始めから君が選抜の誤つて居る事を知つて居る、だによつて乃公が是から行つて自身兵を督しやうと思ふといつた、大將は又それを止めた、大地を貫く槌は外れるとも、この益次郎の眼の黒いちは、憚りながら見違はない、何でも後十日待つて呉れたまへ、さうすりやア恰度賊は亡びてしまふからと、言はれて見れば西郷も致方はない、不平ながらも大村の言に従ふて一日二日と腕を撫でて、待ちに待つたのが六日間、それでも未だに賊は亡びない、サアもう氣が氣でなく到頭自身で出發しやうとすると、其時遅く彼の時早くとも言はうか、函館は陥り榎本等は降

参したといふ飛報が達したので、流石の西郷も大村の眼力と、山田が脇の程に感服したといふことである。

子爵 品川彌次郎

時の内務大臣として選舉干渉で凄腕を振つて、一世を驚倒せしめた彌次郎も、硬骨漢では歴代の大臣中に未だ嘗つて見ざる程であつた、彼れ幕末から明治維新に於ける政變世變に、幾度か生死の境を潜り抜いて天晴功名を現はした利権者、明治十七年には功を以て子爵となり華族に列し、十八年には特命全權公使で獨逸駐在、二十四年に内務大臣となり、二十五年辭して樞密顧問官に歴任したが、三十三年二月薨去、遺骨は京都靈山墓地に埋葬された、彼れ眞に稀有の人傑。

一粒種と父母の教訓振り

硬骨漢を以て、一世に知られし子爵は天保十四年九月廿九日長州萩の松本村に生れた、家は却々古くから傳へられ、中世になつて左京亮將清といふ人があつて、元弘三年五月父孝秀は江州番場で自刃したが、將清は時僅かに三歳であつた爲に、母の妙秀尼に従つて武藏の品川

郷に遁れ、外祖品川彌三郎行清の家に居住成長した、夫れから其偏諱を冒して品川を氏とした。後後代の末裔に九郎左工門尉貞永といふ者があつて、主家武田滅亡の後石見國益田城主益田越中守宗兼に屬して益田郷に移住した、夫れから數代を経て子爵父の彌市右工門の代となつた。彌市右工門は池田氏の女を娶ふて一男を擧けたが、之れぞ本編の主人公たる品川彌二郎である、何をいふにもたつた一粒種の事とて、兩親の子爵を愛することが一通りでなく、殊に彌市左工門は至つて嚴格の偉丈夫であり、母は又慈温なる賢婦人であつたので、常に父は盛夏の夕にも嚴冬の晨にも、武士的の身心鍛練の事を勵まし、母は紡織の時にも洗濯を爲す暇にも、時には燈下に於て又或は爐邊に於て、懇ろに忠臣孝子の事績などを聞かせては、能く天稟の特質を啓發した、爲に幼時より群童中に嶄然頭角を顯はしてゐた、これも矢張り父母の教訓が其淵源となつた事と思はれる。

佐々木翁と吉田松陰に學ぶ

彼れ八九歳の折に佐々木吉信翁に就て讀書習字を學んだ、當時翁は萩の河添三軒屋丁なる士

手際に居住し、多くの弟子を集めて教授して居つたが、彼れの熱心なる遠き杉本邊から毎日通學して懸命に勉強した、記憶はよし觀察力は大人も及ばぬ位なので、師の佐々木翁も此將來畏るべき人物になると人に語つたとか、後安政四年彼れ十五歳の時、吉田松陰の松下村塾に入り薫陶を受けた、此松陰先生は頗る氣節を尙び、名分を重んじ、家學を教ゆる外に頻りに經史文章を以て子弟を指導し、彼も亦之によりて大志を鍛練することが出来た、宜なる哉で其門下からは幾多の俊傑を出したのである。

彼が詩吟に長ぜる所以

彼は松陰先生の教を受くる餘暇には、必らず金谷の菅公祠を拜し、或は蓮池院なる小田原欽の墓に詣でて、頻りに徳川文學の進まんことを祈つてゐた、コンナ事から折々南朝の事蹟を探究したり、知友と俱に朱舜水の湊川碑文、野矢常方の芳野山長歌などを愛誦し、又時には楠子忠節の談を好み、童友と日夕櫻井驛訣別の歌なんぞを高唱した、後年有志の宴席などへ出ても善く吟し善く舞つたのは抑も幼時の朗吟が彼をして其長所たらしめたのであらう。

尊王攘夷て大車輪

天保弘化の間は外患防禦の事が起り、又内政改革の議が四方に行はれた、幕府にても陋歐刷新の事業に着手し、水戸藩の如きは別して忠愍の熱情を傾け、政務の改善に精力を盡した、長州藩は殊更に號令一發深く二百年來の泰平の陋習を憂へて、専ら根本的刷新の目的を達せん爲に、猛然契斷の處置に出で、茲に大改革を實行致した、此時父君は數十年の勤功によつて藩府より一代待 雇の榮典を受け且特別の恩遇を蒙むた、子爵が忠臣孝悌至誠純忠の性行を顯彰せらるるに至つたのも、實に此父母の遺傳と教訓に頼つたものたることは争はれない。

やがて尊王攘夷から王政維新の變革を見る間、彼れが國事の爲に東奔西走は一通りでなかつた、然かも幕府は朝廷に組みする者には其身邊の取締は極めて嚴重で、時々四方に密使を放ち又或時は暗殺を企つるといつた工合で、頗る危険なものであつた、彼れも一時は名を橋本八郎と改めて、京都の薩邸に潜寓して、頻りに藩の使命を果すに心を砕いた、恰度慶應二年寅の二月木戸以下一行と共に、黒田同道にて山口に歸藩すると思ふと、再び上京して足を休む暇だ

にない、偶々幕府は長州再征を遂行する意氣組であつたが薩藩は抗議して征長の幕命を辭退する、彼れは防長士民陳情表並に防長士民告白書などを作つて、薩藩は朝廷に之れを上り、彼れは在京の有志諸侯に贈つた、是等は幕府に取つて大なる捕手を受けたさうである、當時彼れが京都潜伏中の吟詠に

ものおもふ人に見せしと照る月を

かくすや雲のなさけなるらん

しんの闇宵に櫻を削り赤き心を墨で書く

加茂川の鶯は知るまいこの水心誰に言ふか語らうか

彼れもなか／＼洒落たことを作つて時曲を封じたものであつた

かふして王政復古の主唱論は益々高潮して來た、愈々其實行を迫るべく、薩藩の大山格之助長州藩の伊藤俊助等と共に三田尻で大久保一藏、廣澤兵助と會見し、一方土佐藩の後藤象次郎、安藝藩の辻將監も之に左袒して、徳川慶喜に建言する事となつた。

トコトンヤレ節の作者とは

明治元辰正月三日徳川慶喜は、幕兵及び會津桑名二藩の兵を北上させて不軌を圖つた、す
とる朝命によつて伏見鳥羽で薩長以下諸藩の兵は之を邀へ撃ちした、嘉彰親王は征討大將軍に
任ぜられ、旗鼓堂々意氣大に振つた、奮戦數回の後盡く朝賊も敗れ、慶喜も今日之れ迄と大阪
城を尾越二藩に託して窃かに軍艦に乗じて東走し江戸に還つて來た、此時子爵は京師に留まつ
て總督の進軍や、一方賊兵掃蕩の有様を目撃し、コンナ歌を作つて四方に宣傳した。

宮さん／＼御馬の前にヒラ／＼するのはありや何んじや、あれは朝敵征代せよとの錦の御旗
を知らないか、トコトンヤレトコトンヤレナ

今日尙此俚謡が世間に歌はれて居るが、流石彼はなか／＼味をやるわい。

隊兵の暴發に謹慎の後赦免

やがて朝廷の東征に際し、品川は官軍の長藩整武隊參謀として、隊長山田市之史と軍艦に搭

乗して蝦夷地に向ひ渡島の乙部村に上陸し、遂に賊兵と數回の戦争を交へて大勝利を博し、凱
旋したのが明治二年の六月二日、夫れから三好太郎、野村靖之助等と共に自藩の役兵制改革に
際し大隊長に準ぜられ、常備兵軍監となつた、其十二月には更に整武隊長を命ぜられた、處が
間もなく將卒戰功賞典の詮議のことを後にして常備軍編制を先にしたといふのが、不平を
招ぐ種となつて藩兵中に暴動者が起つた、彼は隊中も却々聲望があつたし、夫れに取鎖め役に
はいつも功妙にやる處から、推されて其鎮撫に當つたが、三年正月隊兵の暴發が尙止まぬもの
から、隊長として相濟まぬといふ理由で、待罪書を差出し、暫し謹慎したが、情實固より判明
なるによつて間もなく赦免されて事なきを得た。

江藤新平に苦諫と謡曲七鬼落

明治七年佐賀縣に亂が起つた、これより先征韓論者が勃興して、江藤新平が參謀として、
に還ると愛國黨の類は、之に加はつて遂に暴徒數千人の多數となり、とう／＼亂を起し縣廳
を襲ふたり、偕は官吏などを殺して暴狀至らざるはなしといふ有様、そこで朝廷では熊本鎮臺

其他の兵力で漸く鎮定すると、明治九年十月の二十四日は熊本に檄神黨或は神風連と稱する者が變亂を起して鎮臺縣廳を襲撃し、司令官縣令軍人縣官多數を殺傷した、揚句の果は營舎迄も焼き拂うといふ狂暴沙汰、參議の前原一誠は官を辭して郷に還つたが、居常快々時と合はず、偶々熊本に亂が起ると聞かや、血氣にはやる連中は前原を謀主に推して裁亂を起した、此時品川は鎮撫術にも長じて居るといふので、又も命ぜられ朝廷の内旨を受けて前原を訪ひ、一々反亂の證據書類をば示し、懇々と其不心得方を説諭したが、其誠意は満面に現はれ、血涙禁じ得なかつたので、流石の前原も深く感動して、説諭の通り決して異心を掩かぬによつて、意を安んじて呉れよと堅く誓つたので、品川も首肯して彼と別れると何ぞ仕らん、活氣の青年が煽動に再び心を動かされ、とふく反旗を翻へすに至つた。

前原如何で錦旗に抗し得べきぞ、其後敗北して亂全く平定したが、其折品川は「七鬼落」と題する謡曲一篇を作つて夫れが四方に喧傳された、當時は誰が作つたものか世間でも知る由もなかつたが、暫らく経つてそは品川の作であつた事が知れたので、何れもさうかと許りに失笑し且其文才奇智に敬服したとか。

熊本籠城中女文字の善戯

明治十年には三歳の兒童も知つて居る西南戦争がオツ始まつた、此時品川は敵情視察の爲に熊本に赴き、賊徒鎮撫の事に盡したが、之れしきことで劫々鎮まるべくもない、却つて益々熾んになつて身の危険が刻々に迫つて來た、此上は止むを得ぬによつて一先熊本城に入つて鎮臺司令長官の谷干城と共に、籠城する事となつた、兎角するうちに城中の糧食が僅かに十八日分位しか支へられなくなつた、で一層のこと未明を期して突撃隊を組織し重圍より脱出して、薩方の血路を開き官兵の援軍に達し、城中との連絡を付けんものと決議し奥保鞏が兵を率ひ之れに當るべく其準備に忙殺されたが、何れも成算あるが如く又無きが如くで、只無言の裡に一種悽愴の氣が満ちた、處がふと城中の一角に無名の女文字なる手紙が落ちてあつたのを、或兵卒が拾ひ來つた、多くの兵士が寄つてたかつて開いて見ると、其文面が斯であつた。

「前略御城内におかせられても、いよ／＼御最後の御覺悟と承り參候、數ならぬ妾などの存じ申さぬ事におはし候へ共、中には怨敵の爲に此城を汚され候は口惜くも殘念に御座候

やがて来る八日には何れ目ざましき軍の候やにて、皆さまいろく御覺悟あらせられ、誠に涙にかきくれ參候、就ては妾もそれく調度など取りかたづけ、念なる討死致し果んと覺悟致し、先づ短刀など相改め申候、いづれ此の世にて御目もじ相叶ひ候哉如何はしう存參候へば、つたなきこのふみをわがかたみとも御覽なし給はり度、呉れくも念じ上參候なほく申上度と澤山おはし候へども、死出の旅路に心いそがれ候まゝ、あらく申上參候、かしくわしも女丈夫ぬし諸ともに

城を枕にはるのねや

と認めてあつた、女すらかゝるものとして城中一同大に勇氣を鼓舞したとか、さしもの戦争も平定して後、之れが籠城仲間の一人品川彌次郎の善戯であつた事が分つて、大笑ひしたといふ話。

伯爵 黒田 清 隆

艱難汝を玉にすといふ語があるが、黒田の如きは全く其好實例であると云つても宜い、彼は赤貧洗ふが如き家に生れながら、能く其艱難に堪へて天稟の美質を磨き、幕末長州藩の騷擾紛亂裡に處して、其手

腕の凡ならざるを承し、遂に大西郷に知られて其推舉するところとなり、維新の風雲は彼に立身出世の途を與へた、彼は總理大臣從一位勳一等の榮位を贏ち得たのであつた。

生家は赤貧洗ふが如し

九州は薩摩の藩士に黒田清行といふ人があつて、天保十一年十月、夫婦の間に一子を設け了助と命名した、これぞ後日總理大臣の位にまで昇つて、從一位大勳位の最高位階まで賜つた黒田清隆であるのだ。

洋の東西を問はず、豪傑は多く貧家より出てる、黒田も亦その轍を履める一人である、彼の父は薩摩藩に仕へて四石取りの一武士であつたが、格式は左程卑しくはないけれど、何しろ四石取りといへば極めて少額な祿で、その貧困窮乏といつたら、その日その日の生計にも差支へる有様、何事に依らず足らぬがちで、俸の了助もそれが爲に、幼い頃から薪水衣食のために心を勞したことが尠くはなかつた、先づその時の悲境を書いて見れば、家といふのもホンの名ばかりで、九尺二間の棟割長屋三方共に垣根のあらう筈はなく、細く捻くつた下身で、邪見に泥を叩きつけた荒壁一重が、隣家との境界、その暗くて貧乏汚ないことは、家中に籠つてゐる

濕氣の悪臭が、ブーンと鼻を衝くのも、如何に風通しの悪いかを知ることが出来るといふ始末、イヤハヤ實にその困乏の有様は、氣の毒千萬の次第であつた。

貧乏しても五兩位の金はある

こんな風に了介の家は貧乏のドン底にあつたが、然しながら彼は、この貧乏の中から平常その困苦を忍んで貯蓄をして居つた、けれども一家數人の口へ、僅かに四石の收入しかないのだから、その實況は大概想像が出来るであらう、而して彼が薄き俸祿を割いて貯へた金は、若しも主家に事あるときの用意にと、何時も屹度肌身離さず持つてゐた、すると或時のこと、藩の命で長州まで使者に遣られることになつた、それは當時尊王論と佐幕説との聲が四方に騒がしくなつて、長州は獨り孤立の境遇に陥り、四面皆敵を受けるやうになつたが、九州では鹿兒島藩ばかり獨り動かないで、深く天下の形勢を觀察しつゝあつたところ、こゝで窃に薩長聯合を策することとなつたからである。

既にその頃から薩藩第一流の人物であつた西郷南洲は、見るところあつて黒田了助を特に推

擧し、藩命を長州に傳へさせることになつたのである。了助が出立しようとする時に、西郷は路銀として若干を與へ、さうして曰ふには「乃公も能く知つてゐるが前家の家は貧乏だから定めし路銀がないだらう」と、すると了助はそれを返して「私は豫てから斯ういふ事があるだらうと考へまして、困しい貧苦の中から貯金して置きましたから、只今小判で五兩だけ懐中して來ました、路銀のことなら決して御心配に及びません」と言つて退けたものだから、流石の西郷も手を拍つて大に彼を賞め「了助は好い男だ、屹度役に立つわい」と、偉人の炯眼少しも違はず、了助は後日總理大臣とまでなつたのである。

子爵 森 有 禮

後進年少の身を以て廢刀論の提供者となり、直言直行能く廢刀令の發布を贏ち得、或は男女同等論の先驅者となり、遂に文部大臣の顯位に上りたる彼は、其豪放の氣象が禍ひして、憲法發布の大典日に兎刃に産れたのは誠に惜むべきことであるが、其少壯時代に於ける母堂と長兄との訓育は、蓋し青年諸子の参考に資するものが多い。

南洲の死地は森の生地

薩摩國鹿兒島は城山の東北隅に、山が陥ちて峽谷をなして居る處がある、此處を里人は呼んで岩崎谷といふのだ、さうして此谷は、明治の豪傑大西郷が、戦敗れて自刃した最後の場所であるのだ、此處に森有禮は生を享けた、岩崎谷は彼の郷地であるのだ、彼と南洲、一は此處に生れ、一は此處に死んだ、何れも青史に其名を垂るゝ二人の間には、何かの因縁でもあるのだらうか、森が憲法發布の大典日に横死を遂げたのに想到すれば、何となく奇異の感に打たれるではないか、ともあれ崎嶇たる岩崎谷は此英傑を生んだ、さうして此邊は随分かはつた處で岩崎谷の近くにある城ヶ谷は、戸數僅に百軒に満たない小村落で、城下からは左程離れてもゐないのに、風俗習慣など、まるで別天地の觀を呈してゐる。

温厚な父と男まさりの母

父は森喜右衛門忠恕といひ、藩の士族で、文化初年に生れ、温厚篤實の人として深く村人に

敬慕されてゐた、彼は一女を残して妻に死なれたので、お里といふ女を後妻に迎へた、お里は夫より三ツの年少で、隈崎某の女であるが、性質頗る熱情に富み、且つ嚴肅で剛強の意志を有し、その氣風といつたら恰も男子のやうであつた。

夫婦の間に五人の男兒が生れた、長男は喜藤太といひ、それから一ツ下の喜八、三男は喜八より二ツ下で三熊といひ又二ツ年下の喜三次、末子は四ツちがひで助五郎と名づけた、弘化四年七月十三日の誕生である、この助五郎は後金之亟と改名したが、これぞ茲に紹介せんとする森有禮の幼名であつたのである。

母の教育と先輩の感化

藩士とはいつても小祿の家、もとより裕福であらう筈はない、それでも兩親は實に心掛の好人達で、その僅かばかりの家財を傾けてからに喰ふや喰はずの貧乏世帯でありながら、五人の倅には出来る限りの教育を施した、しかし多寡の知れた身代だから、さうくは續かなかくなり、末子金之亟が成長した時分には、最も貧窮の極に達し、一家の生計に非常の難澁を來た

した、ところで父の喜右衛門は寛弘で放任主義の伴の育て方、之に反して母親は例の嚴肅一點張りであつたが、一體子供の教育は母親の世話するところが多いから、金之丞も此嚴肅な母の薫化を受けたこと蓋し淺からざるものがあつた。

恰も其時分、村の先輩には五代友厚の兄弟があり、兄の方は漢學に長じ、弟は西洋の學事に通じて居つた、そこで森の子供等は何れも此兄弟に教を受けたたり、又は共に遊んだりといふ風で、その感化を受けたこと決して少しとしない、それに加へて同じ村の博學の詩人横山容安あり、森兄弟の修學には關係が深かつた、されば是等の先輩や良師の下に養育された兄弟は、學問は出来、氣風は高い人物となつて、村中で大に巾を利かせてゐた。

宜しきを得たる長兄の訓育

さて五人の兄弟とも可なりな男となつたが、しかし一番末の金之丞は何分まだ年がゆかないから萬事は兄の世話になつてゐた、さうして長兄の喜藤太が彼を訓育したことは、別して著るしい功を奏した、一例を擧げると金之丞が七歳の時、喜藤太は或日手紙を持たせて直ぐ近くの

家へ使ひにやつた、ところが何うしたことか、その手紙を途中で失つてしまつたので、仕方なしにボンヤリ家へは歸つたものゝ、それを兄貴に話せば屹度叱り付けられるにきまつてゐるから、そつと母の處へ来て其事を話し、メソノ泣いてゐたのを見た兄は、彼を自分の前へ呼び寄せて、靜かに諭して曰くに「お前はまた年がゆかんといつても男兒ではないか、何故自身おれの處へ来て謝罪らないのか」と、その女々しき行動を戒めた、斯の如きの訓育は、遂に彼をして後日の剛直豪放なる性格を陶冶せしめたものであらう。

時勢の刺戟洋學の修業

借、森が幼い時の世上の有様は何うであつたかと尋ねれば、彼が六歳の時、島津齊彬が封を繼いで新藩主となり、英邁の資を以て眼を泰西の文化に注ぎ、歐米の新しき風習を執り入れて國內の風俗習慣を改善せんと盡力し、兵器や軍隊を始めとして、遂には軍艦の一二隻と、水雷などを造り出すやうになつて、人々は二百年來の惰眠より覺め、大に爲すところあらんとした時勢であつた、斯る新氣運の勃興せんとする時代に成長しつゝ、その父兄や親友からは、かの

鎮西八郎の強弓に幾百倍もする大砲の話や、海上に浮べる城のやうな黒船は、四十日もかゝらねば行けない江戸まで、一日一晩で乗り着ける話などを聞かされて、まだ十歳にも満たない少年の惱裏に、西洋といふ觀念を深く深く刻み込まれるやうになつた。

そこで此西洋的理想の少年が心には、洋學の必要といふことが自ら浮んでくる、彼は十二三歳の頃、藩の學校造士館へ入つて漢學を修めたが、資生穎敏、且つ好奇心に富んで居た彼は、十四歳の時、親戚の向井某が江戸から持ち歸つた、林子平の海國兵談を讀んでから、何うしても海外の事情に通じなければ立身出世をすることが出来ぬ、それには第一洋學の研究をせねばならぬと決心し、その翌年日向の都城へ往つてゐた父を訪ねて、自分の考へたところを具さに物語り、茲に洋學を修める許しを得て、欣々として郷地に歸るや、獨り上野景範を師として英學の勉強に専念することゝなつた。

徹夜の苦學と洋行の決心

これより少し以前に、藩主齊彬が死んだので、一時は盛んであつた洋風も退歩の形となり、

藩論は再び攘夷に傾くやうになつた、そこで森は時勢の趨向に顧み、同輩の少年等が指目するのを憚つて、窺に上野に就き英學を修めたのである、由來薩摩人の氣風として、ソツと讀書勉強し、而して世間には勉強などしないと公言し且つそれを賤むやうであつたから、かたゞ彼はソツと行つては習ふといふ風にしたのであるが、此時の彼の勉強と苦學には實に感服の外はない、彼は常に丸竹の一節枕を用ひ、少し眠氣がさして頭を載せても、ヒヨイと動けばゴロリと轉がり出す、そこで目が覺る、覺るとムツクリ起きて又勉強すると、いふやうなわけで、全く一生懸命の勉強振りであつた、彼の苦學には今の者の到底及ぶ能はざるものがあつた。

この時分に、江戸へ往つて居た兄の喜八が、病氣のために國へ歸つて來た、さうして保養のため温泉へ行くからと、森と一緒に連れ出した、ところで森は殆ど四五ヶ月に涉つて病兄を看護し自分一人で飯を炊いたり水を汲んだり、まめ／＼しく立働いた、此時病兄は森に話すのにワシントンやナポレオンなどの英傑の事跡を以てした、森は之を聞いて益々洋學の勉強に精進するに至り、十四五歳の時、早くも蹶然として洋行しようとの臍を固めた、然るに不幸にして藩公の逝去に會し、一時洋風が衰へた爲に、彼の志望に一頓挫を來したが、時勢は次第に變遷

して、彼が平生の切望を實現せしむべく、好個の機会が到来したのであつた。

名は使ひ其實は洋行

その好機會といふのは、元治元年に開成所が出来て、英、蘭の學を教へるやうになり、次で五代友厚をはじめとして森など都合十九名は、海外に留學させて貰ふこととなつたのである。森の喜びは想像するに餘りありだ、けれども當時海外へ渡航の儀は幕府の禁制であつたから、「藩の御手元御用有之南洋群島へ使はす」といふ名義を以て派遣されたのである、斯くて一行は元治元年三月二十二日、薩州串木野から英船に乗り込んだ、すると、どうも洋行しようといふものが結髪では可笑いからといはれて、早速チヨン鬘を切り落し、昨日に變る舶米姿、香港から新嘉坡、蘇土を経て地中海を航行し、五月二十八日サウサンプトンへ到着したので、一行は無事上陸し、直ちに汽車に塔じて倫敦へ赴き、各自其志す處に従つて勉強したが森はそれから更に米國に渡り、ヘーリスに就いて大に勉學し、居ること三年、明治元年の春一先づ歸朝の途に就いた。

廢刀論は彼の偉業

森は三年間の留學に、深く廣く歐米の文化を觀察し、且つ新進開明の學術を習得して歸朝したのであるから、時人は彼を重く認めた、そこで彼は白面の一青年の身をもつて、忽ち好地位に昇ることを得、彼の先輩であつた大木喬任と、等しい名譽の椅子を占むるに至つた、さうして此當時彼が成した大偉業ともいふべきは、即ち廢刀論であつたのだ、彼は直言直行して己が意見を固守し、遂に明治四年九月廢刀令の發布を見るに至つた、嗚呼、後進年少の身をもつてして、幾多の先輩を凌ぎ、騒然たる世論に打勝つて、此文明風に導いた彼が偉績は、實に賞すべきの事であると思ふ。

未曾有の結婚式と約條

彼が再び米國に遊んだ後、歸朝してからといふものは非常な男女同等論者となり明六社なるものを起して、風習の改良に力を致したのみならず、彼は「妻妾論」といふ一篇を世に公に

し、社會の非倫を痛罵激論した、さうして彼自ら改善の模範として西洋の婚姻法を參考し、明治八年、彼が二十九歳の春、我國未曾有の結婚式を挙げた、左にその時の結婚契約證書といふものをお目にかませう。

結婚契約書

現今十九年八月ノ齡ニ達シタル靜岡縣士族廣瀬阿常、同二十七年八月鹿兒島縣士族森有禮、各其親ノ承諾ヲ得テ互ニ夫婦ノ約ヲ爲シ、今日即チ紀元二千五百三十五年二月六日、即チ今東京府知事職ニアル大久保一翁ノ面前ニ於テ、婚式ヲ行ヒ約ヲ爲シ、雙方ノ親戚朋友モ、共ニ之ヲ公認シテ、茲ニ婚姻ノ約條ヲ定ムルコト左ノ如シ
第一條 自今以後、森有禮ハ廣瀬阿常ヲ其妻トシ、廣瀬阿常ハ森有禮ヲ其夫トナスコト
第二條 爲約ノ雙方存命ニシテ、此約條ヲ廢棄セザル間ハ、共ニ餘念ナク相敬シ、相愛シテ夫婦ノ道ヲ守ルコト
第三條 有禮阿常夫婦ノ共有シ、又共有スベキ品ニ就イテハ、雙方同意ノ上ナラデハ、他人ト貸借或ハ賣買ノ約ヲナサザルコト

右ニ掲グル所ノ約條ヲ爲シ、一方犯スニ於テハ他ノ一方是ヲ官ニ訴ヘテ、相當ノ公裁ヲ願フコトヲ得ベシ

紀元二千五百三十五年二月六日

東京ニテ

森 有 禮
廣 瀬 阿 常
證 人 福 澤 諭 吉

何と面白い證文ではないか、全く男女同等論者の結婚式と首肯される。

伯 爵 佐 野 常 民

明治十年西兩の役に當り、元老院議官の職にあつた佐野常民が、戦場の悲慘事を耳にして同志と謀り、博愛社を設けて戦傷者を救護すべく企てたのが、今日の日本赤十字社の起因である、而して赤十字社をして今日の大を成さしめたるも亦實に彼が献身的奮闘の結果で、赤十字社の歴史は佐野伯の傳記にして、佐野伯傳記の一半は日本赤十字社の歴史であると言ひ得る、されど佐野が國家に致したる功績は産業に美術に海軍に、舉げて數ふるに遑ない程多い、して彼の少青年時代や果して如何に。

少にして俊秀の譽れ高し

明治維新の風雲に乗じて、佐賀藩からも幾多の人材が躍り出た、江藤新平、副島種臣、大木喬任、大隈重信、佐野常民の如きがそれである、殊に佐野は尊王報國を經とし、仁慈博愛を偉として日本赤十字社を創設し、内容の充實と事業の發展とに渾身の努力を拂ひ、遂にこれを完成して、燦然たる光輝を萬國に放たしむるに至つたのは、偉功中の偉功と言はねばならぬ。

佐野は佐賀藩士下村充實の五男で、文政五年十二月二十八日、佐賀市外早津江に生れた、天保三年の春十一歳にして、親類の同藩士佐野常徴の養子となつた、其當時藩主鍋島齊直は、名を榮壽と賜つた。

佐野家は代々藩醫を勤めて門閥高き家柄であつた、天保五年藩主齊直が江戸の邸に赴くに當つて、養父の常徴は隨行を命ぜられて江戸に上り、間もなく一家も江戸に移つたので、佐野は實家に預けられて佐賀に留まり、藩校の弘道館に入つて外生となつたが、翌年には内生に進んで同館に寄宿し、論語孟子經史及び諸家の書を學んだ。

内生といふのは大學寮の學生であつて、この學生に二種がある、其一は藩の役人中から有望の青年を選抜して、藩主から寄宿を命ずるもの、所謂官費生のやうなものと、他の一は自分から志願して入學許可を得たものである、さうして學生は大抵十五六歳以上であるのに、獨り佐野は十四歳で入學するのを許されたのは、全く異數なことであつた、ところが同窓生に張玄一といふのがあつて、伯とは非常に親しい仲となり共に俊才の譽れ高かつたが、寮頭の田中虎六といふのが二人を評して云ふには、玄一は氣である、氣は塞がり易い、榮壽は才である、才は友離し易いけれども、何といつても館中の俊秀は此二人であると、力を盡くして薰陶に當つた佐野は以後、才は離れる意味があるから用心せねばならぬと、常に自ら戒めて忘れなかつた。

財政家の倅で醫者の婿

天保八年、佐野は十六歳にして初めて江戸に上り、翌年古賀侗庵の門に入つた、こゝで紅史その他の諸學科を研究し、やうやく儒學の門を窺ふことを得た、其時古賀塾の學頭は津山藩から來てゐた江木實齋といふ男だつたが、塾生の詩文の添削は其受持であつたから、或日佐野の

文章を見て、議論明白條理整然たるに感嘆し、十七歳の少年にして斯る文章を作るとは、前途實に恐るべきであると激賞したといふ。

越えて十年、藩主齊直が江戸の邸で逝去し、佐野の養父常徴は靈柩に扈從して、木曾路を経て佐賀に歸つた、そこで佐野も養母を護りつゝ東海道から歸國の途に就いた、此時實父の下村充賢は江戸に在勤してゐたが、佐野が佐賀に歸つて一月も経たないうちに、急病の爲に亡くなつた、充賢は鍋島齊直の晩年に當つて、藩の財政が困憊を極め、二進も三進も行かなくなつた時に於て、自ら進んで會計の任に當り、苦心に苦心を重ねて是れが回復を計り、良好なる成績を擧げ得た程の財政家で、藩主の信任最も厚かつた人である。

養父の常徴は、此年更に閑叟公夫人の侍醫となつて、再び江戸に在勤することゝなつた、けれども佐野は佐賀に留まつて親族の松尾家塾に入り、外科術を學ぶ一方、また弘道館内生として醫學を修めた、さうして十三年の冬、夫人駒子と結婚し、共に二十一歳の若夫婦が出来た、駒子は文政五年七月廿八日佐賀藩の山領家に生れ、六歳の時、佐野よりも早く佐野家の養女となつてゐたのであつた。

九死に一生を得た喜び

弘化三年、佐野が二十五歳の春、閑叟公の内命によつて侍醫牧春堂等に隨ひ京都に遊學し、廣瀬元恭に就いて蘭學と化學とを修業した、間もなく嘉永元年には大阪に轉じ、緒方洪庵の門人となつた、この元恭も洪庵も、共に京都蘭學の泰斗で物理學者であつた坪井信道を師とし、却々評判の高かつた人である、當時洪庵の塾生三十二名中には、大村益次郎のやうな英傑も居て、盛んに書を講じ討論などをやつてゐた、佐野は是等の先輩に教はつて洋學の一斑を知ることが出来、殊に師匠の洪庵と大村からは特別の知遇を受けた。

然るに僅か一年ばかり経つと、閑叟公からの命によつて江戸に轉じ、戸塚靜海や、佐賀出身の洋醫伊東玄朴等の塾に入つて、蘭學と外科術を修め、命によつて化學書を翻譯して公の賞賛を得た、ところが翌三年、佐野は悪性の病氣に罹つて経過極めて不良、師匠の玄朴は非常に心配して、良醫の立會ひを求めて協議治療を行ひ、懇切に手當を加へたけれども、病勢益々募つて遂に危篤に瀕した、玄朴は長大息を漏らして、嗚呼有爲の青年をして空しく黄泉の客となら

しむるは 痛惜の至りに堪へない、若し他人が代ることが出来るなら、自分が之に當らう、と言つたから、佐野は大に將來を期待されてゐたのである、而も天は幸ひに伯をすてず、斯程に重かつた病氣も不思議に快復の緒が見えて、玄朴は雀躍し佐野は狂喜し、全憲と共に翌四年長崎に轉學を命ぜられた。

四人の新智識を推薦す

これより先き、佐賀藩は筑前の黒田藩と共に、長崎の警備に當つてゐた、此頃、英露蘭などの外國船がドシノとやつて来て、我が海邊を脅かした、ナポレオン戦争で佛國が和蘭と併合した時、佛國の敵であつた英國船が長崎に現はれて、佐賀藩が防備してゐる灣内の繩張りを押し切つて進み來り、和蘭の商館を襲つた、サア大變、佐賀藩の繩が切られたといふので、幕府の目が光つて、遂に藩主島津齊直は閉門を命ぜられ、奉行松平圖書頭を始めとし、多くの藩士は切腹した、時は文化五年である、これが爲に佐賀人は恨み骨髓に徹し、一方には攘夷論となつて現はれ、一方には大砲や小銃を作つて、益々警備を嚴重にせなければならぬ必要が迫つて

來た。

斯ういふわけで、閑叟公の代となつて佐賀に精煉社といふのが設立せられ、ドシノと西洋の理化學を取り入れ、之を應用して大砲の製造が始まつた、七賢人などと言はれる人々が、血と涙を絞つて苦心經營やつと作り上げた大砲をば、長崎は無論のこと、幕府からも注文されて品川の臺場に備へつたのであつた。

佐賀藩に於ける這般の事情を知悉せる佐野は、長崎に轉學を命ぜられると、途中京都に立寄つて、豫て廣元瀨恭の塾で親しくしてゐた、蘭學化學機械學に熟達した中村奇輔、西洋機械師田中近江、其子の儀右衛門、蘭學者石黒寛次の四人を説いて佐賀に伴れ來り、これを閑叟公に推薦した、藩主は大に喜んで是等の人々を優遇し、直に藩籍に列して精煉方を命じた、四人は凡ゆる新智識を應用して、一生懸命に働いたので、事業が略ほ其緒に就いたのを見て、佐野は長崎指して急ぎ行く。

日本最初の汽車と汽船

佐野は長崎に着くと、直ぐに家塾を開いて洋學を教へた、恰も好し、緒方洪庵の塾長たる趣前の渡邊卯三郎も來遊し、其他二三舊知の人々も來て應援して呉れたから、規模も稍大きくしたが、塾を始めてから未だ一年も経たないのに、閑叟公から歸郷せよとの命令が達した、佐野は折角始めたばかりだから、今急にやめるわけには参りませぬと申送つたが、到頭許されないので仕方なく佐賀に歸つた、時正に嘉永六年佐野が三十二歳の出來事、恰も米艦が浦賀に來り、露艦が長崎に現はれたりして、人心穩かならざる時分だつたから、藩主は精煉社の事業が刻下の急務であるとなし、先に四人の技師は雇ひ得たけれども、これが主任となるものが無かつたから、佐野を召し還へしたのだといふことが解つて、佐野も成程とうなづいたのであつた。

佐賀に歸ると、藩主は直ぐ蓄髮を命じて名を榮壽左衛門と賜ひ、精煉社主任に任ぜられた、又新に蒸汽船製造の計畫を立て、是亦佐野が主幹となつて此新事業を督勵し、四人の技師及び器械術に長ずる數名の人々と共に、日夜製造の方法を講究した、中村奇輔や石黒寛次が蘭書を譯して一々圖面に現はすと、田中近江父子は巧妙な技術を以て作るといふ風に、心血を濺いで

小さな蒸汽船と汽車との模型を作り上げたのが安政二年の八月であつた、其汽車は圓形のレールの上で、汽船は池の中で試運転をやると、何れも巧妙に走つて、見る人をして奇異の感に打たれしめた、假令雛形とは云へ、これが日本人の手に依つて作られた最初の汽車汽船で、現在は佐賀徴古館に陳列せられ、當時に於ける佐野等の苦心を物語つて居る。

國家に貢獻せる彼の功績

其後佐野は汽罐製造や海軍船乗の練習をなし、砲術造船術を學び、日本海軍の基を築いて明治維新の際には、佐賀の海軍か日本の海軍かと言はれるまでに陣容を整へたる佐賀海軍を作つた、それから慶應三年には巴里の萬國大博覽會に、勸業上の視察と軍艦製造の用務とを帶びて渡航し、更に倫敦より和蘭に赴いて軍艦を注文し、明治元年歸朝するや、歐洲の制度に倣つて佐賀藩の兵制を改革し、明治三年三月、兵部之亟に任ぜられて海軍掛となり、主として海軍創設の事に當つた、此年、人の名は通稱か諱か、その一を用ひる制度となつたので、佐野は諱の常民を以て本名とすることゝなつた。

明治八年七月佐野は元老院議員に任ぜられ、十年、西南戦役に際して博愛社を創設し、他方第一回内閣勸業博覧會を開き、日本美術協會の前身たる龍池會を興す等、文に武に、我國の當展に貢献したところ頗る多い、十三年二月大藏卿に任ぜられて以來、トンノ、拍子に出世して、元老院議長、宮中顧問官となり子爵を授けられ、樞密顧問官より農商務大臣となり、日清戦役の功に依り伯爵を授けられた。

伯爵 清 浦 奎 吾

明治三十一年山縣内閣成立に際して司法大臣に任ぜられ、次で三十四年桂内閣の下に司法大臣となり、次で農商務大臣に轉じた、大正十三年には樞密院議長をやめて内閣總理大臣となり、長く官海に在った伯爵の恩給は、その額に於て日本第一だと云はれて居る、今は准元老として西園寺公の後繼者と目され其重きを措かれて居る。

貧乏人の伴は下駄屋の丁稚

由來熊本藩からはなか／＼人物を出したが、中にも清浦伯爵の如きは其最も偉なるものであ

らう、彼れ嘉永三年二月の生れで、幼ない時分には家は極々の貧乏暮しであつた、其爲に好きな學問もする事は出せず、父も家事上己むなく彼を熊本市の某下駄屋とやらに丁稚奉公にやつた、後には位人臣を極むる程の偉い人物のこととて、之より下駄屋の丁稚小僧では満足の出來やう筈もない、只當時の境遇が如何とも致様がないので、所謂蓋天の大志を抱きながらも、空しく下駄屋の小僧で其日を送つてゐた。

淡窓の塾で漢籍稽古の他は獨學

或日のこと彼はつく／＼身の將來を考へた、自分は小商人などは性質に適せぬのみか、斯る詰らぬことをして一生を相果つる精神はない、かう見えてものち／＼は日本に何人と數へられるやうな人間になる決心である、夫れにはいつ迄も下駄屋の小僧はして居られぬと、茲に一大奮起心を起した、兩親も前申す通り赤貧洗ふが如き境遇ではあるが、伴が彼程の精神と熱心さにはだされて下駄屋の丁稚をやめる事になつて、夫れからは兩親の許に居て熊本の廣瀬淡窓の塾に入つた。

漆窓先生は漢籍に長じ、其嚴父は豊後日田の出身で俳句の名人と言はれてゐた、先生若い時分は福岡の龜井塾に入つたが、病氣の爲め中途退學して後は、殆んど獨學で大成したといふ位の人物であつた、従つて漆窓塾では只管自力修養主義を鼓吹し、幾多の門下生に指導薰陶する處があつた、之が爲に清浦も此感化を受けて、何もかも殆んど獨學でやつて抜けたのである。

東海道テク／＼浦和に到着く

兎角するうちに維新の變遷に遭遇した、彼は此好機逸すべからずとなし、兩親に訴へて東都に赴くべく乞ふたが、母は悴が未だ弱年であることを按じて容易に許さなかつたが、彼は諄々として政變世變を説き、此時こそ身が出世の端緒を開くべく復たなき機會なるを辨じて肯かなかつたので、父も之を諒として單身東上を許した。

奎吾喜ぶまいことか、一度決心して都に上る以上は、出世して錦を着飾らねば再び郷里には歸らぬと、兩親の前に誓つて熊本を出で、やつて來たのが相も變らず東海道は五十三次、草鞋に脚絆、袴の股立を取つて、青天井を笠に、大地を履んで辛くも東京に上つたのが恰度明治三

年、秋風吹き始めたその十月頃であつた、いざ東京に着いては見たものの、何をして日を暮してよいか殆んど頼るべき途もないので、流れ流れて埼玉縣は浦和に來た、其時縣會議長をして居つた星野平兵衛といふ人の家に轉り込んで、身の振方を頼むと、星野も可憐さうに思ひ、早速北足立郡は小針村の某百姓家に食客に世話した、五日十日は兎もあれさういつ迄も遊ばせても置けぬといふ處からして、村の若い者に讀書や手習などの稽古をさせて貰ふことにした、清浦も喰ふや喰はずの境目故、最初のうちは眞面目くさつてやつてゐたが、さう永久迄も辛抱の出來る筈もない、僅か二ヶ月餘りで又も浦和に逃げて來て、今度は知己の周旋で或家の六疊一ト間の二階を借り受け、其家に寄寓させて貰ふことになつた、かうして何れにか職を探し廻つた。

食客から月五圓の小學教員

彼れ是れと奔走したが、なか／＼之れといふ職も見當らない、六十日目になると、やつこのことで此足立郡の風野村といふ所で、小學校の教員に雇ふてもよいといふ話が持上つた、夫れ

は何よりの話だと直様其村の小學教員となり濟し、後生大事と村童を相手にして居た、併し當時の名前は大助教などと申して、誠に立派に見受けられたが、月給はと尋ねて見れば只の五圓とは、今よりすれば呆れざるを得なかつた。

其後浦和に開成校といふ學校が出来たので、彼れも選拔を受けて其處の教員に榮轉し、月俸一躍十圓を頂戴するに至つた、そこで先生一生懸命に勤めて居ると、いつしか地方の評判となつて、終ひには永久迄も此村に居て呉れなんと、強ひられる様になつた、流石の清浦も衷心嬉しくもあり、又うす氣味が悪かつたとか。

埼玉縣の出仕が出世の端緒

前途に大望を抱ける彼れは、高の知れた教員で一生を送る精神のある筈はなし、どうか機會を得ては官吏になつて出世したいとの念願は、一日だも去らなんだ、處が彼れの熱心と其學才とは認められて、明治六年には埼玉縣の出仕に擧げられ、漸く月給二十五圓を受くる身分になられた、之れが抑も運勢の向き始めとでも申さうか、やがて二年目には中屬に上り月給四十圓

取りに昇つた、此時分管て大審院長として令名を賣つた横田國臣も彼れと同役で、共に暇を見ては法律などを研究し、時偶屁理窟の闘ひをしては、如何にも偉さうに法學通を氣取つたものであつた。

彼れ中屬で縣の學務主任を勤めて居た明治八年の十一月の頃、各府縣の學務主任會議が東京湯島臺の聖堂に開かれた、主任の清浦も例によつて其席に列し、問題毎に己れの意見を述べ立てたが、此時既に仲間連中に頭角を現はしたのを、風のたよりに聞き込んだのが時の大審院檢事長岸良兼養、成程清浦は棟梁の材だ、アンナ所に置くのは惜しいものだとあつて、忽ち引き抜いて司法出仕となし、明治十年に始めて檢事に取り立てられた、彼れそれから旭日昇天の勢を以て、高位に歴任するに至つた。

子爵 青木 周 藏

醫學修業のため獨逸に留學を命ぜられ、然も自分勝手に法律や政治の勉學をして、あつばれ外交官の適任者となり、公使として諸國に駐割したる後、再度外務大臣となりて子爵を賜はるの光榮を得た、彼が

獨逸婦人を妻としたのは、當時はこれが評判となつたもの、獨逸には大持であつたが、我大臣としては餘りに聲ばしい功績もなかつた。

チヨン髻姿で洋行の魁

青木は弘化元年正月十六日をもつて、周防國山口に生れたが、彼の幼い折の話として世に知られてゐることは殆ど無い、それで一足飛びに少壯時代の物語に移ることとする、明治の初年彼は萩原圭三と共に獨逸へ留學することとなつたが、佛國マルセーユに上陸した時の青木の服装はと見れば、打割き羽織に大刀を横たへ頭髮は大髻のチヨン髻姿、内地でこそ別に可笑いとも變手古とも感じないが、洋装した人々の中へ此一種變つた、日本風の扮装をしてゐたものだから、何處へ行つても冷評されてゐた、すると或日獨逸人でボーイ頭をして居る男が、彼の有様を見て非常に氣の毒がり、いろ／＼と歐洲の風俗を話して聞かせた上、このやうな扮装をしてゐると、何時でも他人に馬鹿にされるばかりだからと、自身でチヨン髻を切つてやり、洋装の心配までしてくれて、茲に始めて彼は留學生らしい風態を保ち得たさうである。

醫學の留學に筋違ひの法政研究

彼が獨逸へ留學してから間もなく、後の順天堂病院長の佐藤進がやつて來た、そこで彼と萩原と佐藤の三人は同じ下宿で勉強することとなつたが、何れも元氣旺盛の連中、讀書の餘暇には互に勝手な熱を吐いて、議論に花を咲かせてゐたところが、元來青木は醫學修業のため獨逸へ遣はされたのであるのに、肝腎の醫學などは顧みようとせず、只管政治や法律の學問ばかりを修めてゐたのである、茲に青木の爲に頗る弱つた事が持ち上つた、といふのは、彼の養父の周助といふのは醫者であつて、東京へお召出しになり御典醫となつてゐたところへ明治の初年、山縣有朋や其他長州の有力者が、歐洲視察に出かけることとなつて、一同江戸に集まり近日出發しようとしてゐる時、青木の養父は訣別を兼ねて一同の宿へやつて來た、さうして養子の周蔵が醫學修業のため獨逸へ參つてゐるが、風聞に依ると醫學の方は投つて置いて法律とか政治とかいふ八釜しいことばかり研究してゐるさうだから、一ツその實否を見とゞけて來てくれるようにと、内々山縣等に頼んだのであつた。

机上に醫書一冊でマンマと胡魔化し

ところが何處を何うして聞き込んだものか、この事が薄々青木の耳に入つた、これは大變だ、何とか一番胡魔化してやらねばならないと、早速同宿の佐藤進に相談に及んだ、佐藤は事も無けに「よし、何でもないことだ、醫學修業といふ名目で來てゐる者が、机上に醫書の一冊もないといふのは不都合だから、何でも素人によく分る醫書を飾つて置け、さすれば、巧く胡魔化するよ」と、相談茲に一決して、當時佐藤が學んでゐた圖入の解剖書と、嚙體を借り受け、何喰はぬ顔して、山縣一行の來るのを今や遅しと待受けてゐる。

すると案の條一行は青木の下宿にやつて來た、座敷へ通つて見ると、机上には圖の入つた醫書もあれば、又人の嫌ふ嚙體までもあるから、ハ、ア是れでは人の風聞は嘘だ、青木は矢張り醫學を修めてゐるに相違ないと、一行の人々うまうま「と胡魔化されて歸つてしまつた、そこで彼は遂に醫學のイの字も學ばずに、相變らず法律や政治の修業に熱中したのである。斯くて外國仕立の新らしい頭をもつて歸朝した周藏は、公使として適任の人物であり、爾來

屈指の外交官として其名を世に知られるに至つたが、明治二十二年山縣内閣の下に外務大臣の地位に上り、更に三十一年の同内閣に外務に任ぜられ、山縣系的外交官として従二位勳一等子爵といふ榮譽を擔ふに至つた。

子 爵 末 松 謙 澄

明治二十一年五月文學博士の學位を得、明治二十三年國會開設と共に代議に選ばれ、日清戦役平定の後功に依つて男爵を授けられ、三十一年伊藤内閣の下に逓信大臣の椅子に上り、越えて三十三年更に内務大臣に歴任し、後貴族院議員となつて子爵に陞叙された、當時博士で大臣は珍らしい方で、伊藤の愛婿であつた丈けに巾も利いた、彼は政治家といふよりも學者肌である處から、却つて其方に世の推敬を受けた、彼れが著「谷間の姫百合」は一代の名著として洛陽の紙價を高からしめたものだ。

汝の父祖と功績

子爵は安政二年八月二十日豊前國は京都郡の前田村に生れた、抑も末松家の祖は加賀守といはれたが、宇都宮家に仕へて家老の職を勤めた由緒ある家系、處が天正年間此宇都宮家は武運

拙くも、敵の爲に討亡ほされた、其時末松加賀守も却々勇戦して、敵を四方に切り捲つたが、城は陥り主君は打死されてしまふたので、自分も遂に其後を追ふて美事の戦死をされた。それから後加賀守の遺子は豊前國へ遁れて、此前田村に居を構へ、代々打續いて、子爵の父君の世となられた、父君の名を七右衛門と稱し、臥雲居士と號された、此人頗る公共心に富んでゐて、郡務に従事して地方の爲に一方ならず力を盡した、就中堤防や浚渫の治蹟といつたら随分感賞すべきものが多く、今でも村の人は尙子爵の父君の恩澤に浴した事を徳として居る、斯くも名門から人物の子爵を出した、果して其少壯時はどうであつたか。

村人より神童と唄はる

獅子は生れながらにして吞牛の志がある、世に英雄豪傑と稱せられ、名士賢人と敬はれるやうな人物は、幼少の時代から何處か凡童と異なる處があるに相違ない、子爵も亦實にさうであつた、彼れ八歳の時から始めて手習の稽古をしたが、夫れは、却々惘發なもので、本なども能く讀んだ、其上に記憶の好いことゝいつたら、驚く許り其頃同じ塾に何十人といふ朋輩が

居たが、子爵は一番年が少くつて、一番成績がよく出来た。夫れ故村の者も誰いふとなく、末松の伴は神童である、あの兒は今に屹度偉いものになるであらうと、皆が口々に言ひあつたが、果せる哉此神童は三十年後には、福岡縣下出身者中一流位の人物と出世した。

幼にして獨立自負の心強し

併し如何な人間でも、長所許りで、短所の無い者はない筈、之れが神ならぬ人間の致方ない處であらう、彼れ神童とも言はれた末松はどうしたことが、手習が大の嫌で隣村の或るお寺へ稽古に通つてゐた時分などは、師匠の際を窺つては忽ち庭へ飛び出し、多勢の兒童を集めて自分か餓鬼大將となり、眞面目さつて、稽古をして居る連中を嘲つていふのに「書は姓名を記すに足る許りだし、劍は一人に敵する許りである、乃公は將に萬人の敵を學ばうとするのである」と、氣焰を吐く具合は、恰度楚の項羽が兄の項梁に賣られた時に應へた通りであつた、然も彼此時分がら獨立自負の心が頗る強く、たとへどんな事があらうとも、決して、他の力などを借りやうと思はない、其上父母に告げるやうなこともなかつたのである、斯の如く彼は其平

常に於て凡物と其趣きを異にしてゐた。

村山佛山に就て漢學の稽古

夫れより一年二年と經つ間に、早や十一歳の春とはなつた、そこで何時迄手習の稽古に許りも通つて居られない處から、今度は隣村の村山佛山の門に入つて漢學を修める事となつた、一體全體此佛山といふ人は、當時福岡地方では有名な漢學者で、殊に徳望も高く、評判も頗る好かつた、子爵が此人に就て學ばれたのが抑も漢學の素養の大源で、後に詩作も得意となり、文學博士となつて其名を知らるゝに至つたのも、此時代の勉強が其基を爲した事が窺はれる。

十四歳大志を抱いて都に上る

未來の宰相を氣取つて居つた此小項羽先生は、今の若さに豊前あたりの片田舎にくすぶつて居た處で、到底果報は寝て居て來るものでない、牡丹餅とも棚になし、人上げて始めて棚に在りて、待てば海路の日よりなんぞといふことは、聖人のすることだ、此奴は一番大きな處へ飛

び出して行つて、一旗揚るに越したことはない、お定まりの文句を唸つて國をば出立した、段々とやつて來たは上方よりも東海道は五十三次、鐵脚孤筇、單身飄然東の都は江戸の眞ん中ドツカと許り旅途に疲れた御輿を据えたのは、恰度明治の四年で彼が十七歳の時であつた。

師範校を放逐され新聞に投書

彼は先づ近藤の塾へ入り、英語と漢學とを兼ね修めた、そのうちに明治六年政府は師範學校といふものを始めて設立し、そして教員とする人物を養成する目的で是等志願者を募集した、處が其當時彼は學資といつて父兄から貰はれる程の境遇でもなし、勢ひ何れかの食客とでもなつて勉強を續ける外はなかつた、そこで彼も將來學校の教員なんぞは希望ではないが、前申す如き境遇の如何ともすべき術もなく、官費で勉強が出来れば、一時は辛抱する外に途はないとあきらめて、此募集に應じて試験を受けると無事に合格して師範校へ入學した。

眞面目に勉強して居たのは束の間、何しろ項羽もどきの彼、なか／＼おとなしくして居られないので、いつしか本性を現はし、賄征伐の張本人となつて暴れ出したので、同僚の仙石某

(後に典獄となつた人)などと忽ち學校を追ひ出されてしまつた、かうなつて見れば、今から飯に有り付く途を講じなければならぬ、恰度其折新聞で投書を募つて居たので、物はためしと種々の文章を綴つては東京日日新聞へ寄書し、何分かの云はゞ原稿料などを貰つて、傍ら外國語學校へ通つた、此投書が縁となり、後には櫻痴居士(福地源一郎)に引立てられ、一日彼を呼んで兎も角乃公が世話をしてやるから、社へ入れと言はれたので、彼ももつけの幸ひ、喜んで入社し日報社員の一人となり得た。

馬車中の伊藤に見出さる

すると或日のこと、親分の櫻痴居士に連れられて銀座の表通りを逍遙して居ると、其時恰度向ふから二頭立の馬車に乗つて、意氣揚々とやつて來たのが後の公爵伊藤博文、(當時伊藤は參議で中を利かした)恰度擦れ違ひながら櫻痴居士に一寸挨拶したが、其後居士が伊藤參議の邸へ參伺した時に、參議にはふと君と同伴し居つた末松といふ青年は至つて無邪氣で、然かも至つて仇氣がないどつちかといへば少し抜けたらしく見えたかも知れんが、居士の脇に居た姿

が伊藤の目に映じた、之れを伊藤は今思ひ出しか、「時に過般君と銀座で出會つた時、一緒に居た彼のブク／＼して居る、愛らしい青年は一體何者だい」と居士に尋ねられたので、居士此奴は恰度好い處だ、末松もあゝして居ては出世の程も覺束ない故、一番甘く伊藤に吹きかけて、世話をして貰つてやらうと、渡りに舟の輕口で、「アレは豊前から來た末松といふ者だが、幼い時から神童の譽高く、今は私の社へ入つて居るが、文章といひ、學問と云ひ、今時の若い者には珍らしい人物で、末頼母しい男であります」と頗る贊めて語つたので、伊藤も少々眞に受けたものと見え「フム左様かい、ソんな男ならたまには乃公の邸へも遊びに寄越して呉れい」と切り出したので、此奴しめた哩と腹のうちで微笑つたが、そんなことは顔へも出さず、其日は其儘伊藤の邸を辭して歸つて來た。

櫻痴居士の紹介で伊藤に會見

やがて四五日程経つてから、今日あたりは宜からうと、居士は自ら紹介状を認めて夫れを末松に渡した、彼は之れを懐にして早速伊藤の邸に出懸けて行つた、すると伊藤は殊の外好機

嫌で、まあ此方へ通れと自分の室へ誘ひ、種々と話をした末、「若い時といふものは二度とはないから、何でも充分に精出して勉強した方がよい、乃公なんぞは當今はなかく、公務の方が忙しいので、碌々書物も読む暇がない、お前なんかまだ年は若いし、前途頗る有望の身だ、まあ之れでも呈げるから読んで見たが宜からう」といつて、ミルの論理學とギボンの羅馬史とを末松に呉れた、尤も其當時彼は文壇で新進文士として多少共名を知られかゝつて居た、夫れに伊藤も折々末松の文章などを讀んで、餘ッ程氣に叶つたと見えた、爾來伊藤に對なからず寵遇せられ、遂には養子問題迄も惹起す好運を迎へた。

養子を断はつて娘を嫁に押付らる

由來大臣になつた者も少なくないが、中にも伊藤公は超越したる大人物であつたのみか、漢學にも精通し、早くも外國語に達し、法律經濟の學にも達してゐた、何をいふにも暇を盗んで書見した、彼の文詩、彼の筆蹟、實に敬服に價して居る、コンナ譯で末松が文章の巧妙な處などを感嘆して、遂に寵遇するに至つたのも道理である。

殊に伊藤公は自分の氣に入つた者や、將來見込ありと思ふ人は、よくも引立て、使つて呉れる處に彼の美徳が窺はれる、公は會ふ毎に末松が日増に可愛くなつた、夫れが昂じて己れの養子にしようといふ氣になつたので、或日末松を一室に招いで、極内證で末松に向ひ、どうか乃公の養子になつて呉れんかと口説いたが、どうした譯か末松の方でウンと承知しない、夫れでは據ないからと、今度は娘を嫁に呉れる事にして覺が付いた、何ぞ知らん、曩に末松へ贈つた二冊の洋書は、後に花婿へ初めての引出物とならうとは。

書生見習後には大學に

彼は伊藤參議の引立て、明治八年には太政官御用掛となつた、これが官途に就いた初めである、此時歳僅か二十一歳、明治十年の西南戰爭起るや、陸軍七等出仕で山縣參軍の幕僚として戦地に赴き、亂平ぐに及んで歸東、今度は伊藤なぞの世話で、いよく洋行する事とはなつた、そこで今日とは違つて、只留學さす譯にも行かぬ處から、名目は公使館一等書記生見習といふ格で、萬里の長途無事に首都ロンドンへ到着して、暫し公務に就いたが、幾何もなく退い

てケンブリッジ大學へ入つた、在學三年にして優等で卒業し、エルエルビー、パッチエロー、オプアーツの學位を授かり、夫れから又マスターに進んだ、日本でいへば文學博士といふ學位である。

彼れケンブリッジ大學に在る頃は、佛獨の二學をも併せ修めた、なか／＼成績もよいので、大學の内外でも日本留學生の末松の評判は非常なものであつた、加之に頗る雄辯で、平常は左程無駄口を叩かぬ方だが、併し討論會でもある時は、それは／＼一瀉千里の勢を以て滔々と演べ立てる、此やり振りには何れも耳を傾けて、滿堂肅然として謹聽したとか、斯くして彼れは明治十九年學成つて歸朝された。

子爵 谷 干 城

西南戰爭に熊本鎮臺で雷名を轟かした將軍谷は、性來の剛骨漢で押し通して來た、彼れが大臣となつても又貴族院議員たりしときでも、其剛直には何人も一目を置いた程で、其潔白な處は流石國家の干城たる軍人としての性格をば忌憚なく發揮したものである、取り分け維新當時に於ける彼れが言動、悉くそれ至誠盡忠の結晶たらぬはなしであつた。

谷家の父祖と閱歷一斑

谷の先祖は土佐國長岡郡八幡村所在の、八幡神社の神官をし居つた谷重遠といふ人で、なか／＼の儒者として其名を知られ、遂に高知藩主山内公の耳に入つて、やがて召出されて儒臣となつた、この重遠の子を恒守と云ひ、皇學に通じて國歌を能くし、其子の丹内號を北溪といつて學才併び長じ、其上吏務に通曉したところから、重く用ひられて藩の大監察となり、大に藩政を改革し、舊習の惡弊を一洗して處理宜しきを得たので、名望藩中に知れ渡つた、丹内の子を萬六、萬六の子を萬七と呼び、是れ亦儒學を好み別に一家を成した、是れ即ち子爵の先考である。

夫婦共稼ぎて貧しき生活

子は諱は干城、守部は其通稱で、天保八年二月十二日土佐の窪口村といふ處に生れた、幼い時分は家政が大に衰へて居たので、なか／＼他の子供のやうに遊び廻つて居られなかつた、其

後子が夫人玖満子を貰つた時にも、僅かに五人扶持の小身に過ぎなかつた、故に到底一家數人の口を糊するに足らなんだ、處が花嫁殿は同藩の高臣で、二百石取りの家に生れた嬢様であつたが、婿殿の家は此通りの貧乏で仕方がないので、自ら木綿の筒袖を着て、甲斐々々しくも朝早く町へ出ては馬糞を拾ひ、夕に家に歸つては草鞋を作り、そして纖弱い女の手一つで、拵装にも振りにも一向構はず、婿殿が出世の程を樂みに、あらゆる艱難辛苦を嘗め盡して、どうやら斯うやら貧乏世帯を張り通した中に、世は段々騒がしくなつて來たので、子は一旗揚げるのは正に此時だとばかり、武市半平太や板垣退助なんぞと共に、四方に奔走したのであつた。

武道の稽古に嚴禁の内規

幼時の彼れは、英資既に群重を超越して、後年將に爲す處あらんとするやうな萌芽を顯はして居た、一體土佐といふ處は武道の盛んな所で、藩中の子弟が互に黨派を組んで相争ひ而して各其鋭を練るといふ風が盛んであつた、そこで城中に三つの組が出来て、それが上組、北組、南組といつた、そして其總稱を盛組と稱へた、處が各組とも何れも少壯氣鋭の連中ばかりの寄

り集りで、ともすると衝突が起る、けれども組には内規といふものがあつて、何れの時何れの場所争ひがあらうと、決して刀や棍棒なんかを以て暴力を揮ひ、或は敵の頭へ手を上げることを嚴禁してあつた、それ故夕暮なんか途中で兩組が出合つて、忽ち鬭争が始まつても此内規を破る者は割合に少く、互にそれを耻として居つたのである、此時分城下で谷といへばなかく有名なもので、後年千軍萬馬の間、砲彈雨注の境に立つて、神色自若たる彼れの勇氣は、正に此時代に於て練られたのであつた。

江戸に上りて息軒の門に入る

是れより以前、夙くも時勢の變遷に眼を注がれて「男子立志出郷關」とか何とか、お定まりの文句を唸り、郷里を飛び出してはる／＼江戸へと上つた、着くと早速當時江戸で名高かつた當時第一流の大學者安井息軒の門に入り、茲に螢雪の苦學を積んだが、息軒先生は忽ち谷が卓犖不羈の人物であることを見抜き、殊に心をつけて教育指導した、性來才智衆を擡んでゐたので、學問の進歩も著るしく、嶄然として頭角を顯はすやうになつた。

師匠の息軒も、此奴は面白い男だ、そして將來見込ある青年であると、早速抜擢して塾の學頭とし、塾生の監督をさせると、その遣りツ振りは悉く自然の措置法に適ひ、塾則肅然として克く整ひ、他生皆學頭を慕うて其采配に従ひ、これまで懶惰であつた學生達も其感化で翻然勉強するやうになつた、師匠も彼れが奇才に一方ならず感心したといふ、斯くて江戸にて勉強された谷は、一先づ國へ歸つたが、郷里に着く早々藩公に召されて、藩の學問所なる文武館の助教にと任ぜられた、だが谷をいつまでも助教などにして置くのは惜いものだとあつて、後藩の重役は彼れを推して一躍藩の小監察に擧げた、是れ實に谷が立身出世の緒である。

父の見立てた賢夫人

谷が玖満子夫人を迎へたについて、一つのエピソードがあるから左に紹介しよう、前に申した如く谷が江戸に在つて息軒先生の門に勉強して居た時、郷里の父親から火急の用事が出来たから直ぐ歸國せよとの手紙が來た、何事だらうと訝りながら急ぎ歸つて見ると、父親は「お前も年頃であるから獨身で居るのもよくあるまいと思つて、今度女房を貰つてやつた、そして

其嫁はもう宅へ引取つて、臺所の手傳ひをさせて居る、お前會つてやれ」との意外千萬な話、谷は心中一體どんな女を女房に貰つてくれたのだらうか、別嬪だらうか、お多福だらうかと、甚だ不安に思ひつゝ會つて見ると大に失望してしまつた、「こんな女か、馬鹿々々しい」と不滿不平に堪へなかつたが、併し父親が折角選擇したものを無碍に斷る譯には行かないので、止むなく結婚をしてしまつた。

けれども谷はどうしても、此女は嫌だ、何とかして女の缺點を見付け、それを口實にして追出してやらうと考へて、日夜鶉の目鷹の目で缺點さがしに熱中した、されど瑣少の缺點もないのみか、前にも書いた通り實に貞操堅固な婦人であるので、到頭谷は我を折つて夫人の軍門に降参してしまつた、後日西南戦役が起つて、あの有名な熊本籠城の時、玖満子夫人は夫を助け士卒を勵まし、誠に婦人の鑑とも云ふべき行爲をしたので、谷は深く感動して、今更ながら、昔一時ではあつたにしても夫人を追出さうなどと考へたことを、深く心の中で耻ぢたといふことである。

公望 西園寺公望

西園寺家第三十三代の當主公望は、明治政府の成立と共に、十九歳にして參與に拔擢せられ、貴公子の身を以て翌年山陰道鎮撫總督、北陸道鎮撫總督の官職を授けられ、華胄界に於ける稀有の人として衆目を驚かした、其後政界の人となつて文部大臣となり、臨時總理大臣となり、明治三十九年第一次西園寺内閣を組織し、明治四十四年第二次西園寺内閣を組織し、政界隱退後、平和會議の使節となり、今や唯一人の元老として至尊の御覺え目出たい。

三歳にして既に從五位下

西園寺は、皇族の分脈であるところの徳大寺公純の第二子に生れ、西園寺家第三十三世の主となつた人で、嘉永二年十月二十三日の出生であるが、朝廷へは二年前にさかのほつて、弘化四年に生れたことに届けてある、これは官年と稱して當時一般に行はれたことで、事の起源を訪ねれば、支那から來た風習である、支那では六朝時代から卿大夫の間には、實際の年齢を實年と號し、官廳へ届け出る年を官年と號し、官年は實年より多く數へることが流行し、唐から

宋に至るまで此風が盛んに行はれたが、元の頃から廢絶したやうである、その我が邦に行はれるやうになつたのは、何時頃から始まつたか明かでないが、餘程以前から行はれたものらしい西園寺は嘉永四年七月十九日に父の師季を喪つたが、この年十月二十日、官年で五歳になつたので、從五位下に叙せられた、さうして幼名の美丸を改めて公望と稱することゝなつた、其時西園寺家の所領は、普通六百石と稱してゐるが、實數は四百九十七石餘であつて、これを他の大名達が、多きは百萬石、少きも十萬石を領するものに比べると、殆ど數ふるにも足らない程のものであつた、がしかし當時皇室式微の時で、その御料さへ驚くべき僅少のものであつたことに比較して見れば、公卿の所領の少きは一向不思議でもなかつた。

九歳にして右近衛少將

彼は西園寺氏に迎へられて實子となつたのであるが、母は内大臣徳大寺實堅の第二女である他人の子を養つて實子とするといふことは、文字そのものが今日に於ては、頗る奇異に感ぜられるが、當時是等の事に就ては、今日よりも嚴密なる規定があつた、天皇が宮家の子を猶子と

せられるやうな事もあつたが、これは、之を待つこと猶子のごとくするといふやうな意味で、一種の尊稱を與ふるに過ぎなかつた、また普通に養子といへば、家族の一員として養はるのであるが、この権利は實子の如く完全なものではなかつた、然るに實子として迎へるといへば、其家長の後を繼承すべき権利を完全に保有し、實の子と同一の状態に置かれるものであつた。斯くて西園寺は嘉永六年五月十五日に侍従と云つても今日のは全く別物で、昔日の侍従は一種の官爵であつて職務ではなく、今日の侍従は職務であつて、官爵ではない、今日の侍従に類するものは、其頃勤番と稱したものである、勤番とは公卿の少年の十五歳に達した者が、皆宮中に奉仕することを指すので、西園寺が侍従となつたのは官年で八歳、實年で六歳の時であつたから、事實に於ても今日の侍従のやうな仕事は爲し得ないわけだ、越えて安政四年十月實年九歳にして元服昇殿を許され、正四位下を以て、右近衛公少將に任ぜられたので、恩を謝するが爲に参内した、さうして慣例に依つて舞踏をした、舞踏と云つたところで、眞實に雅樂の舞踏をやるのではなく、唯軽く身體を動かし、笏を上下するくらゐのもので、平民の子と違つてお公卿様の公達は、こんな状態で育つたのであつた。

西園寺公は琵琶の宗家

萬延元年、西園寺は實年十二歳官年十四歳になつたので、明春から出番を仰付けられることとなつたが、叡慮により襲の雑役を免ぜらるゝ事となつた、出番とは即ち前に言つた勤番のこと、公卿の少年十五歳に達したものが、交るゝ宮中の雑務に當るので、その中には五攝家や大臣の爲に茶を汲むなど、今日の給仕のやうなことをやらせねばならぬ事もあつたが、是等給仕的任務を襲の雑役と申し、三位以下のものは皆此任務をやらされるが、西園寺は正四位下だから、普通にいへば免れぬわけだが、叡慮によつてこの雑役を免れたのである。

文久元年三月、右近衛中將に任ぜられ、同四月從三位に叙せられ、其八月禁中御樂人數に加へられた、元來公卿の家には、それ／＼其家特有の家學があつて、冷泉家は和歌の宗家であり、安倍氏は陰陽道の宗家、又飛鳥井は蹴鞠の宗家であると定められて居たが、西園寺家は平安朝の末期、源平二氏勃興の前頃から琵琶の家となつてゐたので、公望も此間に少しは琵琶を學んだらしい。

群書を涉獵し識見を拓く

公望は極めて少き頃より種々の意見を懐き、其意見も却々奇搜で絶倫のものであつた、さりとて天分のみでなく、勉強工夫もあつたやうである、彼は學習院へ入學したが、學習院といつても今の學習院とは、全く系統を異にし、足利時代から、公卿が學問を怠り遊惰に耽るので、光格天皇の御代に古の淳和獎學兩院の復活とまでは行かずとも、公卿の爲に學校を設けたいとの議があつたのを、孝明天皇の御時に至り初めて開設されたもので、一通りの學校に過ぎなかつた、公望は此處へ入學以前既に伊藤徳藏に就いて儒學を修め、秋田秋雪に就いて詩文を學んでゐた、伊藤徳藏は物徂徠に先じて古學を唱へた儒界の傑物、伊藤仁齋の子孫であつて、その指導は早く公望を啓發するところが多かつた、また秋田秋雪は學習院の教師であつたが、公望は此兩人に就いて手ほどきを受けると共に、群書を涉獵して自ら其識見を開拓したもので、學習院に入學以前、既に一通りの學問が出来てゐたのだから、入學後は質問を發して教師をいぢめるくらゐのことで、別に其學力に蓋をしたといふやうなことはないらしい。

また公望の筆蹟は人も知る如く暢達にして雄勁といふべく、これは五六歳の頃から、今の近衛公の大祖父に當る近衛忠顯に學んだのが初めて、公望は其後種々の法帳をも見、特に賀知章の帳に至りては、勉強して學んだことがあるので、彼の書は夙に近衛様流の範圍を脱してしまつた。

説く所斯くの如く卓抜

幕府の末年に當つて尊王攘夷の風雲天下に湧り各藩の志士は京阪を中心に来往集散して、野夫馬丁も海防の事を口にすると、外國の軍艦と銃器は我國人の最も恐れるところであつた、當時京都の與力に檜崎といふ弓師があつて、斯道の名人として多くの門弟を有し、公卿の中でも其門に入つて武術を學ぶものがあつた。

或人が公望に檜崎の事を話して、今後大に弓術を學ぶの必要を論じた、其言に依れば、西洋の銃器は彈丸を一發して後、更に一彈を裝填するに手数と時間を要するが、弓は一發また一發、間斷なく發し得るから、武器としては弓の方が銃器に優るといふのである、成程當時の鐵

砲は先きごめで、時間と手数に於て餘り弓に優らざるは事實であつたが、公望は之を聞いて然らば其與力の弓師如き名人は、日本國中に何人あるかと問うた、四五人くらゐしかありませんと答へると、それでは素人が弓師の腕前に匹敵するくらゐになるには、何年程の練習が必要かと尋ねる、先づ七八年はかかりませうと云ふと、公望は靜に之に答へて、西洋の銃器は僅かの時間で、其用方が習得されるが、弓に至つては天分の巧拙によつて、學習に遅速もあるから、今後の武器は矢張り鐵砲の外はあるまいと論じた、僅か十四歳の少年で、當時、固有の精神によつて、固有の武器を用ふべしとの議論が旺盛な最中に、文明論に縁遠き京都に於て、公卿の少年の口から斯る議論を聞かうとは誰も豫期せざるところであつた。

紅蘭女史に屁古まさる

慶應元年、幕府を倒して朝廷の權力を回復すべしといふ議論の盛んに唱へらるゝ頃から、京都附近に神符なるものが下りはじめて、後には近畿到る處に其事があつた、初めのうちは神符ばかりであつたが、遂には絹布が下つたり、握飯が下つたりするやうになつて、それが下つた家

では、祭禮若くは謝思の意味に於て、商賣を休み、赤飯を炊いて、家人親戚寄り集つての酒宴に、踊つたり舞つたりの大騒ぎ、後には一家のみならず、一町内數百人相集合して、エライヤツヂヤ、エライヤツヂヤと呶鳴りつゝ市中を練り歩く有様に、市民も浮かれ立つて家業を忘れ唯此事にのみ心を奪はれるといふ状態、暫くして士族の人達までも専ら此事のみを語るやうになつた、そのうちには西園寺家の庭の手水鉢の傍に、握飯の下つたこともあつた、或日梁川星巖の未亡人紅蘭女史が、豫てから詩文の交りて西園寺家に入つてゐたものだから、此時も遊びに来て、盛んに神符の事を語つた、公望は五月蠅くて仕やうがないから、孔子は怪力亂神を語らずと云はれたが、神符の如きは怪の怪なるもの、之を語らないのが儒道の本旨でござらうとやつた、すると紅蘭女史は之を遮つて、孔子の言つたのは怪力亂神のことであつて此度の神符は天照皇大神の神符であるから、決して怪ではない、之を語るは儒道の本旨に悖るものではないと云ふとやつた、傍に居た學者達、公望も一本參つたなど批評したことがあつた。時に彼は十六歳の美少年。

公平無私の立派な態度

慶應三年、幕府は愈々大政を奉還するの奏議を上つて、朝廷では岩倉具視が總てを切り盛りし、制度を一變して千古の一大改革をやつた、結果として西園寺公望は參與に任命された、當時十九歳の公望を抜擢した岩倉は、早くも公望の人物に着目してゐたかを想像される、而して初めは公卿も藩士も共に等しく參與と稱してゐたが、後には公卿を上參與、藩士を下參與と改めて區分をつけた。

慶應三年十月、朝廷は討幕の密勅を薩長兩藩に下し、十二月八日には薩長土以下雄藩の志士を參與として、家柄の高い公卿と並んで、時々小御所で國事を論決せしむることとなつたが、是等藩士にして參與たるものを、宮中儀禮の際に於て如何に取扱ふべきかに就いて議論が起つた、それは公卿等は藩士の實力才幹を承知し、且つ無くてはならぬ必要の人として、相當の信用を拂ふものゝ、心の底では公卿の地位を高く見て、藩士を卑むの風があるのと、今一つは宮中の典禮には、古來家柄によつて位階もあり服装もあり、一定の位階服装なくしては、殿上の

儀禮に相應せぬと定めてある因襲に制せらるゝ心からと、此二つの理由に依つて、藩士等の參與を殿上に昇らしめず、殿庭の砂上に席を敷いて、遙に式に列せしむべしとの論も出た、これは平安朝時代に、藤原氏の公卿が廟堂に安坐して、源賴朝や爲頼を驅使したと同一の心理状態であつて、之を以て天下の豪傑をして力を王事に盡さしめんとするは、時勢の變遷を解せずるものたるは言ふまでもなく、斯る議論が勝を占めるやうでは、たとへ維新の大業が一旦成功しても、又第二の建武中興程度のものに終つたかも知れない、幸にして賢明なる西園寺公望あつて、是等時代錯誤者の頑冥を打ち破つたのである。

右の議論を聞いた公望は、是は以ての外のことである、朝廷すでに各藩士を參與たらしめ、國務を評決せしめる以上は、其身分が公卿たるは藩士たるとは問ふところでない、宜しく彼等をして昇殿せしむべきであると言ひ放つたが、其言の終るか終らぬ時、公望の實兄徳大寺實則は、聲を勵まして、西園寺君の説の如くであるなら、やがては大久保大納言、井上參議といふやうなことになるであらうが、それでも差支なきやと反問した、公望は冷然として、固より然り、やがては大臣となるものもあるべし、左なくては新政は行はれませぬと答へたので、一

座白け渡つたが、公望の説容れられて、各藩の參與に昇殿を許して式に列せしめられることゝなつた。

今日より之を見れば、至當の場合に至當の議論をしたに過ぎないやうであるが、朝廷がなほ京都にあり、國務が宮中に於て評決せられ、而して公卿は高くとまつて居た時代に於ては、實に頭の新しい、非常に急進な、又非常に卓越した議論であつたので、斯る態度は、後來彼の一生を通じて、凡ゆる場合に見られ、彼をして世間尊崇の的とならしめた所のものである。

二十歳にして鎮撫總督

前大將軍徳川慶喜が、三萬有餘の兵を率ゐて大阪を出發するとの報道が確められて、廟議こゝに一決、薩長兩藩の兵を以て之を迎へ撃つことゝなつたが、楮その勝敗の數に至つては、何人も保證し得るものがない、そこで若し勤王の軍が敗れた時の準備として、丹波路を平けて、天子巡狩の道を開かねばならぬといふので、二十歳の少年西園寺公望は、山陰道鎮撫總督の官職を授けられ、薩長二藩の兵各一小隊を率ゐる事となつたので、軍装凛々しく馬に跨り、参内拜

辭して家の諸大夫等を従へ丹波路に向つた、此時伏見鳥羽の方面には砲聲の斷續するのが聞えてゐた、彼は先づ龜岡藩を降伏せしめ、次で篠山、福地山の諸城も、鳥羽伏見の官軍の勝報で忽ち降参した、それから宮津、鳥取、松江を従へて、山陰道鎮撫の命を果したから、作州津山から姫路に出て、利戸から佐賀藩の軍艦に乗り大阪へ歸つた、此時明治天皇は暫く大阪に行幸し給ふたので、西園寺も此處へ凱旋したのである。

陣中でも暇あれば讀書

徳川慶喜は恭順して、朝命を待ち、江戸城は血を流さずして官軍の手中に收めたが、奥州二十七藩は會津と仙臺の二藩を中心として聯盟し、越後の諸藩と連引して朝命に服せず、容易ならぬ形勢となつたので、東山道第二軍を起し、公望をその總督に命じたが、東山道には既に一軍が進行中であるから、寧ろ越後口から奥羽を攻撃する方が便利であるといふので、之を中止し、西園寺は北陸道鎮撫總督を命ぜられ、諸般の準備を整へて、薩藩の兵凡そ五百人を率ゐ、京都から越後へ向けて進發した、此時には洋服を着て葦山といふ笠を被つてゐた、彼は直江津

から高田城に入り、此處を本營として、軍隊は先づ總て前線に送つたが、而も彼は普通の華胃の如く、安全なる軍後にあつて報告を受くるに満足せず、屢馬に乗つて砲火を冒し前線に進んだ、爲に士氣大に振つたといふ、さうして公望は陣中で暇があれば、いつも讀書を樂んでゐたさうである。

越後の叛軍は長岡が中心であつたが、官軍は幾多の苦戦を重ねて遂に長岡城を取つた、然るに政府では越後口の状況容易ならずと見て援兵を送る外に仁和寺宮を會津征討越後口總督に任じたので、西園寺は仁和寺宮の大參謀といふことになつた、それより叛軍の手に奪還された長岡城を再び奪取し、村松城を取り更に村上城を取つて會津に入り、會津平定の後越後の新發田城に歸つた。

洋行の一念に官を辭す

明治元年十月二十八日、政府は越後府を設け新發田城に滞在中の西園寺を府知事となし、軍將は元の如しといふ朝命が達し、越えて十二月には越後全國を委任仰せ出さるとの朝命が下つ

た、これでは西園寺は永く越後に滞在せねばならぬ、従つて倒幕の事成らば是非共洋行したいと思つてゐる素志も、いつになつたら行はるゝことやら分らなくなつて來た、そこで彼は心願する平かならずで、明治二年正月五日、急に東京へ出て越後府知事の職を辭するの表を出したが、お許しがない、さうして二十四日には更に新潟府知事として速に越後に下るべしとの御沙汰があつた、然し西園寺がまだ越後に行かないうちに、二月二十二日新潟府なるものは廢されて新潟縣となつたので、府知事問題も有耶無耶の裡に葬られ、そして西園寺は序でに軍職をも投げ出したいと願ひ出たので、三等陸軍將といふ官職も免ぜられ、山陰道北越等の軍功を賞して三百石の永世祿を下賜された、此時西園寺は唯日新の學問をしたいといふ志から何とかして洋行せんものとの一念に支配せられ、他を顧るの暇がなかつたらしい。

魚の下から藝妓の手紙

明治史中の巨人の一たる大村益次郎は、西園寺公望を愛すること一通りでなかつた、西園寺も亦深く大村を尊敬して、その説を聽くこと少くなかつた、大村が西園寺を親愛したのは、そ

の器を尙んだ爲であることは言ふまでもないが、政治的考量から来たものであつたことも否定できない、それは明治政府既に成るも、功名を負ふ武將の中から、必ず建武の昔の如く足利尊氏が九州から起るであらうと豫期した大村は、斯る時に際すれば、公卿の中から家柄の高い人物の確りしたものを選んで、働かしめねばならぬ事があるかも知れぬ、だから今から其人を物色して置かねばならぬが、西園寺こそ實に其人なるべしとの見込みを付けたものであると云ふ説もある。

西園寺が越後から歸つて暫く東京に遊んでゐたが、豫て大村は初め西園寺に兵學を學ぶ事を勧め、後には兵學をやめて、開成所の教師である佛人ブウセーに就いて佛語を學ぶやうに説いたので、西園寺はブウセーの所へ通つて居たが其後山内容堂が、開成所を管理するに及んで、西園寺を開成所へ入れようと言ひ出し、双方引張り風の風であつた、大村は初めは反對したが何故か後には賛成するやうになつたので、西園寺は暫時開成所で學問をしてゐた、ところが或日西園寺の所へ魚を贈つて来たものがあつて、彼は之を學生達に食べさせてくれと届けたから學校の料理番が之を料理する時、下の方から藝妓の名を書いた紙片が出て来た、これは西園寺が

柳橋で馴染の藝妓からの到來物を、不用意に其儘學校へ送つたといふわけなんだが、料理番は面白半分、之を吹聴したものだから、學生等は、たとへ公卿とはいへ、學生の身分で藝妓買ひとは怪しからぬと騒ぎ出し、一時は却々やかましい問題となつた。

平民的氣分のあらはれ

西園寺は此時既に、心から公卿の衣冠と、軍將の戎服を脱却してしまつたので、明治二年七月三日、勤學中は官位を辭したいと申し出でて勅許を得、同日名を望一郎と改めたが、是は豫て見物した金比羅利生記の芝居の中で、田宮坊太郎といふヒーローがあつたのを思ひ出し、之に因んで自ら名を附けたのださうだが、華胄界の第一流たる名族の身を以て、然も昨年まで戎馬の間に馳驅したものが、劇中の人物に因んで平民的な名を付けるなど、彼の洒落ツ氣は此頃からボツ／＼と發揚しかけたのだ。

彼は此時既に二十歳に達したので、普通に云へば、彼の如き高い階級にあつては、夙くに夫人を迎へてゐる筈であつたが、彼は猶獨身であつた、さうして數百年來卑しめられたる、或る

階級の中から、夫人を選びたいとの突飛なことを言ひ出した、これは世間で古來の因襲を改めるとか、門閥を破るとか云つても、唯口先ばかりで之を實行するものがなければ、千言萬語も何等の効はないから、自ら腕を示してやらうといふ心持であつたらしい、しかしながら種々の理由があつて、此事は行はれずじまつた、人は如何に新しい思想を懐いたとしても、それが全く時勢と没交渉なことであれば、決して實行出來得る筈はない、畢竟、維新當時の一時の人心の動き方が、彼をして斯んな考へを起さしめたものであらう。

危ふかつた大村訪問

明治二年、西園寺は東京大阪間を往來する汽船に乗つて、京都から東京へ歸つた事があつたが、大村益次郎はわざ／＼品川まで迎へに来て、西園寺に對し海上の具合は何うであつたかと聞くので、至極平穩で一向無事だつたと答へると、大村は、この汽船が若し暴風に會つて、西園寺が汽船に懲りて佛國行を思ひ止らば幸ひであつたのになどと戯れた、これは西園寺が平生類に佛蘭西に行きたいと云つてゐるからのである、それから此年の十月、また京都へ行く

ことになつたから、大村に別れを告げたところ、大村は予も近日京都へ行くつもりだから、いづれ彼方で會ひませうと言つて別れたが、何ぞ圖らん、これが大村と西園寺との永の別れとなつたのだ。

西園寺は久しぶりに京都の舊居に歸つたので、毎日詩酒の微逐に忙しかつたが、十一月には約束どほり大村が京都に來た、これは京都大阪附近に兵學寮を起さうとするためで、大村の想像中にある、足利尊氏の再起に備へんとする手段の一つであつた、西園寺は五日に大村を訪問しようとして出かける途端に、萬里小路通房が訪ねて來て、大村に會ふのは今夜に限るわけでもあるまい、久しぶりに一杯やつて舊事を語らうぢやないかといふので、それでは大村訪問はやめようと、二人は相携へて酒樓に上り、愉快に飲んで家に歸つたが、其夜大村は刺客の襲ふところとなつてその宿屋で殺された、若し同夜、萬里小路の誘引をこつて、西園寺が大村を訪問して居つたならば、傍杖を喰つて大村と運命を共にしたかも知れない、人間の運命は實に測り知るべからざる事を思はせられる。

外山正一

舊幕臣の家に生れた生粹の江戸ッ兒、英邁の資を以て幼少の時から學問を勵み、十六歳にして既に開成所の教授となり、年二十にして、我邦最初の英國留學生となり、或は外交官補となり、再び米國留學生となるなど、變化頗る多き經歷を有し、二十年間の長き大學教授より、文部大臣とまで昇進した處に、彼れの異常の人物たることを知られる、然かも學者間には無二の權威者と認識されてゐた。

生粹の江戸ッ兒氣質

外山家の祖先は所謂三河武士で、徳川家康に仕へて忠勤を抽んでた外山正重以來、代々徳川幕府の祿二百二十俵を食んで、或は具足奉行となり、或は藏奉行となつたが、多くは大番の士となつてゐた、正一の父忠兵衛正義は幼より文武の志篤く、まだ部屋住みの身分ながら、藝術出精といふ處で、召出されて大番の士を命ぜられた、その後歩兵指圖役に進み、職務に忠實で二十餘年間一日の缺動もしなかつたといふほど恪勤な人物、この親の氣風を承けた外山は、

「口さきばかり腸は無し」といはれた江戸ッ兒には、實に珍らしい好氣質の男で、明治の初めから赤門天狗と稱されたのは彼である、さうして陰然大學を外に代表してゐる人物だつた、それに二十年一日の如く、武骨な流行遅れの長靴に、いつも粗未なフロックコートを着用し及んで、文科大學の教授をしてゐた頃には、毎々々々焼直しの講義ばかりしてゐた、しかし感心なことには、教科書といふものを著したことがない、これと云ふのも、外山が眞の江戸ッ兒氣質の然らしむるところで、彼の四ツ目屋事件で名の出た某が、或時外山に序文を書いて貰はうと願つたところが、率直な彼は頑として、その願ひに應じなかつたさうである。

このやうに萬事にかけて面白い氣骨を有してゐた男だから、なか／＼切れツ放れが好く、幼時舊幕臣に就いて馬術を稽古したが、その師匠といふ人は克く彼が心を見抜き、後年彼が故態の依然たるのを見て、「徳川武士の原性を有して居るのは、彼より外には一人もない」と、大に彼を賞めたといふ。

幼名のいはれと彼の勉強

外山は嘉永元年九月二十七日をもつて、江戸小石川柳町の邸に産まれた、幼名を捨八といつたが、これには一ツの理由がある、それは外山の兄に當る二人の男の兒が共に夭死した、そこで、お祖父さんが心配して、三番目の男の兒の運勢をば、當時易占を以て高名だつた石龍子といふのに見てもらつた、その時石龍子は「この兒は八分通りは捨てたものと覺悟せよ」といふので、そこで捨八と命名したのであつたが、豫言全くはづれて、外山は丈夫に成人したのであつた。

彼幼にして穎悟、片言まじりに喋べる頃から、それはく却々小さかしい兒で、非常に學問を好み出し、他の子供等が風を飛ばして遊んでゐるのに、彼は常に家人に就いて書物を學んでゐた、されば親たちも忤の勉強好きなのを喜んで、出來得る限りの心を盡して教育に力めたところが教へれば教へるほど益々よく出來、その上大の勉強家で、暇さへあれば蛇度本を手にして居ないことはなかつた、従つて幼時から非常に上達し、七八歳の頃より嶄然として頭角を露はしてゐた。

十六歳にして開成所の教授

外山は父親に大學や論語の素讀を教はつてゐた頃から、一方に於ては武藝の練習にも精進した、當時彼の親戚間では腕白者の名が高かつた程いたづらツ子とて、武藝の上達も著るしく、水泳の術などは最も進歩が早かつた、萬延元年の某月、將軍家茂の武藝上覽のあつた時、外山は十三歳の幼年にして其技にあづかることが出來たほど、それほど彼の武藝も前途多望であつた、然しながら父の忠兵衛は、武辨の一本強漢にあらずして、宇内の形勢を達觀するとまでは行かないが、流石に學問の心掛も淺からぬ人であつたから、幾分か天下の事情を解得して居つたものと見えて、斷乎たる處置を子息捨八の身の上に行つた、即ち文久元年、當時十四歳の外山をして、斷然武藝の練習を抛ち、蕃書調所に入學せしめた。

これより先き、徳川幕府は時勢の必要に應じて、早く文化八年に翻譯局を設けたが、後に之を蕃書調所と改め、又洋書調所などと改めて、旗下士及び諸藩士に洋書を授ける所とした、外山の入學した頃は、其校舎は九段坂にあつたが、文久二年に一ツ橋外に移り、翌三年には開

成所と改めた、外山は此處で英學を修め、午後三時頃となつて學校が退けると、更に湯島天神下の箕作麟祥の塾に通つた、此塾の教授法は彼のクラス制度ではなく、塾生順番を以て英書の講讀を授けられるので、その順番を待つ間、多勢の塾生は獨樂を廻したり紙薦をあけたり或は撃劍などをやつて居た、この頃外山は又大岡芳之助と云ふ人を自宅へ招いて英學の復習をしてゐた、大岡は屢外山に向つて、君は早く僕を凌駕するやうになりたまへ、僕は又箕作先生を凌駕して見せる、と言つて外山を激勵した、さなきだに生來英學が好きであるかの如く見えるのに、この大岡の激勵は外山をして目ざましい上達をなさしめ、入學の習年即ち文久二年六月二十六日、句讀教授出役といふのを命ぜられ、同三年九月二十六日教授手傳並に出役を命ぜられた、是等は生徒中の優秀なる者を抜擢するので、今日の大學で言へば助手と助教授との中間ぐらゐの地位であつて、外山は生徒に英書の素讀を教へた、さうして間もなく其年内に開成所の教授方に進んで、茲に海外留學の命を受くるところの段階を造つた。

前にも言つた如く、外山の食祿は二百二十俵であつたが、旗下士で是れくらゐの祿ではとても餘裕ある生計をすることは出来ない、それに家族も頗る多く、先代は借財を遺して死んだ

などの事情から、父親の代となつては財政頗る不如意だつた、こんな有様だから外山が教授方となつて、銀十四枚の手當を受けても、之を家計にあて、自ら奉ずることは極めて薄かつたといふ。

年二十にして英國に留學

當時世の中の形勢は勤王と唱へ、佐幕と云ひ、攘夷と叫び開港と主張し、或は公武合體の必要を論ずるなど恰も鼎の沸くが如き有様であるが、然し海外の新知識を輸入することの必要は随分多くの方面に於て是認せられ、開成所の出來たのも畢竟これが爲だが、幕府では慶應二年八月八日、十四名の俊才を選抜して之を英國に留學せしめることとなり、外山は其一人として選ばれた、時に年正に弱冠

留學の内命を受けた人々は、歡喜措く能はざるものがあつたが、ひとり外山は大に心を痛める事情があつた、それは當時父親は歩兵指圖役として京都へ行つて不在であり、母親は病床に呻吟してゐた事として、洋行のことを打ち明けるわけにも行かず、さりとて此の好機を逸し去

るは千載の恨事である、彼は大に苦心した末、姉の錦子を説服して留守宅の事を引受けて貰ひ母には暫く横濱へ赴くと告げて出發した、一行は慶應二年十月二十五日午後三時、横濱解纜の英船ニポール號に乘組み、上海を経て香港に着し、エルロラ號に乘換へて蘇土に到れば、當時運河未だ成らずの有様に、此處から汽車でカイロ經由アレキサンドリアに出で、それより再び船に乗つて十二月二十八日サウサンプトンに安着し、即夜鐵道で倫敦に着いたのである。

維新政變の爲一行歸朝す

倫敦では頗る宏壯な一家を賃借して、一同此處に寓することとなり、先づ第一に某英國人を聘して英語の練習をやつた、外山は其後間もなく倫敦のユニバーシティー・コレージュ・スクールに入學することとなつたが、こゝに一つの難問題が一行中に起つた、と云ふのは、外國語を學ぶに當つて、かくの如く本邦人の多數が相共に住居して居るのは、甚だ不利益のことであるから、宜しく分離散宿すべきであるといふのだ、外山はその最も熱心なる主唱者であつたが、留學生の監督役たる川路實堂と中村正直とは、早速に此説を採用することの出来ない立場にあつ

て、議容易に纏らなかつた、そこで外山は林董などの散宿論者は、英國外務省へ建白に及ぶ一行の世話人なる英人は、之を以て當初の契約に違背するものとし、固く執つて分離説を承知しない、一方外山などは兩監督に迫り、或はひどく攻撃したので、兩監督は板挟みとなつて屁古垂れた、やがて兩監督は辛うじて世話人を説得し、散宿の結果として留學費用の頗る増加するにも拘らず、一旦分離を斷行して、一行は皆それ／＼然るべき英人の家族内に同居することとなつた、これは慶應三年の事である。

恰度その年、佛國巴里で大博覽會が開かれるので、幕府では徳川民部大輔照武を使節として佛國に遣はし、併せて各國を歴訪せしめる事となつた、英國に於ては女帝ビクトリヤ陛下下在英國留學生の、懇切に待遇せらるる事を謝するの使命をも帯びて居たので、一同は使節一行の注意もあつた事として、また合宿するやうになつた、然るに間もなく本國に於ては國勢一變して王政維新となり、一同の學資は送つてくれず、進退維れ谷まる場合となつたが民部大輔の一行中にも遊樂一子などもゐて、それ等の人々の周旋で、明治元年四月、留學生一同は倫敦の客舎を引拂ひ、巴里を経て馬耳塞から佛國の郵船に乗込み、同年六月下旬横濱へ歸航したので

あつたが、若し此時民政部大輔一行の助力がなかつたら、一同は荷爲替と同様な境遇で送還されるのであつたものを……。

一行の留學は斯の如く短年月で、且つ憫れな始末ではあつたが、一行が學問以外に觀光祭俗の利益を得たことは莫大なものであつた、かの明治年間の好著書の一たる西國立志編も、この留學より歸つた後の産物なることを思へば、以て他を類推することが出来るであらう。

辨務使と共に米國に赴任す

留學生の一行は、途すがら本國情態の變化を想像して居たが、さて上陸して見れば、萬事が瓦解の二文字に表はされる如き激變に、何れも驚き呆れた、幕府は倒れて徳川家達は駿遠二州に封ぜられるといふ有様、外山は間もなく一家を纏めて駿河に移住し、府中の草深といふ所に居を構へた、さうして静岡藩が新たに設けた静岡學問所の教授となり、洋學部長を兼ねてゐた此學問所は身分の高下に拘らず、志望の者に國學漢學洋學を授くる所で、當時外山が學問所に於ける教授の巧なことと、その熱心と親切とは、生徒一同の感服したところで、而も彼自身非

常に勉強家であり、夜も碌々臥床に就かず、睡くなれば其儘机にもたれて眠り、目が覺めたら直ぐ書物を読むといふわけ、生徒も之れに感化されて何れも熱心に勉強したといふ。

静岡に居ること二年餘、明治三年十月二十五日、外務省の辨務少記に任ぜられて、辨務使森有體と共に華盛頓に赴任することとなつた、これは森が外山の人物を識つて拔擢したのであるさうして翌年八月外務權大録に昇つた、若し此儘にして進んだならば、外交官として榮進したであらうし、又一般の政治家としても顯著な發展をしたであらうに、外山は學問の根柢未だ固からず、素養尙淺きに、漫りに官吏となつて甘んじてゐる譯には行かないと、森にも其意中を打明け、森も之を諒として、明治五年二月依願免官、學生の身分に復歸したのである。

ミシガン大學の選科生となる

官を辭して一留學生となつた外山は、種々考案の末、ミシガン州なるアンナバー高等學校へ入學した、これは彼が辨務少記として米國に來た時、二人の留學生を伴つて來て、自分の俸給の幾分を割いて扶助してゐたので、今度自分が學生の身分となつたに就いては、華盛頓や紐育

よりは生活費の低廉な所を選んだわけである、この學校で約一年半の間、専ら普通學を修め、ついで六年の九月になつてミシガン大學に入り、三年間こゝに學籍を置いた、これがミシガン大學に入學した日本人の最初である、彼は在學日尚ほ淺きに拘らず、その明敏なることゝ、その勤勉なることゝは、直に衆人の注意を喚起し、親友も出來、教師も之を愛し、彼は選科生として己が好める科目を選択し、その講義を聞いたのみであるのに、後日この大學よりマスター・オブ・アーツの名譽學位を贈つたのである。

二十九て大學の教授

ミシガン大學の化學科を卒業して、明治九年五月無事歸朝した外山は、當時の東京開成學校々々長補濱尾新の切なる勧誘を入れて、五等教授の任をうけ、十月等四教授に進んで、外國人教授の中にまじつて、唯二人の日本人教授が敏腕を揮うたのである、時に年二十九、翌十年七月舊曆臣河村歸元の女房子と結婚の式を舉げた。

爾來外山は大學教授の任に在ること二十餘年、明治二十年學位令の發布さるゝや文學博士の

學位を受け、明治三十年十一月帝國大學總長となつたが、これより先き、明治二十三年始めて帝國議會の開かるゝに當つて、貴族院議員に勅選された、ところが明治三十一年四月、伊藤内閣の文部大臣たる公爵西園寺公望が、病を以て官を去るに當り、外山は伊藤首相に薦められてその内閣の文部大臣となつた、さうして世人は學政に對する彼が抱負の實現を期待してゐたのに政變の結果僅に二ヶ月にして、彼は大臣の椅子を去つたのである。

子爵 兒玉源太郎

清廉にして道義心の強い武士を父とし、正義の爲に身を殺したる義兄を有し、其血を享け其行動に感化されて、家名斷絶の爲に貧困のどん底に沈みながら、凡ゆる艱難に耐へて天の成せる美性を磨き、十六歳にして征長軍と戦ひ、討幕軍の半隊司令士となり、佐賀の亂に奮戦する等、少壯にして戦功著るしく、官位累進して二十三歳の時大尉となり、三十二歳にして大佐に任ぜられ、明治二十七年陸軍入將に陞進した、之より先き、臺灣總督に任ぜられ、陸軍大臣を兼攝し、三十六年内務大臣となり、又文部大臣となつて三面六臂の働きをやつた。

因に記す、現時の兒玉家は伯爵であるが、こゝは明治四十年十月源太郎の功に依つて當主秀雄に對し陸爵されたもので、源太郎は子爵を以て終つたのである。

父は反對派に陥れらる

兒玉は嘉永五年閏二月周防の徳山城下に生れた、幼名を百合若といふ、父の半九郎は、當時藩の評定役を承はつてゐた、小藩ながらも評定役といへば、一藩の政治にたづさはる重い役目であるから、勢ひに走る人々が、襟元に附く淺ましい了間で、兒玉家へ出入する者が多く半九郎は藩の利権者として羨望の的となつてゐた、然し彼は役柄が捧げる権力を借りて、自己の黨派を作つたり、私利を營んだりするには、餘りに潔白清淨な男であつた、清廉にして道義心の強い、一徹な武士氣質で、惡を憎む事の甚だしい性質であるから、従つて偏狹な嫌ひがある、政治家としては寧ろ不向きであつたかも知れない。

當時は尊王攘夷論の喧ましい時で、徳山藩でも佐幕黨の閉國論者と、勤王黨の鎖國論者とは別れて、互に睨み合つてゐたが、半九郎は尊王の發頭人であつたから、反對派の重役富山源二郎といふ男には眼の上の瘤のやうに思はれてゐた、而して半九郎は此頃興讓館の目附となつて學校方を勤め、政治向には遠い勤めではあるが、と云つて國家の大事を外に見る事は出来な

い、藩の執政が因循姑息に流れ、只一時の安きを偷まうとして、大義名分を考へないのは奇怪千萬であると思ふので、當路者に上表して、自分の意見を開陳したのであるが、何の反響もないところから、二度も三度も重ねて同じ意見を上申した結果、終に評定所から呼出しを受けた、この呼出しには富山源二郎の毒計が畫かれてゐた、即ち半九郎を呼出して意見書の事を糺せば、必ず慷慨悲憤の氣を洩らすに相違ないから、其時狂人と申做して親類に預ける、さすれば彼奴必ず自殺致すであらう、といふ考へであつた、半九郎に於ては、今日の召喚は吉か凶かは知らねど、所詮は五尺の男子義に死するの秋なりと、殊勝に思ひ定めたので、心の中に妻子に別れを惜んで我家を出た。

父の悶死と義兄の入婿

評定所に呼び出された半九郎は、其日の夕方悄然として歸つて來た、見れば眼血走り色蒼ざめて、興奮其極に達した有様は、彼が評定所に於ける舉措を窺ひ知られる、さうして遠縁の親類が二人まで半九郎に附添うて來て居るのである。

「御新造、内密ぢやが、半九郎殿は些と逆上の氣味でござる、既に上役所で無法な暴論を致されたが、逆上と見て寛大な御處置を以て、拙者共へ御預け下されたのぢや、一切閉門同様外へ出すことは罷りならぬ、ならば座敷牢に入れ置くやうにと、重役方の御申附でござるから、萬一違背致さるゝに於ては、親類までも難儀でござる、能く御承知置かれい」と、附添ひの縁者は、恐ろしい猛獸を首尾よく護送したかのやうに、ほつと息をついた。

斯くて半九郎は座敷牢同然の室のうちに、世を怒り時を慨して、腸も千切れ肉も瘦せるやうに悶えたが、終に重き病を惹き起して、二ヶ月ばかりすると、残念ぢやとの一語を此世の名残に、四十六歳を一期として悶死してしまつた、時に百合若は僅に五歳、元服前の幼年者には藩の掟として家督相續を許さぬので、半九郎が生前親しかつた人々の世話で、淺見巖之丞といふ十五歳の少年を、百合若の姉お久の婿として迎へたが、喪中のことゝて唯約束といふ事に止めて、翌々年目出たく婚禮の式を挙げた、此時百合若は早や七歳、世の常の子供とは違つて惻愍な質であるから、四書の素讀を父が莫逆の友なる島田蕃根の所へ習ひに行つてゐた。

正義派の義兄暗殺さる

巖之丞は齡に似合はず分別のある青年で、學問といひ武藝と云ひ、同藩中肩を並べる者すらないと言はれた、そして身の丈は拔群で、凛々しい顔立であるから、外見には二十三四とも見える程であつた、彼は藩公から御前衛に選抜されて京都へ出張したが、やがて周旋方として國事に奔走することとなり、巖之丞の名は俄に脱藩の浪土の間に聞えて來た、さうして浪土と主義者の彼は、長州藩の國老長井雅樂の暗殺を一身に引受けた、然しそれを決行する暇もなく長井は國許に塾居を命ぜられたが、巖之丞は半九郎の遺志を繼いで、正義の爲には身を殺して悔なき者であつた、それから間もなく徳山に歸り、藩の大目附を承はつたのが二十一歳の春であつた。

時の執政は、先に養父を憤死せしめた富山源二郎で、頑固なる佐幕主義者であるから、巖之丞の言ふ事は一つとして取上げられない、無念骨髄に徹してゐる矢先、正義派中の急進黨、河合佳造と計つて富山を暗殺しようとの謀を立てた、然るに是れが決行に臨んで、可惜千俵の

功を一簣に缺き、彼は終に俗論黨の縦つた刺客の爲に暗殺された。

アワヤ群童を斬らんとす

御馬廻として百石の扶持を賜はつた家柄は、僅に一人半扶持の合力を下さるべく、上の恩恵なるものが巖之丞の遺子文太郎といふ、當歳の赤ン坊に下つた、サアそれからといふものは兒玉家の窮乏其極に達して、明けて十三の百合若は、名前を健と改めて、形ばかりの元服をしたが、身に纏ふものは襤褸にも等しい破れ衣、母や姉の賃仕事の手助けに、營養不良の文太郎を抱いて、毎日外へ遊びに行く。

正月の或日、健は不器用に文太郎を抱いた儘、鎮守の社の方へ行つた、其處には獨樂を廻し、紙鳶を上げたりして、見知りごしの家中の子供が大勢騒いで居る。

「オイ、兒玉の金柑が来たぞ、見てやれ、浪人になつた態を」と、腕白の年嵩なのが唇を反らして顎で指した。

「あゝ來をつたゝ、お正月だといふに襤褸を着てゐるぞ」

と又一人の子供が相槌を打つ、健の耳には恰も百雷の轟くが如く、其言葉が腹の底まで響いた、ハツと思ふと、悲しいやうな、口惜しいやうな、何とも名状し難い感じが胸を塞いで、棒のやうに立ちすくんだ、そして鋭い目でジツと睨みつけると、腕白共はドヤ／＼と側近く押寄せて來て、

「怒つたく、乞食が怒つたつてお粥腹ぢや向つて來られまい」

と、身體を突き附けるやうにして、臂を張つてゐる、健は急に母や姉が戀しくなつて、早く歸りたいと思ふたが、負けきらひな氣象は、今となつて後を見せるのは猶更口惜しい。

「ヤア此奴は袴を穿いてゐないぞ、袴賣つちやつたかい」

と、ワイ／＼と集まつて來て、哀れな健の落ちぶれた姿を嘲笑ふのである、健は「蒼蠅ツ」と、たまりかねて叫ぶやうに言つた。

「浪人の乞食が怒つた、遣つ附けちまへ」と、ツと後へ飛んで行つたが、土塊を捨てて投げつける、無残や肩先にバツと當つて、爆彈の如くに散つたのが、抱へてゐる文太郎の顔へバラ／＼と振りかゝつて、火のつくやうに泣き出した、彼等は子供ながらも勢ひについて、みじ

めな健の姿を見て、面白半分おもしろはんぶんに弱い者よわいものいぢめをやるのである。

「何をするツ」と、健は目眦めしほも裂さげんばかりに怒こつて、アワヤ腰こしの小刀やちうに手をかけんかとまで激昂げききやうしたが、片手かたてにいたいけな甥なまが泣なき叫さけぶので、口惜くわくしさを噛かみ殺ころして、怨うらめしさうに睨にらまへた。

「何を怒おこるんだ、貴様きさまは宿無やどなしだぞ……口惜くわくしけりやア向むかつて来こい」と、一人ひとりは意地悪いぢわる氣けに健の頬ほを突ついた、健は口惜くわくしさに涙なみだが眼めの底そこまで湧わいて来こるけれども、負けまけきらひの氣象きしやうは、眼めをいからし眉まゆをあけて、固かたくそれを堪こらへてゐた。

「ヤイ、貴様等の來きる所ところぢやない、歸かへれツ」

と、二三人にさんドヤ／＼と後うしろから健を突つき飛とばした、健は赫あざとなつて再び小刀やちうに手を掛かけんとしたが、抱かいてゐた文太郎ぶんたろうが又泣なき出したので、思おもはず氣勢きせいを挫くじかれて、兩手りうてに抱かへ上げ「覺おぼえて居ゐろツ」との捨白すてびやくを残のこして、鎮守ちんじゆの杜もりを斜まがに横よこぎりつゝ、トボ／＼と歩あるき始はじめた。

「ワアイ、乞食こじきい」と、ドツと笑わらふ聲こゑが騒さわがしい、健は口惜くわくしさの餘あまりに振返ふりかへつたが、途端とたんに流星りうせいの如ごとくに飛とび來きつた礫ついでが、横聲よこびんに當あたつたので、アツと押おへる手にダラ／＼と血ちが流ながれた

言いはうやうなき此侮辱このどじやくと狼藉らうじやくとは、完膚くわんぷなきまでに健の心身こんしんを傷きつた、小さい心こゝろにも武士ぶしの面目めんぼくが立たたないと思おもつた、自分の面目めんぼくは兎も角かくとして、父ちちや兄あにの名なを辱はかしめ、兒玉こぎよの家に拭ぬぐふべからざる疵きずを負おはせたのである、最早もはや堪忍かんじんはできないと、健の心こゝろは烈火れつゑの如ごとくに燃もえて彼は眠ねりより覺おめたる猛虎もうこの如ごとく、まつしぐらに駈かけ出だしたのである、即すなち文太郎ぶんたろうを我家わがやに送り込こんで、取とつて返かへして怨うらみ重かさなる彼奴等あやつらを鑿殺あなころしにする決心けつしんである。

懇に諭す番根先生の情

血ち走る眼めに青あおい顔かほ、再び鎮守ちんじゆの杜もりへ急いそぐ行手ゆくてを遮さへつて、「待まちちなさい」と聲こゑをかけたのは、思おもひもかけぬ番根先生ばんこんせんせい、何處どこへ行きなると、仁王立にわうだちに立ちたちはだかられて、健は袖そでの下したをすりぬけるわけにも行いかず、下したを向むかいて思おもはず零こぼす悲憤ひげんの涙なみだ。

「オウ、能よく忍耐にがたしたの」

と、番根先生ばんこんせんせいは今の様子ようすを知しつてゐたのであつた、さうして、彼等かれらを人間にんげんと思おもへばこそ腹はらが立たつのだ、彼等かれらは犬畜生いぬちくしやうぢや、畜生ちくしやうを相手あひてにすれば人間にんげんの耻はぢではあるまいか、それよりも斯かう

いふ無念な事を能く心に刻んで、今に立派な人間になつて、彼等の顔を見返してやれ、それが何よりも立派な復讐だぞと、懇に諭しつゝ先に立つて歩き始めた、健も機先を折られたのと先生の訓戒とに少し心が落附いたので、後に下つて隨つて来る。

すると蕃根先生は歩きながら、昔、奥州松島の瑞巖寺の和尚が、まだ俗人の時に伊達政宗に耻を與へられて、何とかして政宗の顔を見返したいと思つた一念から、入唐して難行苦行を重ね、天晴の名智識となつて歸朝し、勅願寺たる瑞巖寺の大禪師となつて、政宗の顔を見返したといふ話を、子供にわかるやうに面白く説いて聞かせた後、

「それだから、おまへも今日の事に發憤して、志を挫かずに立派な人間になりなさい、さうしたら彼等はおまへの足下へも追附くのではないで」

と、巧に健を諭して、危い血の雨を未然に防いだ、賢い健は先生の訓戒に感じて、悲憤の怨みを他日に晴らさうと、深く深く心の底に彫り付けた、さうして艱難汝を玉にすと先生から聞いた事を、獨り心に繰返して、今日の貧困も侮辱も、天が自分を試すのであつて、成功に導く光であると悟つて、健少年の心は忽ち豁然として開通したのであつた。

兒玉の家に瑞雲棚引く

我が肉を削いで食べるやうな貧窮のドン底、落ちぶれ果てた兒玉家は、世間からもう忘れられて了つた、初めのうちは氣の毒とも哀れとも同情を寄せる者はあつたが、次第に人々の念頭から薄らいで、今は兒玉家の慰藉たるものは何んにもない、此間にあつて健の克己心は遺憾なく養成せられ、薪を取つたり、荷を背負つたりして、飢餓と戦ひつゝも、今に見よといふ奮發心は、彼の血管に脈々として流れてゐた。

かゝる間に世の中は急轉直下の勢ひで、破天荒の變轉を呈し、正義派は俄に勃興して、かの富山源二郎は執政を免ぜられ、蕃根先生は擧げられて評定役となるなど、正義派の勢力は旭日昇天の有様、兒玉の家族は若しも父や兄が此世に生きて居たならばの愚痴も出たが、健は急に肩身が廣くなつたやうな心地して、襤褸の衣物にも光が差すかと心強い。

恰も慶應元年のお盆の日であつた、突然評定役詰所からの召喚が來たので、一家は何事かと目を見合せた、然し時節板悪い沙汰ではあるまいが、偕て困つたのは健に着せる衣物がない、

襪きはぎした洗ひ晒しの浴衣一枚で、詰所へ出頭するのは兒玉家の耻辱であると、利かぬ氣の母の元女は、口が腐つても人から物を借るといふ事を言ひ出す女ではないが、此時ばかりは何と工夫する間が無いので、是非なく親類に頼んで一着借受け、附添ひの人と共に健を出頭させた、すると粟屋といふ執政から

「兒玉健、是迄其方家名斷絶仰せ附けられて居つたが、此度上格別の思召を以て、其方をして家督相續仰せ附けられ、新知二十五石中小姓に御取立になる、有難く心得るやう」との申渡し、夢ではないかと餘りの意外に自分の耳を疑つた、健はもう浪人の乞食ではない立派な徳山藩士である、他日の大成が目の前にあるやうに思はれて、急に身體が大きくなつた如くに覺えた。

初陣に於ける彼の膽力

健が新知御召出しになつた時は、毛利一家の宗友藩は朝敵の汚名をば蒙つて、幕府が征長の師を向けようとする時であつたが、一藩の士氣は烈々として火と燃え水と激してゐた、一時の

苟安を願ふ因循な俗論黨は影を潜めて、主戦論が雲の如くに湧き上つた、健は名を源太郎と改めて、當時十六歳の美少年が一方を承つて戦陣に臨んだ。

幕府の兵は多くとも所謂烏合の衆に等しい、長州軍は寡くとも何れも決死の士である、戦はずして勝敗の數は自ら明らかだ、果然諸手の戦は幕軍連戦連敗、士氣衰へて闘志なく、遂に征長の軍は全く立竦みの態となつて、進みも退もならぬ、羽目に陥つた、源太郎の初陣は、一藩の興廢を賭した此戦争であつたから、彼は死生の巷に人間の一大事を諦め、何事に出會つても、物に動じることがなかつた、而して其機智頓才に富める事と、勇武に優れたる事とが漸く人に知られて來て、流石に半九郎の子で、巖之丞の弟であると譽めそやされた。

母が勇ましい贈の言葉

幕末の世は朝に夕を計られず、昨日の朝敵は今日の官軍となつて、幕府は俄に賊と目指され長藩は官軍の大立者となつて、幕府征討の錦旗を守護し、東北の地に出征することとなり、源太郎は半隊司令士を拜命して出征を命ぜられた、出立に臨んで母の元女は、

「汝、戦に出たら、後の事を思はずに、目覺しい働きをして、立派に死んでおいでなさい、阿父様や阿兄様の名前を汚してはなりません、阿父様があのやうにお死にやつたも、阿兄様が不慮の死にやうをしたも、皆徳川方の爲ですぞ、それを思ふたら、一步も退く事は出来ませんぞ」

女らしい温い言葉はないが、心の底には温い言葉より以上に、熱い火が炎々と燃えてゐるのである、口にくそ雄々しく言ふけれども、勝は寸断せられるやうに悲しい、母の凛々しい言葉を聞いた源太郎は、出陣の事を聞かして若しや母に心配をかけはしまいかと思つたのに、案に相違の此有様にホツとして、勇みに勇んで征途に上り、九月二十二日徳山を出立して二十四日三田尻から乗船、秋田の土崎へと向つた。

五稜廓の戦に彼の機智

船脚の鈍い外車の火輪船に送られて、出羽の土崎に上陸したのは明治元年十月十一日であつた、ところが會津庄内は既に降服したので、殘賊の函館に據れる者を追討すべく、十一月一日

土崎から青森へと行進した、半隊司令士の源太郎は、威風四邊を拂つて、肩で風切る心地がした、此勇ましい有様を一目故國の母に見せたい、そして鎮守の杜の悪少年にも見せて、目を驚かしてやりたいと、若い花やかな血は、駿馬の朝風に勇むが如くに振ひ立つた。

北國の雪は深くして軍を進むるに由なく、空しく海を隔て、函館の空を望んでゐた官軍は、翌る二年の春になつて、海陸相應じて蝦夷地に攻め寄せたが、敵は名に負ふ榎本釜次郎、一艘の艦を七艘に使ふとさへ言はるゝ海軍の名將、況して荒井郁之助は、五尺の隙があれば艦を乗入れるといふ航運の達人、陸には大鳥圭介の神謀鬼策、楠正成にも喻ふべき名將である、此海陸の傑物が、決死の猛卒を率ゐて戦ふのだから、容易に攻め破ることは出来ないのだ、源太郎司令士は部下を引率して江刺港に上陸し、各所に轉戦して五稜廓の大川口に迫つたのは五月の二日であつた。

幕軍の勢は日にくちどまつて、悪戦苦闘は夜を日に繼ぎ、血河尻丘の慘憺たる光景を現出したが、源太郎は幸ひに薄傷一つ負はない、されど國を立つ時に引連れた部下は、漸く減つていつて、今では顔を知らない者ばかり多くなつた、今日は人の身、明日は我身の上と、征人の

心は裏淋しい、味方はと見れば連日の戦ひに疲れ切つて、其處此處に固つた儘、死人の如くに眠りこけてゐる、萬一の爲にと四方へ張つた哨兵も、立ちながらに眠つたと見えて、見廻りの足音すら響いて來ない。

半隊司令士は自分の持場に就いた儘眠つては居たけれども、思はず夢に驚かされてハツと目を覺ました、若しや夜襲といふ觀念が、虫が知らずかの如く源太郎の頭にピンと來た、然し隊長から就眠を命令されたのであるから、部下の兵を起すことは出來ない、自分だけソツと起き上つて、闇路を透しながら四方に氣を配つた、俄然闇を劈く小銃の音がして、途端に哨兵が叫ぶ裂帛の聲、果して敵の夜襲である、源太郎が部下を叱咤すると、徳山敵部隊の猛者は空を蹴つて飛起きたが、時既に遅し、死者狂ひの敵兵は山も崩れんばかりの喊聲を上げて殺倒した。

味方は寝てみを襲はれたのであるから、流石に慌てふために唯刀を抜いて振りまはした、闇さは闇し、不意の事とて敵か味方か分らない、刀の觸れるところ自他の區別も無く研りまくる、バタ／＼と悲鳴を上げつゝ仕れるのは、大方味方の同志討である、さしも驍勇の敵部隊も全く度を超つて、天地も一時に覆へらんばかりの騒ぎとなつた。

「燈火を點けい、燈火を點けい」
突然百雷の轟くが如き聲が、其處此處と馳せ廻りつゝ響く「兒玉が居るぞ、確かりせい」と又叫んだ、咄嗟の間にも機智に富んだ言葉に、隊中其處此處に火をともしたので、やつと敵味方が解つた。

「敵は小勢だ、折敷いて射撃せい、立つな立つな、立つ者は敵だぞ」
源太郎は又叫んだ、敵味方の區別は夜目にも判然と知れたのである。

敵は實に五稜廓の勇卒三百人、死を此一戦に期して、官軍の崩れに乘じよつたので、味方の苦戦は名狀し難いものがあつたが、漸くにして撃退してしまつた、此時若し源太郎の機智なかりせば、此手を敵に奪はれて、不測の災を招いたかも知れなかつたのに、幸に辛くも防禦の功を奏したのは、源太郎司令士の手柄であると、隊長から厚く賞詞を受けると共に、徳山藩に此有爲の青年士官がある事を、長藩の重なる人々に認めらるゝに至つた。

何様窮鼠猫を嚙む的の死者狂ひの幕兵に、隊長として一代の軍略家大島圭介あり、官軍の將校は曾て大島に戦術を學んだ者が多いから、言はず子弟の戦術くらべだ、互に名を惜み、耻を

知つて闘ふのだから、肉を弾とし、骨を楯とし、稀代の悪戦に一步も退かじとするので、兩軍の死傷實に算なく、悲絶壯絶の有様であつたが、敵は遂に兵器彈藥に窮して、降を軍門に容れ源太郎は赫々たる武勳を奏する機会に接せず、六月一日品川に凱旋した。

脱隊兵鎮撫の爲め召還

維新の戦亂も是れにて平定し、諸隊は凡て國許へ引揚を命ぜられたが、そのうち有望の俊才を選抜して、佛式訓練を練習させる事となつたので、長州藩からは七十人の青年軍人を選抜した、源太郎は徳山献功隊の司令士として、第一に編入せられ、宗藩の家臣寺内正毅と共に徴士となつて佛式練習所に入つた、ところが長州では奇兵隊を始め遊撃、御楯、山崎などの諸隊が論功行賞に不満足を起して、一時に脱隊し藩廳へ迫つたと言ふことで、これが鎮撫の爲め召還の使者が來た、兒玉は之を聞くと、

「馬鹿な奴等ぢや、不公平の事もあつたらうが、吾々共は賞典が欲しくて戦をしたのぢやない、お上の爲に戦つたのぢや、王政復古になれば、それが立派な賞與ぢや」

と、唾棄するやうに言つた、さうして居ながらにして脱隊連の爲すなきを見極めたので、國へ召し還される事が、寧ろ久しぶりの慰勞休暇のやうな氣がして、喜んで出發した、そして下關へ着くと直に部署をして、長府山口の圍を破り、一舉に聯絡を取らうとした、其計畫は兒玉の主張であつたが、案の如く脱隊兵は、唯勢ひに乗じて騒ぎ立つばかり、誰を主腦として指揮を率ずるといふのでないから、忽ち新進の青年將士の爲に破られて、瞬く間に山口の圍は解けて了つた。

何の赤兒の腕を捻るより容易い脱隊兵の鎮撫に、わざ／＼大阪から佛式練習生を呼び戻す程の事はないのにと、兒玉は暖簾に腰押の心地がしたが、脱隊兵のお蔭で、久しぶりで徳山の家を見舞ふ暇が出來たので、急いで故郷へと馬を飛ばした。

空前絶後の異數な陸進

男優りの母親の徹な氣象は、依然として變らない、さうして、

「今度脱隊騒動について歸つて來て、首尾よく鎮撫してしまつたのは結構ですが、少しの休

暇に、私の事を案じて歸るやうでは、御上の御用は勤まりますまい、練習所が目出たく済むまでは、もう決して母も姉もあると思つてはなりませんぞ、練習所が済んでから、目出たく會ひませう」

と言つた、兒玉は母の情に激動されて、一夜を我家に明した翌朝、直に本隊へ引返して三田尻より船で大阪へ戻ると、又元の練習所へ入つたが、明治三年六月卒業すると、直ぐに大隊第六等下士官に任ぜられ、半年を経て権曹長となり、翌四年の四月十五日には、忽ち准少尉に陞せられ、八月六日少尉に進んだかと思ふと、翌月二十一日には又中尉に任ぜられた、全速力で陞進する有様は、まるで天馬空をかけるの概があつた、勿論當時は整然たる秩序がなく、甚だしき過渡時代ではあつたが、此異數の陞進には、同僚が目をもそばだて、呆れてゐた、誂へた官等服が仕立てあがらぬうちに、それより上の官等に進むなどは、實に空前絶後の事に屬する、而して明治五年七月二十五日には、更に歩兵大尉に任ぜられ、大阪鎮臺副官心得を命ぜられた。

公爵桂太郎

軍略家にして政治家を兼ねた大江廣元の血を受け、三十六歳の武藝に通じ先見の明に富んだ父君に教養されて、十七歳にして藩の中隊長となり、二十歳にして藩主より重大なる使命を受け大西郷と會見するなど、彼が非凡の人たるは夙に認められた、宜なる哉、彼は後日軍人としては陸軍大將の最高位に上り、政治家として總理大臣の椅子を占め、公爵を授けられ、大勳位に叙せらるゝの光榮に浴した、彼第三師團長から一躍陸軍大臣となり、トシ／＼柏子に其地位を得たことの敏速なるに於て彼の如きは稀有である。

門閥高き桂家の系圖

桂家の祖先は、平城天皇の皇子四品彈正 尹阿保親王の子である參議從三位大江朝臣音人から出てゐる、音人より八世にして彼の源義家に兵法を教へた大江匡房がある、匡房の孫に軍略家にして政治家を兼ねた廣元あり、廣元の曾孫親衡に三子あつて、長子の元春が今の公爵毛利家の祖で、第二子匡時の孫廣澄は安藝國桂の地に住したので、姓を桂と改めた、これが公爵

桂家の祖先である、同じ樹の實から生えながら、毛利家は空を凌いで亭々たる大木となり、桂家は小さき雑木に過ぎなかつたのは、恐らく廣澄の子元澄が始めて出で、仕ふる時に、遠祖の名を頼んだのかも知れない、若し明々白々に申出でたなら、假令家門連枝として遇されぬまでも、小身として見捨て、は置かなかつたらうと思はれる。

元澄には七男一女があり、嫡子元延は桂家正統の祖となり、五男廣繁は分家して更に傍系の桂家を創立したので、此分家の桂家が明治の末年に及んで、公爵大勳位たる赫々の光榮に浴し得たのである。

此傍系桂廣繁より七世にして繁世と云ひ、全くの平侍で、大組の士班に列し、食祿僅に百二十五石、近き親類であるべき毛利公とは、主従となつて容易く君の面をも拜することが出来ない、兄弟であつた祖先は、子孫に至つてこんな月黧の差を生じた、殊に藩の規定として百五十石以上の家柄でなければ、初任から物頭使番などの、表役に任ぜられる事は出来ないで、全く一下士に過ぎなかつたのである、さうして通稱與一右衛門の繁世には、代を譲るべき嗣子がなかつたので、同僚にして親友たる石部甚右衛門の次男を申受けて養嗣子とした、これ

が桂太郎の父與一右衛門繁忠である。

父親の性格と兒童教育法

桂は弘化四年十一月を以て長門國萩の城下に生れた、由來末年の人は氣の弱い小膽な性格だといふ、三世相傳の傳説があるけれども、未の九年で、桂の如き人を得たのは蓋し破格であるかも知れない。

父の繁忠が家名を相續して始めて出仕した時は、祿筆なる裏役であつたが、いくばくもなく檢使となり、更に大檢使に昇進して長く其職にあつたので、勤仕中江戸の藩邸と本國との間を往返した事、實に二十五回の多きに及んだのを常に誇りとしてゐた、さうして老年に及んでは世子元徳の御用所を奉仕してゐた、御用所は今の所謂庶務課の如きもので、用度出納の簿冊を掌り、支途を圖るの役で、戦士をして、後廳の憂なからしむる謀に長じてゐた、彼は忍耐持久の性に富み、泰山前に落ちかゝるとも、従容自若として動ぜず、従つて寡言で、躬行を以て範を示す傾きがあつた、さうして萬事が整理だつて、凡てキチンとした事が好きであつた、而も

家庭に於ける彼は、少しも怒り罵ることなどはなく、極めてやさしい好々爺であつた。繁忠は子弟の教育にも非常に心をを用ひたらしい、當時は唯因襲的に子弟を教訓し來つたので特に教育法といふものゝなかつた時に、自家一流の教育法を立て、如何なる過ちに對しても決して罵り怒る事なく、兒童等をして自ら悔い改むるやうにしたのは、當時の時流と異つた新しい薰陶法で、且つ極めて有効なるものであつた、つまり兒童をして反撥心を起させない方針を執つたのである。

小さな頭腦へ深き印象

繁忠は、自分が小身小祿で、それで一生を終ることを如何にも残念に思つてゐた、さりとして他人を掻き退けても出世しようといふ了簡は無い、温厚なる性質としては、他人を壓迫しても己れの志を遂げようといふ無遠慮な事は出来ないで、せめて我子のみは自分よりも立身させたい、蒸が鷹を生んだと世間から言はせたい程、子供に對して深く温い、愛情を以て教養してゐた。

「太郎や、乃父は碌々たる小身で一生を終るけれども、其方は乃父の物領に生れたことではあるし、桂家の後嗣ぎであるから、乃父は力の限り其方を教養するに依つて、たとへ身分違ひの出世をせずとも、せめては御使番ぐらになつてくれ」と、最愛の一子を勵ましたが、然し不世出の立身をするやうな事は夢想だもしなかつた、僅に上士たる御使番を贏ち得れば、家門の光榮之に過ぎずと思つたのである、勿論當年の秩序的階級を重んずる世の中にあつては、非常の拔擢を蒙るといふことは、百萬人中一人あるか無しで、それも十年に一度あるか無いか解らない、のみならず異常の出世は其身を危くする基かか如く考へられてゐた時代だから、父親が御使番を以て希望の満足なるものとしたのは無理もない、さうして、父親の此教訓は麒麟兒の小さな頭腦へ、深い印象を刻みつけたのである、今こそこんな小身者で居るけれども、今に見るといふ發奮心が、絶えず桂の血を湧かしたのであつた

悪太郎時代と私塾入門

桂が生れたのは、秋の平安胡といふ所であるが、三歳の時に居を郊外の川島村に移したので、

其悪太郎時代には、寂しい野原や、いさゝ小川で、蟬を追つたり目斑魚を驚かしつゝ成長したのであつた、一體川島村といふのは、晝間でさへ狐狸の出没する程の寒村で、侍の家としては僅に四五軒あるばかり、それも處々に離れてゐるから、隣といつても一町餘りもある。

桂の少年時代は、敝衣に附紐ばかり、帯も占めずに駈け廻つて、蜻蛉を捕つたり蟹を捜しなどして終日外へ出てゐるので、顔も身體も澁紙のやうになり、人間の子とは思へぬまでに黴んだ、しかし日光浴のお蔭で身體は日に増し健かになつて、唯の一度も病氣に罹つたことがない、従つて同年輩の子供に比べると、柄から體力まで儘かに一段立優つてゐたのであつた。

しかし悪太郎時代を捨てねばならぬ年齢が来た、彼は早くも七歳の聲を聞えたので、最早竹馬や騎竿を持つことは許されない、これより士人として心得べき事を學ばねばならぬので、彼は藩の儒者藤田與次右衛門の塾に入るべく、父に連れられて始めて東修を納めたのである、さうして入門の始めに教授を受けたのは四書の素讀であつた、塵劫記や都路ぐらゐるは家庭に於て父母から教へられてゐたので、言はゞ緒道が明いてゐたから、多少は樂であつたらしい。

藤田與次右衛門の感化

此藤田與次右衛門といふ人は、儒者には違ひないが、徒らに字句の末にのみ拘泥してゐる腐儒ではなかつた、當時の漢學の講義振は、字句の末節にのみ力を入れて、引事澤山を引證該博などと稱して尊んだもので、それが爲僅に一行を講じ了るのに一日丸潰れで、然も其揚句に何を講義したのだから、少しも要領を得ない、枝葉にのみ走つて根本を逸してしまふのが凡ての例で、それを誰一人怪む者がなかつたやうな有様、斯くて凡てが死學問になるのであつた、然るに藤田塾の教授振は、他と全然其遺方を異にし、巖然として一頭地を抜いてゐた、即ち一應要領を講じて、全體の意義を腹へ入れてから、然る後始めて字句に及ぼすといふ風で、自然濟民益世の術、所謂行政學をも引例にして、なるべく實際に觸れるやうにした、即ち儒道を活用した人であつたから、藤田塾は非常に賑ひ、餘程の變り者でない限りは、皆藤田の門生となる風であつた。

塾主たる與次右衛門先生は、講ずるところが斯の如く開發融通的なるに拘らず、諸生を率ゐる

ることは極めて嚴格、凡て身を以て範を垂れるといふ方針であつたから、あばれ者の桂太郎は頗る窮屈を感じたに違ひない、されどそれが嫌で家へ逃げて歸れば、父母が決して置いてくれないから、已むを得ず此塾に居るうちに、次第々々に塾風に感化されて終には幼時の氣隨氣儘を矯正されたのである、言はず不良少年が感化院へ收容されて、其行が改善されたといふ形である。

此の如くして藤田塾に學ぶこと七ヶ年、十三歳になつて諸禮と合せて弓馬槍劍の立役業を教へられたのである、桂の父親は聞ゆる槍術の達人で、槍を構へて氣合をかければ、軒端の雀も飛び立ち得ないとまでも言ひはやされた程であるが、桂は槍術よりも寧ろ劍法を好み、且つ得意として學んだ。

此の母にして此の子あり

或時桂が藤田の學塾から家へ歸らうとして、パツタリ出會つたのは、日頃親の威光を鼻にかけて、肩で風切る重役の倅であつた、折柄雨あがりの泥濘道、左右に水たまりがあつて、中央

に七寸ばかり狭い道が出来てゐる、桂は今や道の半まで歩いて來ると、重役の倅が向ふから遣つて來て、あはやといふ間に、突き當らんばかりに接近した、元より一寸も避け得られる道ではない、いづれか一方が回避せねば、此處を無事に通ることは出来ない、「オイ桂、貴様は何故俺が通るのに待つてゐないのだ」と、例の親の光を閃かした、實は其時桂が中途まで進んで居たのに、彼が委細構はず歩いて來たのであつた、彼は退けくと、身をすり寄せて桂を追戻さうとする、癪に障つて堪らないが泣く子に地頭だ、今戻りますと言つて後へ戻らうとしたが、身體を振向ける餘裕すら無いほど、道は全く狭かつたのに、何をグヅグとして居るか、桂を突如突き飛ばしたので、思はず水たまりへ踏み込んだ爲に、汚水の飛沫は小倅の袴をよこした、小倅は眼を逆立て、おのれ何の遺恨があつて俺に泥をはねかけたと言ふと、貴君が突き飛ばしたから斯様になつたので、少し待つて居ればよいものをと言ふと、下役の倅に理窟を言はれたので、少からず自尊心を傷けられた彼は、矢庭に腰なる刀を抜いて研りかけた、かうなつては重役も老職もあるものかと、矢庭に躍りかゝつて刀持つ手を捻ぢ上げた、小倅は痛い／＼と弱音を吹いて脆くも刀を取落したので、遂に降参してしまつた。

桂は落ちた刀身を拾ひ取つて意氣揚々と歸つて来た、さうして怯めず臆せず母親の裁縫の側へ行つて「母様此處にかういふ刀があります、私の不在に取りに来た者があつても、決して渡してやつてはいけませんよと念を押した、定めし母は、刀身の出所來歴を質すであらう、さすれば事の次第を物語らうと思つてゐたのに不思議にも、何とも言はずして、唯ニツコリと首肯いた、母親は大方我子のした事をながらにして、透視したのであらう。

占めたと、雀躍して桂は水泳の稽古に行つた、刀を奪られた重役の小伴は、體裁よく言ひこしらへて若黨に言ひつけ桂家へ刀を貰ひに遣つた、つまり遊びに氣を取られて刀を忘れたとでも言つたらしい、すると桂の母親は武士の魂を忘れるやうな方は此方へ來なさはしませんと切口上、さうして之は伴が持つて歸つたもので、決して忘れて行つたものではないと、例の刀を若黨に見せた、若黨は油をとられて悄々と立歸つたが、やがて又入つて来て、今度は平身低頭、言葉を低うして平あやまりに謝つたので、母親は、最初から斯様々と判然言へば、あの時直ぐ返してあげたものを、唯忘れたと言ふから此方では、遠ふと申さねばなりません、武士は相見互と申すくらゐ、何で否やを言ひませう、と、始めに似す心よく刀を返してや

つた桂の氣象、母親の性格が窺はれてゆかしいではないか。

十三歳で西洋訓練の鼓手

桂の父は少年の頃から侍の表道具たる武術を好み、三十六般の技藝殆ど達せざるはなしとさへ稱された人である、殊に槍劍騎馭の術に至つては、いづれも月謝を取つて教へるだけの腕前があつた、さうして斯る武藝者は大抵頑冥不靈のものであるけれども、繁忠は決してさうでなく、彼は世の推移を見る事に一隻眼を有してゐた。

夷狄と侮る外國人の火技、黒船の操縦術、訓練の方法が、我邦在來の武術と違つて、頗る進歩してゐる、やがては日本の戦術にも變化を來すに違ひないと睨んだ彼は、直ちに我兒に命じて西洋の訓練を習はしたのは、實に先見の明に富んでゐたのである。

桂は十三歳の時、西洋訓練を學ぶことになつたが、大人同様の銃器を子供に持たせることは出來ないので、仕方なしに桂に太鼓の打方を習はした、彼は重い訓練太鼓を首から釣つて、水鼻汗をたらしながら足並揃へて、笛に合はせて練り歩いた態は、今の市中廣告の音楽隊よろし

くであつたらう、殊に隊中の最年少者たる彼は、丈が低くて太鼓が大きいのだから、遠くから見れば、なんのことはない丸で太鼓の化物が歩いて行くやうであつたとか、しかし桂は太鼓が上手だといふところから、特に藩廳からの褒美を貰つた、其目録書を握つた時の彼の喜びは、他日榮爵を拜受した時にも勝つて、雀躍しつゝ父母に誇つたものだ。

此頃藩廳では頻に國政の革新を行つて、俄に富國強兵の根本義を立てようとしたので、桂の師たる藤田與次右衛門は、此時擧げられて參政となり、樞機に參畫することゝなつたが爲に、惜むべき哉、藤田塾を閉鎖せねばならない場合となつた、そこで桂は藩校明倫館の教授たる中谷亮正に就いて漢籍の修業をすることゝなつた、此人は桂の母親の異母弟で、義理の叔父ではあるし、博學の聞え高き人なので、心を罩めて桂を教導した。

十七歳にして中隊長

此頃は天下の形勢漸く變調を呈して、絕對神聖の如く考へられてゐた幕府の威令は行はれなくなり、脱藩の浪人は頻に勤王説を唱へ出し、倒幕論を主張する者もある、而して萬延元年三

月には櫻田の變あり、翌文久元年には攘夷の浪士が英國領事を襲ひ、同二年には安藤對馬守の要撃があり、生麥事件があるなど、幕府は内憂外患の奔命に忙殺された、諸藩の君臣も殆ど結束して起たんばかりに警戒を加へて居た、今にも戦争が始まらんとするの形勢に、西洋訓練を教へる者も、習ふ者も、非常の熱心を以て努力したから、連成教練は極めて良好なる成績を擧げ得たのである。

恰も文久三年五月、天地も一時に碎けんばかりの凄まじい砲聲が、馬關海峡に轟いた、驚破やと飛び立つ長州武士は日頃磨積したる攘夷の快學を行ふは此時なりと、預て預る持場持場へ就くと、敵は黒船の米國軍艦、沖合で示威的の旋回運動を始めた、さうして側舷からムクムクと一團の白煙が立昇ると、稍少時して、ドドドンと凄まじい音と共に、砲弾は空鳴を起して飛んで来る。

十七歳の青年桂太郎は、血氣湧くが如く直に防備隊に加はつた、日頃鍛へた腕の冴えを見せるは此時と、洋袴に太刀を釣下け、鐵砲を肩にして、白鉢巻草鞋穿といふ異様な扮装で防戦した、然し米艦は間もなく退却したので、長州勢は甚だしく兵士を損せず済んだが、執念深

い外夷が此儘で済ます事はない、必ず軍容を整へて再舉を計るに相違ない、其時こそはと、守備隊の編成をしたが、西洋戦術を覚え込んだ桂は、忽ち選ばれて足輕二番小隊の司令、即ち中隊長の格式を與へられた、今まで學び得た、武技を試むる時は來た、然も公生活に入るの第一歩であるから、桂の意氣天に押し、氣斗牛を呑むの概がある。

然るに幸か不幸か、敵と戈を交ふるに及ばずして和談となつた、國家の上から言へば誠に結構なことだが、彼一人から考へると、可惜功名の機を逸して、寶の山に入りながら手を空しくして歸るの心地がした、けれども此失望は長く彼を苦しめなかつた、天は彼の名を成さしむべく長州征伐の大事件を下したのである。

銃隊の目覺ましき奮戦

先に長州藩は朝敵の汚名を蒙つて、幕府より討伐の軍を差向けられ、長藩は謹慎謝罪の意を致したのであつたが、これは元より一時免れの方便に過ぎない、そこで慶應二年となつて再度の長州征伐が起された、第一回の時には藩論二つに岐れて互に墻にせめいだ爲に、有爲の

國老に切腹させたり、屈辱の條件にも従つたのであるが、今度は藩論全く一定し、國を擧げて焦土と化すとも、幕府の暴戻には従はないと、上下一致の硬論となつた。幕軍は目に餘る大勢ではあるが、統一を缺いた烏合の衆にも等しく、軍令や軍律が行はれぬに反して、長州兵は少しと雖も義を金鐵の堅きに比する一騎當千の猛者なるのみか、桂等の西洋訓練を受けた青年が、一手で銃隊を組織し得たので、短袴の身輕な扮装、幕軍の重たい甲冑仕立とは全く同日の論でない、桂の父親が疾くも着目した時世の推移は、手の掌を覆すが如くに變轉して、洋式訓練の銃器の効驗は眼前に現はれた。

桂は此時石州口の防禦を命ぜられて、始めて實戦に参加した、後年桂は當時の感想を追憶して、

「乃公は慶應二年に始めて戦争に出た、即ち初陣の若武者で、勇氣凛々たるものであつたが、それでも膽が据はらなかつたと見えて、いざ戰場となると、頻に胴顛ひが出て、幾ら押鎮めようとしても止まるものではなく、まるで蒟蒻の幽霊同様であつたが、一發鐵砲の音を聞くと、胴顛ひは薙と止まつてしまつた、恐らく如何なる英雄でも、初陣から心氣の亢進を感ぜぬもの

はなからう」

と、言つてゐた、後年幾戰場を馳驅した將軍も、始めは全く恐かな吃驚だつたに相違ない。洋式訓練に教養された桂は、一騎討の勝負を心がけなかつたから、一番首一番槍の舊式な功名は持たなかつた、彼は照尺より照星を通して、敵の強者を見るや直ちに洞然一發、真逆様に射落したので、一人の功名よりは一隊の戦功を先にした、石州口の敵軍は、彼の隊によつて散々に断け慄まされ、我勝ちにと敗走した、何しろ身軽な扮装で、縦横無盡に山野を駆け廻り、遠くから鐵砲を撃つのであるから、甲冑仕立の幕軍は一たまりもなく撃退されたのだ、爾來長藩が銃隊専門の軍隊組織となつたのは、要するに此經驗に因るもので、桂の父繁忠の先見によるのである。

西郷と會見禁闕の視察

翌慶應三年、徳川將軍は愈よ政權を奉還せねばならぬ場合に臨み、朝敵の汚名を受けた長州藩主は、内命によつて、藩兵を上京させる事となり、桂は藩主より拔擢されて、藩兵の統

たわい」

大きく叩けば大きく鳴り、小さく叩けば小さく鳴ると言はれた西郷の答へは、果して要領を得ぬやうであるが、禁闕の地理を見覚えしめて、有事の時の備へに充てしめんとする用意には流石の桂も先手を取られたやうな心地がして、斯ればこそ迂濶な事は言はれぬと、彼は西郷の

率者となつた、其時藩主より授けられた任務といふのは、若し徳川將軍が政權を奉還せず、兵力を以て禁闕を脅かすやうな虞れがあらば、畏くも鳳輦を守護し奉つて京都を出て、道を山陰道にとつて本藩へ行幸を仰ぎ奉れ、此事については薩藩の名士西郷吉之助が萬事に與つてゐるから、凡てを彼に相談せよといふのであつた。

桂は十二月十九日京都に着いて、直に薩藩の陣所なる相國寺に西郷を訪ひ、藩主の言ひつけを申し述べた、然し流石に主上を奉じて本藩へ行幸を仰ぐ心算だとは言はなかつた、西郷は、「左様ごわすか、大政奉還の儀は容易ならぬ一大事でごわす」借用金を返す如くには參らぬ今以て會議中でごわすが、所詮は御返上の外致方はござるまいと存する……貴方は萬一の準備の爲に、能く、御所内の地理を覚えられるが宜しからう、拙者唯今其手續を致し置きまし

人物に感動した、さうして即時案内者に導かれて、九門の中の地形を視察し、早くも胸中に守備の方略を畫いたので、日没の頃辭して假の宿りに就いた、桂は其時二十歳の青年であつた。

勅諭を拜して急ぎ歸國

明くれば十二月二十日、桂は部下の兵士に銃器の手入を命じなどしてゐた、其日の京都は實に何とも形容し難き重苦しさで、雨か風か、事愈々急なりと覺えた正午過ぎ、西郷の密使が突然長藩士の陣屋へ來て、即刻桂殿に面談を得たいといふので、桂は取るものも取敢へず急いで相國家へ駆け附けた、途上の光景は何となく勇々しく、殺氣は京の天地を包んで、魔界の底へ落すかと物凄しい。

今大内から退出した西郷は、微笑を浮べて桂を請じ入れ、

「桂殿喜ばつしやれ、大政奉還と結着致しましたぞ、祝着じやごわさぬか」

「へー」と、思はず氣抜けがしたやうに答へた桂は、心中切に開戦を期し、先年藩兵が會桑二藩の爲に不覺を取つたのを、此一戦で報復しようとして居たのだから、西郷の言を聞いて

て力抜けがしたのだつた。

「今朝幕府より大政返上の上書を奉り申した、……それに就いては大膳大夫殿御親子の勅勘を免ぜられ、官位を復された上、父子の中御一人、直に朝參致されべき勅諭が、今日中に下される筈でござす、貴君は御受の用意を致して、勅諭を承はると同時に、急ぎ國許へ下られるやうに致されるが宜しい」

「左様いたすと、禁裡御守護は如何いたすでござらうか」

「最早京都で鐵砲の音も致すまいじや、自然致したところで、拙者に考へがごわすから、安心致されるがよい」

「然らば召連れましたる藩士は、此儘止め置きまして、手前二人の者と、至急に取つて返すと致します」

「それが一段でござす、萬一事ある場合、御藩の兵士を借用致す事もござさう」
一時張りつめた氣も緩んで、本意なき思ひをしたものゝ、好意ある西郷の言葉に、桂は急に肩身が廣くなつた心地して、謹んで勅諭を拜すると共に、同僚木梨精一郎を伴ひ、夜を日に

繼いで長州に歸るべく、京都の假陣屋を出立した。

刺客生擒りの大手柄

二人は早駕籠を打たせて、其日の黄昏時兵庫にかゝると、折柄幕府の募兵たる新選組のあぶれ者が、神戸兵庫に屯して町家を脅かし、物資の徴發などをやつて、四邊は今にも戦の巷と化せんかと思はれるばかり、人心恟々たる其中を、大切の身體なる二人は、虎の尾を踏む心地して其處を無事に通り過ぎ、夜をこめて明石へと向ふ途中、舞子の濱邊から覆面したる怪しき二人の武士が、同じく早駕籠で山陽道を下るのに出會した。

明石の驛へ彼の武士より一步先に着いて、宿役人の目代の所へ来て、駕籠繼立の申付をしてゐる處へ、怪しき武士は遅れて乗附けて来た、さうして駕籠の事から宿役人と争つてゐるのを見ると、豫し木梨が顔見知りの水戸の浪士である、彼等は先に馬關砲撃の戦の時、長州人に交つて黒船を相手に戦つた、其時木梨の腕前を見てゐるから、今は新選組に入つて、桂や木梨を殺しに来たものゝ、とても手が出せなくて焦れてゐる。

そこで木梨は甘言を以て二人を釣り出し、尾道まで誘き出して、そこへ来てゐる筈の長藩の一番大隊へ渡してやらうと考へ、隔意の無い風をして、共に連立つて備中矢掛の宿まで来た、そこで桂は武士等に巧く誘ひをかけて、尾道は繁華な町だから、一夕お名残の遊興でもいたさうと、遂に尾道まで引張つて来た、町は何とはなしに殺氣立つて、戦争仕度の武士が往來してゐる、新選組の武士は怪訝な顔をしてゐると、突然本陣の店先から大刀を横へた四五人の武士が、ズラリと顯はれ出でた、これは即ち長藩第一大隊の檢役である、木梨は、

「この同行の二人の方は、明石より當地まで我等兩人をお送り下された幕府新選組の刺客でござる、宜しく御役方より御禮を申し下され」と、眼で知らした、うま／＼良に落ちたのかと地團駄踏んだがモウ遅い、二人の武士は慌てゝ逃げ出さうとするところを、忽ち檢役に叩き仆されて、兩刀を取上げられた、上 高手小手に縛られて首を打たれてしまつた。

再度上京して至尊に拜謁

此時木梨は己むなき事があつて、尾道に止まることとなり、桂だけが山口に歸つて勅諭を藩主に傳へ、我家に一睡の夢を結ぶ暇もなく、再び三田尻から船に乗つて京都に上つた、此船には今しも勅諭を免ぜられて入京する三條大納言以下の六卿、大山巖、西郷從道、井上馨等の英傑が便乗したので、瀬戸内の碧水青松を指點しつゝ、虹の如き氣を吐いて大阪に上陸し、同月二十八日京都に入つた。

入洛の日には禁門内に於て、薩長土藝四藩兵士の分列式が行はれ、長くも車駕親臨せられて親しく閱兵あらせられた、参加部隊は薩の三大隊、藝の四小隊、土の二小隊と長の一大隊であつた、而して長藩兵の指揮を取りたる桂は、まのあたり天顔に咫尺し、匹夫の光榮一身に餘りて、身もすくむばかりに覺えた。

當時は各藩邸に於てすら、御目見得以下の士は藩主の顔をだに容易に見る事が出来ない有様であるのに、草莽の微臣が一躍して一天萬乗の至尊を拜し得たのであるから、只有難さに涙こぼるゝばかりであつたといふ。

鳥羽伏見の戦に戦況視察

翌くれば慶應四年の正月二日となつて、形ばかりの冷酒に新年を壽ぐ折柄、幕軍は大舉上京を企てるといふ飛報が、大阪方面から櫛の齒を引く如くに来る、之を聞いた薩長の武士は、長評定の後、敵を鳥羽伏見に邀へ撃つべく決定したが、其時敵の先鋒は早くも鳥羽口に迫つて来た、桂は相國寺の薩藩の本營で、小松帶刀、西郷隆盛、大山巖及び長藩の幹部と軍議を凝らしてゐたが、兎も角も伏見口の状況を捜らんものと、本營の大庭から馬に跨つて、東福寺なる長藩の本營前まで来ると、伏見口も開戦したと見えて、銃聲が手に取るやうに聞える、藩兵は結束して後詰に繰出してゐる、長藩の戦略家と聞えた山田顯義は、帷幕の裡に地圖を案じて頻りに兵の配置を考へてゐたが、桂の顔を見ると、當藩の受持たる伏見口の戦況を見て、直ぐ報告して貰ひたいと言ふ。

主將の一言を聞きも終らず、ヒラリと馬に飛び乗つた血氣の若武者は、破烟を蹴立て、京橋口へと急いだ、隊長林友幸に會うて戦況を巨細に視察し、再び馬首を回らして東福寺に乗りつ

けると、味方の不利の報告や、敵の情報に胸を衝かれてゐる主將山田は、桂と共に軍議を凝らしてゐるうちに、日没に及んで戦争は自然休止となつた。

援兵の増潤を依頼の使者

翌四日の曉、井上馨は山田顯義と協議を遂げ、味方が斯る小勢にては幕府を防ぐべき手段がないから、速に然るべき使者を本國へ遣はして、當地の状況を具し援兵を催促せねばならぬが、誰に此重大なる任務を托すべきかと言ふのであつた。

「それは桂が宜い。……オイ桂氏、貴公御苦勞でも此使を引受けて貰ひたい、……戦場の功名よりも大切の任務じや、王政復古が出来るか否かといふ場合、一に貴公の成功に繋るわい」思はぬ任務を命ぜられて、此儘戰場を見棄るは残念ながら、兎や角陳する場合でないので軍服を脱ぎかへる暇もなく、其儘有合せの袴羽織を着け、東福寺より直に西を指して下つたのである。

ところで、何分にも敵の根據地を抜けて行かねばならぬ危険に加へて、沿道諸藩の向背すら

解らぬ今日、長州藩士では無事の通行が賈束ない、重任を帯べる桂は大に考へたが、幸ひ備前池田侯の老臣に戸倉修理といふ勤王の士があつて、此度の参謀會議にも加はつてゐるから、此人の家來と稱して、備前の足輕一人を供に借り出立することに決めた、備前藩は京都の守護に任じてはゐるが、藩主は徳川慶喜の同胞であるから、官幕兩軍に取つては謎のやうな形で、備前藩士と名のるのは、最も策の得たるものである、殊に戦況を本國に報告するための使者だといへば、舊幕と池田との姻戚關係を知る者には、最も至當の事として首肯される、桂は實にうまく考へつたものだ。

備前藩の徽章を佩用して、四日の午後に戦の最中なる京都を後にし、道々關所の應對は備前言葉の足輕に任せ、その又足輕は極めて辯才者で、幾たびか難儀の場合をも巧く切抜けた、さうして六日の夕刻姫路へ着いたが姫路は、舊臘押詰つて木梨精一郎と共に、堂々と長州藩士で通つた所だ、若し問屋場役人に見覚えられてゐたなら其れこそ大變だと、わざと落附きはらつて、旅店の奥へ通り、足輕を目代所なる宿役場へ遣つて、駕籠をととのへさせると直ちに飛び乗つて、脱兎の如くに急がした、七日無事岡山に着いて、重役に面會の上戸倉修理の傳言を

述べ、こゝで始めて長州武士に復し、山口の藩廳に着いて君公に謁し、京都苦戦の次第を述べ、取敢へず第五大隊の増援を得、自ら之を率ゐて海路を京都へ引返した。

船が備前の牛窓港に着いた時、大阪落城の報に接して始めて官軍の勝利を知り、安心の胸を撫で下したが、折角援軍を連れて来たのに、早くも敵を失つたのに、聊か力抜けがした、さうして第五大隊を隊長毛利左門に托して海路大阪に向はしめ、自分は陸路を急いで京都に着し、本藩の様子を遠征軍の幹部に報告した。

洋行の當て事が外れた

桂は戦争の経過を聞き、やがて賊徒征討の官軍が東海北陸兩道に向つて出發したのを見て、日本の革命は最早其緒に就いた事を察した、而して此戦争が終結したる際には、日本の國情は俄然一變し、萬事舊態を改めて、外國との交誼も親睦になるから、日本の進運を期するには、遠く海外に遊んで新智識を求めねばならぬと考へた、さうして先輩なる木戸孝尤と廣澤兵助に相談をかけた、ところが木戸の言ふには、

「貴公の考へは誠に達觀ぢやが、御維新勿々の折柄、新政府でそれを實行する手順は附くまい、それよりも一旦藩へ歸つて、三田尻の兵學校に入學し、時機到來を待つたが宜しからう、其時機も決して遠き將來ではござるまい」

また廣澤は廣澤で多少の便宜を教へてくれた。

「幸ひな事には、三條公の令弟が近畿漫遊の思ひ立ちがあるさうじやから、貴公は令弟にお伴して大阪神戸邊を案内しながら、緩々洋行の心組を致したら何うか、令弟もやがて洋行の思召じやさうだが、何分にも京都から一足も外へ出たことのない方じやで、先づ足ならしめて大阪神戸を漫遊されるといふ事じや、……それなら乃公から話し込んであげよう」

桂は兎も角も後説に従つて見ようと、乃ち廣澤の口入で、三條公令弟の案内者となり、大阪から神戸へ来た。

神戸には外國官判事として、當時の新智囊たる伊藤博文が居た、同藩出身ではあるし、日頃の知合でもあり、直に訪問して洋行一件の相談を持ちかけると、伊藤は屢點頭いて、

「イヤ、君の考へは至極じやが、御同様大名の家中出身がそのやうな事を持出したところで

長袖の小田原評定が始まつて、容易に聞き届けられるものでない、何分にも此頃は公卿堂上方の権力が強いから、廣澤の考へ通り、三條公の令弟に洋行するやうに勸めて、貴公は其伴人となつて行つたが宜しからう、拙者も便宜を得られるやうに、此方から京都の方へ言ひ送つて置かう、先づく油虫で行くに限る」

伊藤判事は外國官として、縉紳家の洋行の必要を新政府に建言したので、果して三條公の令弟は外國留學を命ぜられたが、其隨員は我こそ桂が期待したに反して、公卿の諸大夫や縁故の者が隨從する事となつて、桂は薦に油揚をさらはれた形となつた。

流石の桂も快々として樂まず、神戸へ来て尙最後の運動をして見たが、結局駄目だといふことを知つて、そこで木戸の言に従ひ、藩の三田尻兵學校へ入つて語學を修め、然る後洋行の運動をする事に決心した、それに就いては目下京都に滞在する藩公の扈從役を辭任せねばならぬから、再び京都へ上るべく、折柄上京せんとする伊藤判事と同行して入浴したが、未だ辭職を申出さざるに先だつて、藩公より第四大隊第二中隊の司令役を命ぜられた。

中隊長絶對服従を命ず

此第四大隊の第二中隊は、當時神戸の守備に就いてゐるが、孰れも血氣盛りの荒武者揃ひ、豪傑連の寄合同様であつたから、却々大抵の人には統率されない、第一期の司令官は屠腹して憤死し、第二期のは部下の不統率に引責辭職といふわけだ、これは畢竟彼等が官命の隊長を厭ひ奇兵隊の如く、自ら隊長を選ばんとする我儘に外ならぬ、この難物が、今度九條大納言が奥羽鎮撫總督として出陣するに際し、其守衛隊に當つたのであるから、之を制馭するには並大抵な者ではいけないとあつて、借こそ桂に割當てられたものだ、桂は益々貧乏鬨を引き當てた。

彼が司令官に任命されると殆ど同日に、第二中隊は神戸から大阪に移された、さうして下士官の首席にゐる男が、新司令官の出迎へとして京都へ來た、此男口先こそ態と慇懃だが、腹の底では何を此小僧ツ子かと、十分輕蔑してゐるのが能く見える、そこで桂は明朝同船して阪地に下らうと約束して置いて、故意に時刻を遅らして其男を怒らせ、儼然として一言の下に下士の膽を挫いで後、徐ろに軍隊組織の事を説き聞かせ、船中に於て滔々と軍隊規律の重んずべき

を辯じた、それから着任すると直ぐ第二中隊に臨んで、全員を廣場に集め、隊長就任の披露をなし、軍人の本分を説き聞かして、破天荒なる就任披露をした、翌日は下士以上を呼出して、中隊に關する希望を陳べさせると、彼等が第一の希望は補助長官留任の件であつた、桂は言下に之を斥けて、さて辯舌流るゝが如く其不心得を諭すと、口不調法な武辯者は何とか抗辯しようと思ふが、思ふ事が言葉となつて唇に上らぬ、くどくどいひながら始めの氣勢は消え失せて了つた。

斯の如くにして就任匆匆々々彼の毒氣を抜いた新隊長は、其日の午後兵士を集合して、神文の如き軍令狀を、彼等の面前に讀み上げしむべく、之を隊中第一の勅者に命じた、此軍令狀の中には、隊長の命令には絶対に服従せよといふ明文があるので、勅者は冷汗を流して朗讀を了つた、斯の如くにして駕御された驛馬は奥州出征の準備に取掛つた。

戦功により祿二百五十石

奥羽の戦役は、所謂賊軍の勢ひ猖獗を極めて、官軍の悪戦苦闘は實に甚だしいものであつた

桂は各地に轉戦して、武士的行爲を誤つことなく、一舉一動武士道の定規を逸せずして、故郷に錦を飾つて凱旋した、桂は當時二十一歳の青年で、奥州鎮撫副總督の參謀副役として活躍したのであつたが、焦心苦慮の結果、一時は肉落ちて骨立する程であつた、さうして翌明治二年六月二日論功行賞の御沙汰があつて、桂は永世祿二百五十石を下し賜はつた、最低額ではあつたけれども、當時漸く一人前になつた青年として、回天の偉業を成功せしめた功臣と共に、行賞に名を列せらるるに至つては、男兒の面目之に過ぎたるはあるまい。

外國語學所を中途退學

横濱の太田村に外國語學所といふのがある、これは舊幕府の創立したもので、外人の教官は凡て佛國人であるが、桂は奥羽戦役中大村益次郎の部下に働き、大村は外國語學の研究を桂に勧めて、洋行の準備をなすべく説いた事もあるので、明治二年桂は布衣の一書生として江戸に來り、莫逆の友人と共に外國語學所に入つた、此時校規に従つて帯刀を脱し、祖先以來男兒の頭を飾つた鬘をふつと切り拂つて、所謂散髮頭なるものになつた。

入校の翌日から教場に出て、始めて横行文字を見た桂は、豫て覺悟の事ながら随分當惑したらしかつた、殊に外人の教官は意地悪きまでに嚴格であるから、曾て參謀副役として三軍を奥羽の野に叱咤したる彼としては、少からず自尊心を傷けられて、不平不満に堪へなかつたが、此處が辛抱の仕處と、己れを空しうして忍耐したのは、桂としては非常の苦痛であつたと思はれる、然し忍耐の結果は、横文字も大分解るやうになつたので、面白味が加はつて来て、初めのやうな不満な悪感情は一掃されたが、不幸にして入所の目的なるものが、頗る覺束なくなつて来た。

それは大村兵部大輔が、此語學所を再興した目的といふのは、將校の候補者たるべき生徒に語學を修養させ、然る上に軍事研究の爲歐洲へ留學させるつもりであつたのが、大村が暗殺されると共に、學校の目的も自然に變改されて、語學所の卒業生を洋行させるなどいふ事は、誰も金頭に置いてゐなかつた、加ふるに新政府は財政窮乏で、留學生を送る費用などは所詮出さうもない、殊に翌三年の夏語學所を大阪へ移すこととなり、校名を陸軍幼年學校と改稱するに及んで、桂が入所の目的は終に絶望の己むなきに至つた。

斯くなる上は在學の必要もない、的のない官費留學などを斷念して、私費で出掛けてやらうと決意して、半途退學を申出でやうとすれば、幼年學校と變つてからの校規は、生徒の勝手に退學するを許さぬことになつてゐる、こんな時には假病を遣ふべしだと、俄に病を言ひたてにして醫官の診斷を受けると何等病氣はないといふ、そこで陸軍病院 正の緒方軍醫正の所へ出かけて、當面の目的を語ると、桂の履歴を知つてゐるのみならず、氣概のある人だつたから、委細承知して診斷書を與へてくれたが、偕其診斷書を以て直に退校する事は出来ない、若し退校するとなれば、終身兵役に堪へずといふ事になる。

ところが時の兵部大丞山田顯義は、此事を聞いて、豫て知合ひの仲であるから、桂を諭して曰ふには、

「今兵役に堪へざる者として退校すると、將來貴公が陸軍に入らうとする場合に、少からぬ障碍となるから、今少し辛抱して卒業したらどうか」

山田の意見は有難いが、目的の無い所へ暢氣に構へるくらゐ愚なことはない。

「宜しうござる、是非洋行を致して、見聞を擴めたいと存じ申すで、將來軍職に就くこと

が出来ずとも致方ござらぬ」と明言した、山田も然らばと始めて首肯き、やつと退校の手續をしてくれた。再び軍職に就けないといふことは、桂の爲に絶大な苦痛であるけれども、當時朝令幕改の規則などは、二三年のうちに何う變るか知れたものでない、況んや自分が學成つて歸朝した曉には、此方で軍職はお断りすると言つても、政府の方から懇請するに違ひないから、何も心配するには及ばないと、窃に舌を吐いて居たかも知れない。

私費を以て三年半の留學

愈々自費洋行と決したる桂は、一度郷地へ歸つて家事を處理し、再び上京した時に、恰も好し、大山巖、品川彌二郎の兩人が、普佛戰爭の視察として政府より派遣されるので、桂は此二使に隨いて渡航したなら、凡てに便宜があらうと考へたので、直に同行を申出で、八月某日横濱を發し、太平洋を横斷して米國へ着し、更に大西洋を英國へと渡航した。生來始めて異郷の人となつた桂は、衣食住を始めとし凡ての事の異なるに驚嘆し、大に

もされたが、肝腎の佛國留學は、戰亂の爲に思ひも及ばぬ羽目になつてゐたのに尠からず失望した、さうして段々様子を探つて見ると、戰亂は容易に鎮定しさうもなく、佛國は連戰連敗の有様で、學問などは其方退けになつてゐるから、寧ろ留學先を改めて、獨逸にしたがよからうと言ふので、英國から獨逸に着いた。

當時伯林には桂より先に留學せる青木周藏、佐藤進などが居たので、是等の人々の助勢で、獨逸語を勉強する便利を得たことが少くなかつた、間もなく自分の用が辨ぜられるくらゐに語學も習得したから、翌明治三年、豫備少將パリスの家に寄寓する事となり、此人に教はつて軍事を研究する事二年半に及んだ、パリスは西曆千八百六十六年の埃普戰役に聯隊長となりキヨイニヒクレーツの大戦に赫々たる武名を擲した名將で、軍事學上の著書も少くなかつた。彼是するうちに早や三年半の月日が経つた、此間に獨逸の軍隊に就いて實地の見學をしたり兵器兵制などの取調べに日も又足らざる有様であつたが、心細いのは學資の缺乏である、彼は國を出る時、戊辰役の賞典永世祿二百五十石を落廳に托し、學資として送つて貰つて居るが、それを金に換算すると極めて少額なところへ、米價下落と來たので學資を支へる事が出来ない

尤も今日となつては、願ひさへ出せば官費を支給される事は確かであるが、折角今まで私費でやつて来たものを、今更軟化して官費生になるのは何う考へても嫌だ、寧ろ此際一旦歸朝して官途に就いた後、改めて再度の留學をする方が、無位無官の一書生として來てゐるよりも、利便が多いであらうと考へたので、明治六年十一月、住み馴れし伯林を出立して歸朝の途に就いた。

始めて陸軍大尉となる

桂が獨逸より歸朝したときは、西郷一派の征韓論破れて、文治派朝に立ち、不平の徒世に充ちて暗々鬱々、人心恟々たる有様であつた、十二月下旬横濱へ着いたが、廟堂に於ては西郷辭して故山に歸臥し、薩長出身の將帥皆官を辭し、後藤板垣副島江藤亦閑地に就いたといふので桂は品川へ着くと先づ第一に同藩出身の伊藤參議を高輪に訪ね、更に先輩として推服する木戸參議を訪問した、其時木戸は馬車顛覆の爲に負傷して臥床中であつたが、新歸朝の珍客を引見して其觀察を聞いた。

木戸孝丸は征韓論に於て岩倉大久保と行動を一にしたけれども、其眞意に於ては必ずしも岩倉大久保と同型ではなかつた、彼は岩倉の術策を喜ばない、是を是とし非を非とし、正々堂々と論議するを以て政治家の本領としてゐたから、今回の政變以後は頗る時世に平かならぬところがあつたらしい、彼は桂に向つて臺閣の雲行を語り、而して桂をして此渦中に投ずることを避けしめた。

「君は元來軍人志望であるから、以來は陸軍の人となりたまへ、今日の如く黨同異伐の政治社會に身を投じたところで、國家に貢献することは出来ない、將來軍人として政争の外に立ち、軍制の改革をして、國家の干城となるのが君の一身にとつても利益であらう、僕は君の爲に周旋の勞を辭さぬ」

と親切に言つてくれた、さうして身の定まるまでは僕の家に寄寓したまへと、頗る同情のある待遇をしてくれるので、其儘木戸邸の食客となつたが、翌明治七年一月、陸軍からの召喚狀が届いた、言ふまでもなく木戸の斡旋によつたもので、出頭して見ると、陸軍大尉に任ずといふ辭令であつた。

桂は辭命を拜受すると、直ぐ其足で陸軍卿山縣有朋の許へ、任命の挨拶に廻つた、山縣は桂が官等の低いのに不平を懐いてゐるだらうと思つたのか、

「貴公の留學中に、我邦でも陸軍の秩序が次第に立つて來た、初任は大尉を超えざる規定であるから、當分それで辛抱されるがよい、近くに何とか取計らふであらうから」

と慰めた、實際桂は獨逸の兵學を研究して來た新智識であるから、黙つて大佐であるべきにと、心中不満であつたに違ひない、然し妙たる一大尉たりとも、軍事上の智識に就ては、己れを凌駕するものあらざるべしと信する彼は、却つて卑官に居て上官の師となるも、人生の會心事だと皮肉に考へたので、笑つて山縣に答へ、歐洲諸國の例を引いて、初任は少尉に限つたが宜しいとやつた、山縣は負うた子に淺瀬を教へられた形で、以來初任は必ず少尉に限られた此年五月、桂は初任以來半年ならざるに少佐に進み、陸軍參謀局の樞要な機務に參する事となつた、參謀局といふのは、桂の進言によつて此際新に設けられたものであつて、陸軍行政と參謀部とは、全然別箇のものである以上は、從來所屬の局部より之を分離し、獨立の參謀局を設けねばならぬと、頻りに新智識を振り廻はして建議したのが、幸ひに用ひられたものである、

而して是れ實に今日の參謀本部の嚆矢であるのだ。

侯爵 松 方 正 義

我邦財政のオーソリティーとして、實業界に徳望を擔ひ、更に子福長者として世に知られたる松方は、幼にして世路の辛酸を嘗め盡し、幸ひにして大久保利通に知られ、其の指導誘掖によつて漸く立身出立の緒を得、明治十四年大藏郷となり、十八年内閣官制の改正に伴うて大藏大臣となり、爾來内閣は幾度か改造されしも、依然として財政の樞機を握ること八年、其間自ら首相となつて内閣を組織すること二回に及んだ、眞に明治の元勳。

維新以前に於ける彼の行動

松方は幼名を助左衛門と呼び、天保六年鹿兒島城下の士に生れた、士といつても極めて小祿で、家は甚だ貧しかつた、おまけに彼は三男であるところから、幼い頃から具さに世路の辛酸を嘗め盡した、二十歳の頃、別家しているく仕途を求め、やつとの事で藩主の舍弟島津久光の従士となつた。

當時久光の御側役には大久保一藏（即ち後の利通）が居て、松方の重厚な性質に望みを屬し、文久二年三月久光が上洛の際に、特に松方を伴うて京都の物情騒然たる裡に活躍せしめ、爾來屢々主侯に扈從して京都や江戸へ往來することとなつた、即ち松方の前半生は、全く大久保利通の指導誘掖によつて、國家に奔走したのであるが、維新以前に於ける彼の行動は、總て鳥津久光に蔽はれ、又大久保利通の陰に隠れて、他の多くの元勳の如く花々しくなかつた、従つて其傳ふべきものは無いといふ有様だ。

才智と手腕を世に認めらる

彼の始御門の戦ひには、松方は長槍を揮つて敵勢中に突入し、方顔にして體軀の偉大なる薩摩軍人は、大に驍名を馳せて、其勇膽を歎稱された、後年寛厚の子福長者となり、圓滿素僕の良爺として親しまれた人も、其壯年時代には血氣横溢、頗る膽略に富める勇士として推重されたのであつた。

明治元年正月、幕府の軍が鳥羽伏見の戦に敗れて、官軍が東征の師を發するといふことに

なつた時、長崎奉行であつた幕府方の河津祐邦は、大に恐れて何處へか逃走した、すると長崎に居る各國の領事等は警戒を嚴にし、長崎の取引は全く杜絶するに至つたので、各藩から役人が出張して事務を執ることとなり、松方は藩命に依つて長崎に赴いて、長州や土州や肥州を始め、十三藩の役人と相談して、會議所を設け、假りに自分が主となつて奉行の事務を執り、一方各藩の領事に通告して、従前の如く取引を續行せしめたので、長崎市民も初めて安堵の思ひを爲し、内外の秩序を維持することが出来た、之に依つて彼の機略と、事に當つて狼狽せず、沈靜にして能く形勢に應ずるの才智と手腕とは、忽ちにして世に知らるゝに至つた。

我國財政のオーソリチー

明治元年閏四月、初めて府縣が設けられて、豊後の西部に日田縣が置かれた時、松方は選ばれて其知事となつた、時恰も東北と北越には征討軍が戦つて居たから、人心恟々として業に安んぜず、動もすれば治者の行政に不満を唱へ、竹槍席旗の一揆を起しかねまじき時代の事とて

彼は寛仁の態度を以て縣民に臨み、良二千石の譽れを博した。

時に朝廷は新に筑、豊の知事を更送し、在來の知事を權知事に任じて、官等を一等下げたが松方は治蹟大に見るべきものがあるといふので、舊のとほり其地位を保つことが出來た、さうして知事たること二年、中央に出でて大藏省に入り、租稅助に任ぜられ、明治三年民武大亟に拔擢せられ、後豊後地方に浮浪の徒出沒するとの報告があつて、彼は其等をして正業に就かしむべく誘導するの命を受けて、同地方に派遣された。

此頃神奈川縣令陸奥宗光は、地祖改正を提議したので、政府にては地祖條例を發布する事となつて、松方に之が調査を命じた、彼は精勵事に當つて其功顯はれ、明治七年には大藏省三等出仕兼租稅頭に任命された、是等の陞進は何れも大久保利通の推舉に因ること言を俟たぬのであるが、これより松方の財政的手腕は漸次に發揮されて、爾後三十年間、我國財政のオーソリチーとなつた。

紙幣整理と日本銀行創立

明治十四年四月、我邦紙幣の價格は甚だしく低下し、銀一圓に對する一圓七十九錢五厘となつた、そこで松方は、第一紙幣を鎖却すると共に、第二正貨を蓄積して紙幣價格の回復を待ち兌換を實施するの計畫を樹て、之に依つて紙幣整理の實を擧げんとした、依て松方は天下に宣言して、現在の如く下落せる紙幣の價格を恢復すれば、其如何なる手段に依つても、物價下落して一時農工商を困難に陥らしむるは、豫め覺悟せねばならぬ、しかし是は國家財政の長計より見れば、眞に一時の現象であつて、敢て恐るゝに足らざるのみか、此時實業家は資本の投下を試み、再び財界が敏活の状態となるは自然の數である、一時的恐慌を憂へて紙幣整理を斷行せずんば、何れの日にか之が整理を成就することが出來ようぞと、斷々乎として其所信に邁往した。

斯くて彼は從來の豫備紙幣を廢し、これが回收は準備金の貸付金を處分して得たる通貨及び中仙道鐵道公債金を一時運用し、尋で之に代ふるに將來國庫資金の運轉を滑かならしむるの辦法として、大藏省證券を發行することとした、又彼は兌換券發行の特權を專有する一大中央銀行を設立する意見を建議し、十五年五月、日本銀行が創立された。

伯爵土方久元

幕末騒擾の際三條實美以下七卿が、倭者の爲に陥擠されて勤勤を蒙り、西下して國事に奔走するに當つて、其蔭になつて働いたのは土方である、誠忠なる諸卿の所志は彼に依つて達せられ、困苦と戦ふこと六年の長きに亘り、遂に斯の如き維新の革命は成つたのだ、土方は勤王の志篤き明治の功臣である、彼は舊幕の南町奉行の後を襲いだ市政裁判所判事に任ぜられて以來、官界に在つて第一次伊藤内閣の農商務大臣となり、後宮内大臣として明治天皇の御信任が厚かつた。

遊學の目的で江戸に上る

土方は天保四年十月高知の城下に生れ、父は從四位久用と云ひ、由緒ある系譜を持つる舊家である、彼は十歳の頃から書道と同藩士西森三藏に學び、十二歳の時から漢學を藩儒竹村節に就いて學び、十五歳から擊劍を藩士角田三左衛門に學んで、安政四年二十五歳の夏、笈を負うて江戸に出で、専ら研學したのであるが、當時天下の大勢は混沌として、暗中に同士撃とでも云ふべき有様であつて、彼の天保弘化の頃までは、内外の紛擾も左程ひどくはなかつたが、嘉

永六年ベルリの渡來後、即ち安政元年頃から以後は、小波瀾が幾つともなく東西南北から起つて、右に左に衝突し、遠い大きい變革の原因が冥黙の裡に成就し、外國の壓迫が激しくなるに伴れて、殺氣の氣運が忽然として沸騰し來らんとする趨勢にあり、且つ將軍繼嗣問題で大議論の起つた際であつた、しかし土方は元來遊學の目的で來たのだから、天下の事に關係する考へは毛頭もなく、唯々研學修養に關して、兎や角と思案をしてゐた。

學者の門を叩き意見を聞く

すると彼より前に來て居た同藩の者が、彼の先生が宜からう、此先生が好からうと頻りに先生を勧めた、當時土方の考へは詩や文章を修めようと思つてゐた、ところが種々忠告する者もあり、又彼も大に天下の形勢に鑑みるところがあつたので、高橋觀瀾と共に、當時の儒者たる佐藤一齋に、門弟の紹介を得て面會を求めた、然るに一齋は最早老年で一向話にならないと云ふので、今度は藤森天山の所へ行つた、ところが天山は、學問の話は全くそつち退けにして、盛んに時勢論を掲げ氣焰萬丈、慷慨悲憤の筆は實に壯快であつた、恰度其日天山の塾には立花藩